

五十嵐力講述

近世獨逸文學史

東京專門學校出版部藏版



# 近世獨逸文學史目次

緒言

一頁

(附古代獨逸文學略說)

第一期

一〇

第二期

一四

第三期

三四

第四期

四三

第五期

五一

近世文學

第六期

六一

第一章 ..... 六一

當期の特質—文學諸派—ス井ス、ライプチヒ兩派の論争—ゴットシエット—ボルドメル—  
—フライテンゲル—小説作者—ハルレル—ハーゲドレン—宗遜派—クワイム及び  
其の朋友—頌詩作者、散文小説フィクション

第二章 ..... 八五

普魯士のフリードリヒ第二世—歴史家—通俗哲學者—唯物論者—美學の著者—  
ンケルマン

第三章 ..... 一一三

クロツプストック—レスシンク—井ーランド

第七期

第四章 ..... 一九三

ゲーテの青年時代—宗教政治及び文學—「ストアルム、ウンド、ドラング」—ハーマン—  
コビー—ヘルデル

第五章 ..... 二二七

『ゲツツ、フォン、ヘルヨヒンゲン』『ヘルタルス、ライテン』『激動突進』派『ハイナブンド』散文作家

—カント

第六章 ..... 二五一

ゲーテが作の梗概『エケモンド』『イロゲニア』『タツツ』『ハルマンとドロデア』

第七章 『ファウスト』 ..... 二七五

第八章 シルレル及び其の著作 第七期に於ける二流以下の作家 ..... 二八五

目次畢

# 近世獨逸文學史

五十嵐 力 講述

## 緒言

### (附古代獨逸文學略説)

文學史を講ずるの道、數多あれども、其の主なるは年代の序を逐ひて、むねと作家を傳じ、名作の梗概を紹介する敘述的方法と、時勢の推移思想の傾向を根據として、それが文學に反映したる有様を説明する批評的(又は精神的)方法との二つなるべし。前者には讀者をして作家と著作とに就きて着實なる知識を得しむる益あれども、其の知識は統一なき斷片たるを免れ難く、後者には時勢思潮に就きて概念的知識を得しむる効あれども、往々空論に流れて、其が根據たる重要な事實を看過する弊あり。蓋し、敘述的方法と批評的方法とは、二者共に至れるものにあらず。最良の方法は二者の中を取りて、且つ敘述し、且つ批評し、讀者をして各時代に於ける思想の傾向、文學の精神を知らしむると共に、作家と著作とにつきて主要なる事實を會

得せしむるものならざるべからず。予は、獨逸文學史を講述するに當たり、則を茲に取りて、一方に於いては、作家の畧傳を述べ、名著の梗概を紹介して、突飛の空論に流るゝを防ぎ、他方に於いては、時運と文學との關係を叙して、統一的知識を得しむるを力むべし。

獨逸國民はアリアン人種の一派なり。彼等は中央歐羅巴の大部を占領し、人種に於いても、國語に於いても、純乎たる一國民を形づくり、十二世紀以來自ら稱してドイツ、チェンと云へりき。高地獨逸語(獨逸語に高地獨逸語と低地獨逸語との別あり、前者をば北或は下獨逸語とも稱す、後には其の説明を略す。)は、其の文學上の用語たり。高地獨逸語は紀元後六世紀より現今に至るの間に、著大なる變化を爲したれども、大凡に別かちて上古、中古、近世の三つとなすことを得べし。上古の高地獨逸語は、六世紀より十一世紀に至るまでの、文學に用ゐられ、中古の高地獨逸語は、十字軍より宗教改革に至るまでの文學に用ゐられ、近世の高地獨逸語は、ルーテルが聖書翻譯に用ゐられてこの方、文學上の用語とせらるゝに至りぬ。而して上古の高地獨逸語の現今の獨逸人に解せられ難きは、猶ほアルフレッド王朝の英語が現今の英人に於けるが如く、十三

世紀の詩人ワルテルの詩に用ゐられたる中古の高地獨逸語の、ゲーテの異なるは、チーサーのテニンに於けるよりも甚だし。但し、其の文學上に用ゐられたる時代より云ふときは、上古の高地獨逸語は、之れを中古と稱すべく、中古の高地獨逸語は、後の中古として之れと區別するを得べし。

獨逸諸州の文學に貢獻せる所は一樣ならず。而して北方諸州の文學上の功績は、數に於いて、量に於いて、及び其の價值に於いて、共に遙かに南方諸州の上に在り。あらゆる學問に於いて、新教諸州の舊教諸州を凌駕せりといふは公平なる批評として認許せらるべし。世界に影響を及ぼしたる獨逸近世文學の大部分は實に普魯士とサクソニーとに屬す。其の一例を擧ぐれば千七百四十年より千八百四十年に至る一百年間に存せし百七十名の著作家の中、六十名は普魯士に屬し、三十名内外はサクソニー及びハルテムベルヒに屬し、十名若しくは十二名はベツリア及びバーデンに屬し、僅々二三の著作家は埃太利に屬しき。又獨逸に於ける十九の大學の中、其の十三は普魯士及び北方獨逸聯邦に屬す。學者及び著作の數に於いても亦然り。要するに、北方諸州は獨逸文學精華の存する所なりといふも不可な

獨逸人は多感ならず、快活ならず、情熱少なくして其の言語文章に於ける發表亦平易流暢の趣を缺くと稱せらるれど、他方を觀れば教育ある獨逸人は其が深遠なる思索、撓まざる勤勉及び感覺界を離れて自家心中の理想界に安んずる力の大きなることによりて推重せらる。夫の「我が心は我れに取りての王國なり」といひし哲學者カントは死に至るまでケーニクスベルヒに盤居して遂に其の郷里を出でしことなく人間の社會に對する義務に就きて幾多の著作を爲し、フイヒテ、ヘーゲルもまた最高の生活、無上の悦樂の自知と冥想とに存するを説きたりき。縱令是等二三の偉人は國民全體を代表する者にあらずとするも、強大深奥なる思索的傾向が哲學界及び神學界に許多の退守的偉人を生ぜし獨逸人の間に存すると、何人も疑はざるべし。之れに關聯して獨逸文學に於ける最も著き外部の疵瑕といふべきは文牀の明瞭と優美とを缺きたるとなり。但し文牀の曖昧なるは一つには其が思想の深幽なるにもよるべけれど、無味曖昧なる文牀は必ずしも思想の深玄を蘊するものに非ず、假令之れに對する幾多の辯護の理由はありとも、曖昧と無味とは終

に獨逸文學の疵瑕たるを免れざるべし。

其の他獨逸人の性癖に就きて注意すべきは、彼等の從順に、謹慎に、且つ忍耐なることと是れなり。彼等は自家を株守せずして善く他の長所に從へども、之れと共に注意周到にして他に盲從することなく、其の一理想を立つるや常に精進して屈撓することなし。是等の特性は、實に獨逸國民をして今日の隆盛あらしめたるものなり。彼等が他の國語を學ぶや許多の困難に耐へて善く聽き善く勉め、終には説話文章に於いて本國人をすらも驚かすに至る。彼等は、あらゆる外國の文化を翻譯輸入して、足ることを知らざる趣あれども、而も廣く智識を需むる餘り、自家を棄てて他に盲從するに至らず、また學に淫して國家社會に對する義務を忘却するとなし。彼等は自家を確立し他を咀嚼して自ら大にし、高くせんとする國民なり。その昔、爭奪遊獵を事とせし粗暴勇敢なる民族が、羅馬教會に感化せられて漸次野蠻の境を脱し遂に文明の指導者たるに至りたるは、一にこれによれるなり。蓋し十七世紀の末に至るまでの獨逸文學は、形に於いても精神に於いても常に所助の地に立ちたりしが、十八世紀のはじめ、ロシニング等が國民文學の論を唱へ出づると共

に、獨逸の文學は、一躍、能動の地に立ちて世界に雄視するに至りぬ。之れを宗教界がルーテルに於いて、哲學界がボーム、ライプニッツ等に於いて、能所其の位置を轉じたるに比ぶれば、獨逸の文學亦頗る刮目すべき壯觀ありといふべし。特に諸國の思想、諸種の文學の幅濶し來たれる我が邦現今の學者に取りて、獨逸文學の研究は、一層多趣味有益なるものなるべし。

獨逸文學史を大別して七期とし、添ふるに、現今の文學を以てして、之れを第八期とす。即ち

- 第一期 紀元後三百六十年乃至三百八十年(即ち聖書の大部分がゴッス語に翻譯せられしより十一世紀に至るまでを含む)。獨逸人民の移住後、彼等の國語は僧侶の手によりて上古の高地獨逸語と稱する文章用の語に化せられたり。此の上古の高地獨逸語にてもせられたる文學の吾人に知らるゝは、唯だ、僅少なる異教の歌謠、教條、祈禱、拉丁語の讚美歌、及び、聖書の斷片的翻譯あるのみ。
- 六世紀より十一世紀に至る第一期文學の特質は總べて寺院的なりき。
- 第二期 一千百五十年より一千三百五十年に至る二百年間を含む。此の期

に於いて上古の高地獨逸語轉じて中古の高地獨逸語となり、同時に、文學は貴族及び諸侯伯(特に塊太利及びトルリッゲン)の朝廷に於いて新保護者を得たり。

第三期 一千三百五十年より一千五百二十五年に至る。此の期に於いて文學は貴族及び諸侯伯に棄てられ、新に保護者を市民の間に得たり。又、韻語は詩歌との聯絡を脱して、教訓諷刺の性質を帯ぶるに至りしが、散文は漸次に發達し、特に神秘教徒と稱せられたる信仰家の述作に於いて發達せり。

第四期 一千五百二十五年に其の稿を起として一千五百三十四年に大成せしルーテルが聖書の翻譯は、爾後近世の高地獨逸語をして文學上の用語たらしめたり。是れ、一千五百二十五年より一千六百二十五年に至る第四期の文學史に於ける最も重要な事實なり。

第五期 一千六百二十五年より一千七百二十五年に至る百年間を含む。所謂三十年戦争の時代にして、其の間殆ど純文學の見るべきものなく、唯、多少の讚美歌の存せしのみ。然れども、作詩の術はオビッツ及び其の徒弟等の間に於

いて著るく進歩せり。

第六期 是一千七百二十五年より一千七百七十年に至る間に於て文學に關する論争の盛なりしと國民文學の先驅と稱せらるゝレッシングの出でしとを此の期に於ける重要な事實とす。

第七期 是一千七百七十年より一千八百三十年に至る即ち文學技術哲學の相並びて復興擴張せし時代なり。ゲーテ及びシルレルの二大詩人が其の豊富なる作によりて獨逸文學の眞價を發揚せるを此の期に於ける主要なる事實とす。

第八期 是一千八百三十年より現今に至るまでを含む。此の期に屬する作家は現今猶ほ生存するもの多く、彼等が文學史上に於ける位地亦未だ定まれりといふべからず。此の期に就きて講者は唯慎重なる事實の報導を爲すを以て満足すべし。

獨逸の文學史は(上は三百六十年より下は現今に至るまで)殆ど一千六百年間の長きを含めど、其の間幾多の罅隙ありて聯綿不斷の發達を成せるにはおらず。嚴密

にいふ時は第六期以前に於いて吾人の注意すべき文學を有せるは、特に第三期あるのみ。十四世紀の後半より十八世紀の始めに至る數百年間は獨逸文學史に於ける一大罅隙なりといふも不可なし。もとより、其の間多少の教訓詩、諷刺詩、劇詩、物語類等の、僅に一縷の命脈を繋げるものなきにはあられねど、作の小なる品の下れる、特に獨逸の文學として掲ぐべき作物あるを見ず。要するに、獨逸古代文學の價値は當代の眞相の、其のうちに現はれたる邊に存す、而して之れを研究することの必要なるは、そがいと幼稚なるにも拘らず、兎に角、近世文學の根本を成したればなり。換言すれば、歴史的價値、當代の反映なりといふ邊を離れ、又文學史的價値、後代文學の地を成せりといふ邊を離れて、單に詩的價値の邊より觀察を下す時は、獨逸古代の文學は、恐らく吾人の一顧を假せざるものなるべし。以上の理由によりて、予は獨逸文學史を講ずるに當たり、古代の文學は、なるべく簡略に叙述して、當時の文學の特質重要な作者及び著作等の紹介に止め、千有餘年を一過して、ただちに第六期すなはち十八世紀の新天地に入るべし。此の期に及びては、詩人の輩出、思想の偉大、詩篇の豊富、また古代文學界の寂寞たるに似ず、熟慮精評すべきもの、隨處



に充滿せるを認むべし。又茲に至り、顧みて、眼を古代の文學に注がば先きに見て拙劣なる片碎と爲し、ものまた捨つべからざる深意義を含蓄せるを發見せむ。蓋し、予の獨逸古代の文學に詩的價值なしといふは、敢て無意義なりといふ意にはあらず、精確に、近世の獨逸文學を識らんとする者の古代文學を考覈する必要あるは、智者を待ちて後に知ることにあらざるなり。いでや、進みて、古代獨逸文學の大要を叙せむ。

### 第一期

(紀元後三百六十乃至八十年より十一世紀に至る)

第一期に於ける獨逸文學の特質は、要するに宗教的なりといふを得べし。ゴッス語及び上古の高地獨逸語を以てものせる文學の今日に存するものを見るに、いづれも、四世紀より十一世紀に至る間、基督教の漸次に布及して教會の威權益、中央歐羅巴に盛なるに至りし有様を叙せるにあらざるはなく、當時文事に従事せる者、亦概ね、僧侶なりき。ゴッス族はチエートン種族中最も早く基督教の感化を受けし者にて、僧正ウルフラス(Diethelm)が聖書の翻譯(ワルフラスは聖書の殆ど全部を翻譯したり、其の現存するは新約書の大部分と

舊約書の断片)を今日に存する唯一のゴッス文學とす。獨逸の言語學者がゴッス語に關する知識は、概ね此の書の供する所なり。又、上古の高地獨逸語、及び其の僅少なる文學の今日に知らるゝはセントガレン及びアルダ兩寺院の僧侶の功に歸せざるべからず。此の兩寺院は當時の宗教文學に於ける教化を司れる主要なる學林にして、兼ねて文事に従ふ者の淵藪なりき。彼等は當時人民の殺伐なる氣風を矯正せんが爲め、古來の異教歌謠を撲滅せんと企てたれども、また、人民の言語を研究する必要より之れを保存せる者もありき。文事に熱心なりしシャーマー、大玉、亦た學者をして、古代の歌謠を編纂せしめき。吾人が當時の文學に就きて知り得るもの、一に此等の事業に負ふ所なり。

上古の高地獨逸語は六世紀より十一世紀に至る間に用ゐられき。此の間に現はれたる文學の重なるは、セントガレン寺院の僧クロ(Mero)七百六十年頃の人(がベチチクト法則及び讚美歌の翻譯、同寺寺院にて八世紀にもせられたる使徒信條の翻譯、ルードヴィヒ王の命令の下に成れる『ヘリアンデ』(Heliant)即ち基督傳、フルダ寺院に學びし僧オットフリード(Otfrid)七七六―八五六)の『基督』(Kris)九百

三十年に歿せし一僧侶の作なりと傳へらるる「ルーヴル」の歌』(“Ludwigslied”)ル  
 一、ル、非、ソ、ヒ三世の戦勝を詠せる歌「狐狼物語」當時に於ける獨逸文學の代表とも見  
 るべきセントガレン院の僧ノートケル(Notker: 一〇二二死)Pentonicusと綽名せら  
 るるが讚美歌及びアリストテレースの翻譯等なり。

十一世紀は暗黒時代にして更に文學的著作の見るべきものなかりき。唯だ當時  
 に在りて注意すべきは十一世紀より十二世紀の初めに至る間に上古の高地獨逸  
 語廢れて中古の高地獨逸語の用あらるゝに至れることなり。獨逸に於ける最初  
 の女性文學者なりと稱せらるる「フラウ、ア、フ」(Frau Ava: 一一二七死)此の語を以て「耶  
 蘇傳」をものしき。

國語の變遷に伴ひて他の主要なる變遷の看過すべからざるは十字軍なり。十字  
 軍は中古の武士を覺醒して新思想を得しめ新生活に入らしめしと共に僧侶及び  
 貴族をして特殊の階級を成して自ら高うするに至らしめき。當時の僧侶が文學  
 を忽諸にせるや、彼等の人民との關係やうやくに薄らぎ、彼等の愈々富み、其の生計愈  
 饒かなるに従ひて、其の知識と道德とは日に月に衰へ行きぬ。要するに十字軍は

教會に裨益し、且つ損害せり。教會は之れが爲めに富みたと共に、又、之れが爲に  
 知識道德の退歩を招きたればなり。加之、爾後、武士大に崛起して僧侶の專横を制  
 抑するに至り、先きには僧侶の專有に歸して寺院の中に潛みたりし文學も、漸くに  
 して、王侯の宮城に移り、其の性質、また、著るゝ變化するに隨ひ、文學分かれて二種の  
 階級を成しぬ。二種の階級とは庶民の文學、即ち諸國を遍歴する樂師等の歌ひし  
 古話、及び歌曲と傳奇とより成れるもの、即ち王侯貴族に保護せられし新文學是れ  
 なり。當時、又、古語の湮滅に歸せんことを憂ふる者多く、作家の立ちて諸外國の古  
 傳奇を或は改作し、或は編成せしものもありしが、時勢、漸く移りて異教的傳奇の改  
 作は、もはや、上流社會の好尚に適せざるに至りき。彼等の殺伐なる軍國的氣象も、  
 漸次、基督教に和げられたればなり。

第一期の獨逸文學は要するに宗教的なり。一方に於いては殺伐なる異教的歌謡  
 あり、一方に於いては之を感化せんとして諸種の宗教的著作の現はれたるあり、兩  
 々相觸れて、基督教は漸次に、歐羅巴の中央に流布したりき。之れを、此の期に於け  
 る時運と文學との關係なりとす。

第二期 (一一五〇—一二五〇)

一千百五十年より一千三百五十年に至る二百年間は獨逸一般の歴史に於けるが如く、其の文學史に於いても暫時の光明を放ちし時代なれど、其の光明は、幾ばくもなくして、また、暗黒の蔽ふ所となりぬ。即ち、一千二百六十八年ユンラデンがチーアルスに處刑せられし、一階級に限られながら尙ほ多少の光彩を放ちし文學が將に衰頽せんとせし時なりき。此の期の文學につけるものを十四、五世紀に於ける野卑陋劣なる文學とす。

『獨逸文學史』の著者ゴストフック、此の期の特質を論ぜし大意に曰はく、

當代の特質は要するに夢幻的なり。吾人は容易に十六世紀を理解することを得べく、また、遂に溯りて往古の時代をも理解することを得れども、一たび、ホーヘンスタウヘン朝(一一五一—一二五二)に入るに及びては其の夢幻的光景の充ち満ちたるに驚かさるを得ず。甲冑せる武士が、罪業を贖はんとて、聖地に旅し、サラセンの強敵と戦ふかと思へば、またミンネリール(Minnelieder 戀歌の族)の如き華縝細巧なる歌を詠して其の閑を消するものあり。或は外國の傳奇を涉獵してバルツィファル、アーサー王、トリスタン及び他の夢幻的勇者の冒險談をものするあり。當時の實際は此等の物語の如く夢幻的

なりき。而して十字軍は、まさしく、實行せられたる當時の傳奇なり。

云々。要するに當時は民心の内を離れて漸く外に向かひたりし時代なり。彼等は教會の感化を受けて稍、野蠻の習俗を脱するに至りしかど、未だ自ら顧みて宗教の根柢の自家の心理に在るとを悟らず、是を以て夢幻的なる十字軍も、能く、彼等をして、幻夢の裡に狂奔せしむるを得たりき。彼等の好尚は、稍、發達して多少他國の詩歌を味ふに至りたれども、未だ顧みて自家の脚下に詩題を獲るに至らず、是を以て、彼等の作するやつねに材をアーサー朝の古話、及び、ブーヤルの作等に借り、未だホーヘンスタウフェン家の諸王と法王との紛争、王位中絶して無政府となりし有様、及び十字軍等現在の活事實を取ること能はざりき。當時の傳奇、抒情詩はた、作者等の國民的感情の缺乏せりと見ゆるも、畢竟以上の理由あるが爲めならん。されど、國民の特質は、其の材の何たるに拘らず、遂に、其の中に現はれざるべからず。次に掲ぐる『ニーベルンゲンリール』の如き、或は『バルツィファル』の如き、其の材を他國或は古代に取りしにも拘らず、また、基督教的武士時代的習俗の外被を纏はしめたるにも拘はらず、剛毅、或は、兇暴殺伐とも云はるべきなる國民の特性の、紙背に活

隠せるを見るべし。然れども、こは間接なり、事實に於て、直接に、當時の狀態を見んと欲せば、吾人は、しばし、是等の詩歌傳記に背きて、ヘルトルドの説教集、若しくは、所謂神秘教徒の教訓的散文に向かはざるべからず。

シャルレメン大帝の世より十二世紀に至るまで、文學は、概ね、僧侶の手に在りしが、十字軍以後は、小貴族、代はりて、文學を保護するに至りぬ。但し、當時の市民は、殖産興業の畫策に忙しくて力を文學に効すこと能はざりき。

當代に於ける最良なる想像の作を『ニーベルンゲンリッド』(“Nibelungenlied”)及び『グンドルン』(“Gudrun”)の二國民的敘事詩とす。『ニーベルンゲンリッド』が十二世紀の末に成りしとは明かなれど、其の作者の誰れなるかは知るに由なし。此の詩は、材を古話傳説に取りたるものにして、基督教傳來以前の姿を暇らしめたるを共に、又、武士時代の被衣をも加へたり。然れども、基督教的、武士時代的習俗は、要するに、其の外被たるに止まり、古代の歌謠に存せし異教的特質は、其の外被を透して、明かに見ることを得べし。蓋し、此の時は、當時の他の物語的詩歌と同じく、各部の調和を缺ける所あれど、緩漫なる敘事、無趣味なる譬喩なく、事件の秩然と進行して、脈絡

貫透せるは、他の當時の作に於いて見るべからざる所なり。

『ニーベルンゲンリッド』は二部に分かれ、前半はシークフリッドの死に終はり、後半はクリームヒルドの復讐に終はる。此の作は、第二期の文學に於ける精華にして、延いては、古代の獨逸文學に於ける最大の詩篇なるを以て、左に、其の梗概を述べし。

ライン河の畔、サルムスの城に、嬪姪たる一公主、住めり。クリームヒルドとて、バルガンデー王、グンテルの妹なり。また、同ド河の下流に、滑ひたる他の城に、シークフリッドといふ勇者、住めり。此の勇者は、ニーベルンゲンと稱する此の世ならぬ種族と戦ひ、勝ちて、夥多の金銀財寶を獲、また、或る時、龍を殺して、其の血に浴せしより、肩先なる一點の個處を除きては、全身不死身となり、殺龍者と稱せられき。

彼れいささしく、クリームヒルド姫を戀ひ、其の戀愛の不幸に終はるべき前兆見えしを、も厭はで、財を求めんとて、サルムス城に來たりぬ。殺龍者サルムス城にて、厚く款待され、且つ、鷹の比武に、拔群の武勇を顯はしけれども、いさしと思ふ姫には、一歳経れば、合ひ見ることを得ず、唯だ、或る仕合ひの折柄、居間の窓より、かいま見居たりし姫が、彼れの、膝を、ちしを見て、うち笑みきと傳へき。て、姫の稱讚を得たることを知りしのみなりき。かくする中、其の年の末に至り、殺龍の勇者は、グンテル王に、盡くし、稀世の軍功によりて、首尾よく、姫と相見ることを得、許され、やがて、僧老の契りを結びぬ。件の軍功の顛末

は材を北方の神怪談に取れりさおぼしく頗る荒唐不稽なるものなり。海の彼方イ  
 センランドといふ國に、ブルンヘルテといふ勇婦ありしが、其の身に優れる武勇の士に  
 嫁ぐべしと定業によりて、定められたり。ケンテル、切に之れを慕ひけれども獨力にて  
 勝たんとの覺束なきに、ジーグフリードを具して、遂々と彼の地に赴けり。さて二人の、  
 勝負を決するに臨み、殺龍者は隱身の術を以て人知れず王を助けしかば、ブルンヘルテ  
 遂にうち負けて王の意に従ひぬ。かれ、ナルムス城に伴れ歸りてブルガンデー女王と  
 なりしが、やがて殺龍者夫婦の聲譽を忌み終に意を決してジーグフリードを殺さん  
 計り、ブルガンデー國士の精華を稱へられし忠臣ハーゲンに意中を告げて其の身いた  
 く殺龍者夫婦に凌辱せられたりと語る。君家の風俗は臣下の義として報いざるべ  
 ならず。されど勇敢なるハーゲンも、公然たる闘にて、ジーグフリードを伴さんことの難  
 きを憂へ、遂ひに臣下さして女王に對する忠義を立てんが爲めに、人間として行ふを恥  
 づべき途を取り、心ならずも、詭計を以て殺龍者をたばかり撃たんを決しき。彼れ先づ  
 殺龍者に親しみて其の盟友なりと稱し、彼れ暇に臨まば矢面に立ちて彼れを護るべし  
 なと云ひければ、策略は露知らぬ、クリムヒルド姫は、ハーゲンが厚誼の嬉しさに、夫  
 の外套の肩に印を附して不死身ならぬ局部を知らせき。幾ほどもなく、ハーゲンは遠  
 からぬ森林に獸獵すとてジーグフリードを招けり。是れより先き、彼れが枉死の前兆  
 とも見るべき許多のまがこさありしが、當日の朝もクリムヒルド姫は狼にといそぐ  
 夫の袖を引き止めて思ひしき前夜の夢を語り、此の行是非に思ひ止まりてと諫むるを、

慰めずして出で行くさきの獵場には猪よりも畏るべき敵待てりとは知らざりけり。  
 森の中に清かなる泉あり。ジーグフリード、馳騁に疲れ、喉渴き、ハーゲンを伴ひ來たり  
 て泉水を掬げんとせる時、ハーゲンの抛けし鎗は過たず姫自らの手もて印し置きし肩  
 先の炎處に中たりぬ。クリムヒルド姫、夫の屍骸を見て消え入るばかり痛悼せしが  
 柩の吟味(謀殺者傍に至れる時屍より血流るゝことによりて下手人を知る往古の習俗)  
 によりて、遂に、讐敵のハーゲンなることを知り、姫が胸中に充ち満ちしジーグフリード  
 に對する戀愛の情、今や其の形を復讐さかへて、凡べてのブルガンデー人がハーゲンと  
 共に死せざるべからずとも、遂には不俱滅天の讐を報うべしと決心し、十數年間ナルム  
 ス城裡に他せき月日を送りき云々。以上を此の篇前半の梗概とす。

ハーゲン、クリムヒルド姫が、財を散士を募りて復讐を企てんことを恐れ、悉く其の  
 財寶を奪ひて密にライン河畔に埋む。姫是等の虐待を默受すること十有三年、復讐の  
 好機の際たるを待ち侘びし折から、ハンガリー王エツセルが、其の使臣リューテゲル(篇中  
 にて最も高尚なる人物)を遣して殺龍者の寡婦と婚せんことを求むるに會ふ。かれ、今  
 は王侯の榮華も欲しからず、孤棲を侘ぶるあだし心もあらねど、亡夫の讐を報うる術も  
 がなき、直ちに之れを諾し、リューテゲルに伴はれ、ブルガンデーを離れ、ハンガリーに入  
 りて女王さかしづかれき。かくて數年を経つ。女王復讐を送げんの志止み難く、エツセ  
 ル王にケンテル、及び、其の臣下の勇士を招かんことを請ひて、權力ある家人の妾を訪ふこ  
 となくばハンガリーの士民が妾に對する思はく後ろめだしと云へば、王許しぬ。招待

の使は發せられぬ。ハーゲン、其の意を察して是れ正しくハンガリー女王が復讐を企つるなりと奏す。その他、夢に、事實に、兇兆を示すもの多かりけれど、王は遂に、ハーゲン及び一隊の兵士を率ゐてナルムスを發し、途すがらリュウテゲルを其の居城ベツヘラッルンに訪ふ。リュウテゲル厚く之れを遇す。茲にて、グンテル王の小弟ギールヘル、リュウテゲルの女と婚す。王、ベツヘラッルンを去るに臨み、リュウテゲルの軍ゲルノート公に劍を贈り、ハーゲンに盾を贈りぬ。

ハルガンテ一人がハンガリー王の居城に達するや、女王は、ハーゲンの來たれるを見て殘酷なる微笑を洩らし、其の家人に應對するに當たりても、亡夫の殺害に與らざりし小弟ギールヘルにのみ接吻の禮を行ふ。之れを見しハーゲンは、我れ知らず、兇の緒を固めて、其の友フォルケルに語るに、不慮の變あらんを以てし、他の國人の殿に就ける後、二人の勇士は夜もすがら立ちて警衛せしかど、何事もなくて數日を過ごせり。幾くもなく王宮に大饗宴あり、ハーゲン及び其の友等が、王城の一間に宴せし時、他の室に在りしハルガンテ一人は、不意にハンガリー人の攻撃を受けたり。此の報、ハーゲンに達せし時、彼れ恰も王と共に至したりしが、之を聞くや直に劍を抜き、埃を揚げて、幼子の首を斬りぬ。之れを始めとして兩國の士入り亂れて闘ひしが、偉大なる騎士リュウテゲルは、嚴然として、此の争鬪に與ることを拒みき。そは、彼れが、其の王エツェルの爲めに殉ふべきは本よりなれども、先きにグンテル及び其の從者を導くに當たりて、彼等に忠實なるべきを誓ひたればなりけり。此の篇の結果の殺伐なる、往々、吾人を酸鼻せ

しむるものあれども、ベツヘラッルンの騎士(リュウテゲル)の高潔なる志行は、此のいまはしき徑行に對して大に光彩を興へたるを見る。女王が、リュウテゲルに命ずるに兵を集めてハルガンテ一人を撃つべきを以てするや、彼れが胸中の苦悶一方ならず、王に請ひて曰く、陛下願はくは臣に與へたる凡べての物を剃ぎ、臣をして此の事に與らざるを得しめよ。王の意や、動きけれど、女王が、ハーゲンに對する復讐の志は、遂に狂ぐべくもあらず。而してハルガンテ一人は、忠義に結ばれて一鉢を成せるが故に、ハーゲンを殺して亡夫の讐を報ぜんとせば、凡べてのハルガンテ一人を殺さざるべからず。されど、彼れは女王なり、リュウテゲルは、義として之れに従はざるべからず、彼れは妻子を女王に話し、遂にグンテル、ハーゲン等を撃たんとて出で行きぬ。グンテルは、リュウテゲルの來たるを見て、あはれ、此の地に吾れを導きし汝に向ひて劍を抜ければならぬ。さは「さ歎ずれば、リュウテゲルは、我れ痛く公を茲に導きしを悔ゆれども、女王の命を如何にせん」と答へ、ハーゲンの「ベツヘラッルンにて貴下の贈られし盾は已に數多の襲撃を防ぎたれど、今は已に碎けぬ」といふに、リュウテゲルは「さらば、我が此の盾をまゐらせんに、首尾よくハルガンテ一人に持ち還られよ、我れは此の末ながらふべき望みなし」とさばれば、今は女王の命否むべからず。いざ此の盾にて拒がれよ」とて自らの盾を興へ、鏖て戦ひに時を移して、リュウテゲルは遂に變はらざる交誼の證にとて自からゲルノート公に贈りし劍の下に斃れけり。エツェルの將ベルンのドイトリッヒ、リュウテゲルの死を聞き、勇將ホルテアランドを遣してハルガンテ一人を撃たしむ、ホルテアランド單身遁れ

還りて援をドイツトリッヒに請ふ。激戦數回、已にしてバルガンデー軍皆死して、僅かに残れるグンテル王、ハーゲンもまた疲れて歸さなりぬ。さて王は幽せられ、ハーゲンは女王の面前に引き出ださる。女王、ハーゲンを詰りて「我がニールンゲンの寶を返せ」と云へるに、ハーゲン聽かずして拒みしかば、女王怒りてギョントル王の死に處せらるべきを命じ、さて、ハーゲンを順み我れに、猶ほ一つの寶き遺物、即ち、ジークフリード自らの劍あり」とて、鞘より抜く間もなく傷つき疲れたる勇士は刎れられき。ヒルデブラント惜しむべき勇士が、一女子の手に失はれしを怒り、斬者の女王たるをも打ち忘れ、クリームヒルドを殺し了りぬ云々。

以上は獨逸古文學の最大産物『ニールンゲンリード』の梗概なり。本より之れによりて原作の妙趣を味ふべくもあらねど、其の結構及び特質のおほかたは窺はれぬべし。思ふに、其の末段の殺伐殘忍なるは、讀者の同感を殘ふべきものなれども、二つの高尚なる動機の全軀を貫けるありて、さすがに詩趣の棄てがたきものあるを見る。其の一はクリームヒルド姫が變はらざる情操なり。姫はジークフリードが美貌及び愛情のいみじき外に、超自然の不可思議力あるを見、また、ハーゲン等が如き尋常武夫の全軀にも換ふべからざる價值あるを認めたり。かれは亡夫の爲めに生涯を抛ち、其の讐を報いんが爲めには、至親を滅し、全國民を殺すことをだ

も辭せざりき。縱令復讐以外に何等の高尚なる目的なかりきとするも、此くの如き堅固なる情操は、永く吾人の歎美を假すべし。其の二はハーゲン、リューデゲル等が枉ぐべからざる忠義心なり。ハーゲンのジークフリードを殺し、や聊かも私慾を遂げんの意にはあらで、ひとへに、女王の凌辱せられしことを信じたればなりき。バルガンデー人が夥多の凶兆に接せしにも關せずして、深く敵地に入りしは、其の行かざるべからざる義務あるによりてなりき。リューデゲルの涙を揮うてハーゲン等を撃ちし、また然り。縱令、彼等の赤心は、其の用を誤りきとするも、其の高く固き忠義心は、長へに賞歎を博すべき價值あらん。ハーゲンはバルガンデー女王に對する義務として、ジークフリードを殺さざるべからず、而して、クリームヒルド姫が、亡夫に對する情操は、ハーゲンを殺さずしては止むこと能はず。かくして、ハーゲン、リューデゲル、一切のバルガンデー人及び、グンテル王すらも、終に、此の葛藤を和ぐるの犠牲に供せられぬ。美德の衝突、因をなして、慘憺たる大破裂を成す。優に、好悲劇たるに足れりといふべし。要するに、『ニールンゲンリード』の價值は、其が悲劇的結構の壯大奇抜なるに在り。事件人性の發展の秩然たるに在り。當

時の獨逸國民(延いては獨逸國民全般の特性)の現れたるに在り。此の叙事詩の上代に存せしを見て、近世の獨逸人が沙翁のハムレットを絶賞するに思ひ及ばば、獨逸國民性の片影を窺ふを得んか。「ニーベルンゲンリート」は史的價值よりいふも、文學的價值より見るも、慥かに稱するに足るべきものなり。

「戀愛は常に悲哀に終るとは」ニーベルンゲンリート』の根本思想にして、變はらざる戀愛は遂に報いらるるとは「グアドルン」に貫通せる觀念なり。家庭的趣味、婦人に對する尊敬、全篇を貫ける一致、文體に於ける進歩等によりて案ずるに、「グアドルン」は十三世紀の半ば以後に成れるものにして、材を古代の説話に取れるが如し。(ラシエ)

一の誌す所によれば「グアドルン」は一千二百十年の頃の漢才ある一詩人の手に成りしものにして、爾後幾多の詩人に加筆せられて今日に傳はれり。而して、多くの批評家は、此の追加せられたる部分を取り去ることに力めたりしが、其中(最も有名なるカール、ミューレンホフ、Karl Mühlenthalerとす)全篇三部分に別かたれ、而して、最後の一卷のみ、女主人公グアドルンの事に関せり。其の要にいはいはく、

デンマルク王ヘッテル、愛蘭王ハーゲンハークの女ヒルテと婚して一女を擧ぐ、グアドルン姫といふ。シーランドのヘルゴッヒに許婚せしが、海賊を業とせるノルマンデー王ハルトムートハルトムートといへる者父ヘッテルの不在に乗じて姫を奪ひ、ノルマンデーに連れ行きぬ。(初め)

兵を率ゐて之れを追ひしが、烈しき戦ひの後遂にハルトムートの父ルドゴッヒの手に罹りて、井ルベンサンドの激に斃れ、從者また概れ死す。姫擄へられてハルトムートの家に行きしが、固く、彼れの求めを拒みて婚を許さず、彼れはた痛くも強ひすして其承諾せんと日を待ちぬ。さるほごに、ハルトムートの母、怒りて姫を貶して婢となし、洗衣の業に擧はらしめしが、姫忍びて之れに従ふ。かくて三月の或る朝、姫、他の婢と共に、海岸に衣を干しつゝありしとき、恰も姫を救はんとてヘルゴッヒ其の兄ホルトガン、及び、數多の將士來たれり。ヘルゴッヒ、密に其の妻を奪ひ去るを卑怯なりとし、ハルトムート等とバルチック海濱に戦ひ、ルドゴッヒを殺しハルトムートを擒にして、芽山度グアドルンと婚す。

「グアドルン」の旨味は其の意匠結構にあるよりも、寧ろ場面の新奇なると、巧に人物を描けるとに在り。詩中に現はれたる戀愛の觀念の如きは、後世の詩歌傳奇に現れたるものよりも高上清潔にして、ヘルゴッヒ、グアドルンの交情の如きは、情慾によりてよりも、寧ろ誠實、節操、忍耐によりて繋がれたり。而して、詩中に現はれたる習俗、感情の如き、「ニーベルンゲンリート」の比して、著るく武士的、また、基督教的となれるを見る。人物性格の發展は、た、全躰より見て、明瞭に、且つ、一致を保てり。

「ニーベルンゲンリート」及び「グアドルン」の外、幾多の國民的物語の十三世紀に成れりと云はしきものあれど、深く注意するに足る者はなく、到底、以上の二大叙事詩に比



すへくもあらず。其の主要なる一二を擧ぐれば『ビテロルフ及びディートリープ』  
 (‘Biterolf und Dietlieb’) 『ローゼンガルテン』(‘Rosengarten’) 『エックンリール』(‘Eckenlied’)  
 『ローテムニ』(‘König Rother’) 『オントニート』(‘Ortnit’) 『フッフディートリョ』(‘Hug-  
 dietrich’) 『ワルンマートリョ』(‘Wolfdietrich’) 等にして何れも吾人の研究に値するも  
 のなければ、一度は大に歓迎せられしものにして、其の一部は、十五、六世紀間に出版  
 せられし『ヘルテンツァン』(Heldenbuch 豪傑譚の義)に載せられたり。

上に述べたる二つの國民的叙事詩は、本國の事柄を叙せるものなるを以て、特に注  
 意を惹くべき價值あれども十三世紀に於ける獨逸文學の特質を明かにせんには  
 更にアーサー王に關する古話を材とせる武俠傳奇、及び他の詩歌物語等をも觀察  
 せざるべからず。中に就きて、特に注意すべきは『バルツィファン』(‘Parzival’) 及び『トリ  
 スタン』(‘Tristan’) なり。『バルツィファン』の概要にいはいはく、

基督が其の弟子と最後の晩餐に用ひし器は、金色の寶石もて作れるものにて、グラル(聖  
 餐器)と名づけられ、死を起し病を癒やす靈驗ありと傳へられたり。また、其の器を保  
 護することは、人間最高の光榮にて、赤心よりの懺悔と謙遜のみ、此の榮職に堪ふべし

とせられたりしが、アリマタヤのロセフ、そを贖りて以來之れに次ぐべき人なく、終に、バ  
 ルツィファルの祖、タイトローレル、之を保護することとなれり。バルツィファル幼にして父を失  
 ひ母の手に育てられしが、母は彼れに世を知らしめずして清淨なる生涯を送らせんと  
 て、人里遠き山林に隠れ住みしを、稚き時は、よく其の謔みに添ふべし見えしが、或る日林  
 中にて三人の武士に遇ひて知らざりし浮世の榮華を耳にし、遂に伴はれてアーサー王  
 の朝に往きぬ。彼れ、茲に教育せられて、拔群の武士となり、其の名漸く高くなりしが、胸  
 中常に安んぜざる所ありて、竟に、そこともなき旅路に上りぬ。長き漫遊の後、或る夕つ  
 方、山ふささころの湖畔に至り、漁夫に途を問ひて山上の城中に行き宿りを請へるに、厚く  
 款待せられて、茲に怪しき儀式を見たり。廣き殿上に、四百の武士ありて王を護衛し、盛  
 装せる數多の少女、銀燭を持ちて玉座近く侍りしが、最後に、麗色威嚴共に並びなき少女、  
 聖餐器を捧げ來て王の前に置きぬ。されど、王は、恭しくうちながめしのみ、その味ふべ  
 からざる運命を享けたるなりき。王は傷を受けたりとおぼしく、喪服せる侍従が鮮血  
 滴れる鎧(王の傷を受けし)を持ち來たりし時一座の者皆首を垂れて哀を表せり。また、  
 室の彼方には白髮の老翁の死に垂んとして床上に横はれるあり。バルツィファル驚き怪  
 めども其の故を問はず、王、彼れを玉座近く招き、玉櫃を譲る暗示として寶劍を與へたれ  
 ど、彼れは、遂に一事をも問はずりき。翌朝暇を告げて歸れるに、門卒はバルツィファルが、前  
 夜間を發せざりしを責め、途上、また一婦人の、同卜く儀式の靈驗を尋ねざりしを咎むる  
 にあひ、驚きて愈ぎアーサー王がナンタの城に歸りしが、グラル城より使者來たりて、公

飛の前に、バルツィファルが不職不信を罵りしかば、彼れは遂に、ナンテ城を辭して、再び、漫遊の途に上れり。かくて彼れは數年間、數多の危險を冒せる後、胸中不安の情尙ほ去らず、今は神をも天道をも信ぜざるに至りしが、一日(Good Friday)彼れと同一家系に屬する隱者に遇ひしに、詳しく先きの怪しき儀式に就きて彼れに教へ、且傷せし王は、肉慾に墮落して聖職に堪へざるに至れるにて、汝の叔父我が弟なり、ケラル盃を捧げし王女は、汝が母の妹、白髮の老人は、汝が祖、ティローレルにて、切に汝が到らん日を待てりと言ひ告げぬ。其の後、バルツィファルは多くの艱難を冒し、印度の異教徒と戦ひて、其の王、フアイレフイツに勝ち、二人相携へてケラル城に至り、バルツィファルは王冠を戴きてケラル盃保護の職に就き、フアイレフイツはケラルを捧げし王女を戀ひ遂に相婚して印度に歸りぬ云。

『バルツィファル』は材をアーサー王及びグラルの二つの古話に取れるもの、中世紀に於ける最大詩人の一人、ナルフラム、フォン、エッシュンベック (Wolfram von Eschenbach) 十二世紀より十三世紀にかけて生活せり(の作にして、『トリスタン』(トリスタン及次イゾールト)の戀愛を描けるもの、完成するに至らずして著者歿しき)はナルフラムの敵ゴットフリード、フォン、ストラスブルク (Gottfried von Strassburg) ナルフラムと同時代人の作なり。思ふに、此の二作ばかり、其の性質の相反せるものはあらむ。『バルツィファル』には道義的熱誠充ち満ちて往々禁欲主義に近づかんとし、『トリスタン』は、讀者

を喜ばしむれども、其の描く所はあくまでも浮世的なり。前者は、人生を以て修養の場所となし、後者は之れを嬉笑の樂地となす、前者は欲を絶ち俗を超して聖境に至らんことを勸め、後者は俗と共に波を揚げて、情慾の誘致に従はしむ。管作の上に現はれたる差異のみならず、彼等は各、其の主義を異にし、ゴットフリードはナルフラムを嘲りて、彼れは傳奇の名の下に註解説明を要する書をもつと云へり。蓋し、作意の高尚にして筆致の嚴かなるは『バルツィファル』の賞せらるべき點なれども、其が各部の調和を缺きて作者が真意の明かならざるものあるが如きは、其の缺點なりと云はざるべからず。中に描く所の人物、多くは譬喩にして、其の裡には深き第二の意義の含まるゝある(例へばケラルを捧げし王女は、基督教の精神を表はし、印度の王は異教徒を表はし、而して、彼れが王女を愛せるは、眞信仰の勝利を表はせるが如き)にも拘はらず、往々、件の本義を破るべき部分の存するが如き、是れなり。『トリスタン』は、善く此の弊を脱し、脚色明瞭、文章流麗にして、人物性格の發展はた、自然なれども、その骨髓を成す所の戀愛は、利己、背義、肉慾的にして、讀者の眉を蹙めしむるもの少なからず。要するに二者の長短は相半ばせりといふべし。

上に述べたる二作者と時を同じうして、ハルトマン・フォン・アウエ (Hartmann von Aue.) 出で『イヴァイン』["Iwein"]、『エルク』["Erk"]、『グレゴリウス』["Gregorius."] 等をものぞいた。其の作の最も有名なるを『アル・アルメ、ハインリッヒ』["Der arme Heinrich"] とす。

シテピアにハインリッヒといふ徳望ある富家住みしが、痲を患ひて、サレルノの醫院に行けるに、「汝は癒え得れども癒ゆるを得ず。學問上、汝を癒えしむべき薬品は存すれども、其の薬品は得るこゝ能はず、また、得べからざるものなればなり。若し保累なき少女の、進みて、汝が爲めに死するあらば、汝は癒ゆるを得べし云々」との言に、絶望し歸りて家事を人に任せ、自らは、其の小作人なる一貧家に退きて病を養ひしが、僅に十二歳なる其の家の少女が、命を捨て、彼れを救はんきて、遂に父母に脱き、固く辭むハインリッヒをも従はしめ、四人相携へてサレルノに行きしが、醫士の刀を取りて臆せず露はしたる少女の胸に擬せる時、ハインリッヒは胸に充つる惻隱の情に、私慾の念忽ち失せて醫士の手を止め、四人相共に歸る途上、不思議にも病は、全く癒え、歸りて少女の父母に多くの財産を興へ、其の身は少女と婚せり云。

此の物語は、教訓的にして、趣構亦頗る新奇なれども、脚色不自然にして、餘りに人工らしく、人物性情の發展はた穩かならず。批評家の之を稱揚せるも少なからねど、其の作意は善し、而も巧妙なる手腕すら一通りにだに描き得ざる難題目を取れる

なり」と云へるゲーテ等が説を至當なりとすべし。

其他カーロフ・ボンツァン朝の古話に基ける者にては、コンラッド (Konrad) が『ローランドリード』["Rolandslied"]、コンラッド・フォン・クンツ (Konrad Fleck) が『フローン及びマランシフル』の戀愛譚 ("Elore und Blanschefur") あり。他の古話に據れるものには、ラムナレヒト (Lamprecht) が『燈山王』["Lamprecht"]、ハインリッヒ・フォン・ヘンケ (Heinrich von Veldeke) が『エネイド』["Aeneid"]、或は『Eneit』、コンラッド・フォン・ザルツマン (Konrad von Würzburg) が『イロイ戦争』及び『ホルデア・シ・ミューデ』["Goldene Schmiede"] 等あり。基督教、或は寺院の古話によれるものには、エルンホル (Wernher) が『聖母マリア傳』、ロンラッド・フォン・ギルツブルグが『アレクシウス』["Alexius"]、シルエステル ("Silvester")、十二世紀に出でたる大僧正アンノの頌徳詩及び『カイゼルクロニク』["Kaiserchronik"] 等あり。また、人口に膾炙せる物語にては、『サロモン及びモロルン』["Salomon und Morolf"] とす。諷刺滑稽物語、エルンホル、デルガルテチー (Wernher der Gartenäres) が『トイキル・ブルマインロト』["Meier Helmbrecht"]、マルメットリッタル ("Der Stricker")、マーグストウス僧侶の事をものぞるものといふ滑稽物語、及び『ライオンホルト・フォン・メ』["Reinhart Fuchs"]

狐狼物語等あれど今は之れを詳説せず。

第三期の文學の中にて尙ほ、一の看過すべからざるは「ミンチゼンゲル」(Minnesänger) 即ち戀愛の詩(Minnelieder)を自ら作り自ら歌ひし者、是れなり。當時「ミンチゼンゲル」と稱せられたる一種の詩人は、自ら歌を作り自ら之れを歌ひて諸方に歴遊せしが、其の歌ふ所多く戀愛に關せしを以て、四時に於ける天地の現象、及び道徳、政治、宗教に關する抒情歌をも總稱して「ミンチリデル」といひ、之れを歌ふ者を「ミンチゼンゲル」と稱するに至りき。ミンチは戀愛の義なり。彼等の吟詠したる詩歌、數多ある中、其の主なるは概ね所謂「巴里寫本」の中に收められたり。ミンチゼンゲルの中最も大なる者を、ヴルテル、ファン、デル、フォーゲルズイデ(Walther von der Vogelweide)とす。彼れは外相の美を斥けて内心の美を稱し、虚儀を卑しみて、摯實なる信仰を尊べり。

ヴルテルの作は、其の詞句の流麗高雅なるのみならず、思想の廣き、道念の高き、一世に絶せりと稱せらる。其の詩の教訓的趣味を帶びたる點に於いてヴルテルの徒と云るべきは、デル、マルチル、ブローテル、エルンヘル、ラインマル、フォン、ツエーテル、ヴ

ルテルが、來世を尊び現世を卑しめるに反對して、固く現世の尊ぶべく、また世界を蔑視するの不敬なるを主張せしフリードリヒ、ファン、ンチンベルロ、及び、エーメル、ハルト、ファン、ザックス等なり。又ヴルテルと流派を異にせる者にて有名なるは、ウリッヒ、ファン、リヒテンシュタイン (Ulrich von Lichtenstein)。其の作に彼れの自叙傳とも見らるべき「Freundienst」あり。ニタルト、ファン、ロイエンタール (Nithart von Renenthal) ハイリッヒ、フラウエンロブ、レーゲンボリゲン。農夫の外凡べての社會を攻撃せることに於いて有名なるフリーゴ、ファン、トリムブルク (Hugo von Trimburg) トママン、ツィンクレーレ、ウルリッヒ、ポーター等なり。

第二期の文學の中にて、尙ほ、一の看過すべからざるは散文なり。但し、當時の散文は、其の數少なけれども、頗る趣味ありて、且つ、直接に時代を反映せるものなるが故に、當時の獨逸國民を知らんと欲する者は、必ず之れに頼らざるべからず。當時の散文を學の主なるものをフランススカン派の僧徒ブルーデル、ヘルトルト (Berthold Lech。一二二〇—三〇〇間に生る)の説教、及び有名なる神秘家ハインリッヒ、エックハルト (Heinrich Eckhart。十三世紀の半頃に生れ一三二九以前に死す)の思索的文章とす。

蓋し當時法を述べ道を説ける幾多の徒、之れを大別して浮世を其のまゝに忍べる者、それを厭離せる者、及び世を高上なる生活に導かんとせる者の三種とすることを得べし。而して、ベルトルト及びエックハルトは、共に第三種に屬し、銳意世間の道徳を進めんとせる者なるがゆゑに、其の懷抱と實世間と兩々相對して、其の文辭自ら光彩あり、當時の社會はた、ありく／＼と其の中に現はれたり。蓋し、ベルトルトとエックハルトとは、哲學、宗教、文學の諸方面に於いて細叙すべき價值ある者なれども、本器史の講ずべき際にあらねば畧しつ。

### 第三期

(一三五〇—一五二五)

夢幻的なりし第二期の文學は、未だ隆盛を極むるに至らずして、はやくも衰頽の運に向かひき。蓋し、當代文學の特質は、一言、夢幻的傳奇的なりといふべけれど、其の夢幻的傳奇的なる裏には、深く、大不平大不満足の潜みたるものありき。精神と肉體と、理想と運命と、宗教と日常の生活と、是等二元の衝突は、其の影を潜めながら、あらゆる當代の文學に行き亘れり。所謂教訓詩、諷刺詩、及び、エックハルト等の散文文學はいふまでもなく、國民的敘事詩より、延いて、材を他國に取れる傳奇物語に至る

まで、この面影の顯れざるはなかりき。而して、此の不平不満足は、第二期の末に至りて、尙調和融合せられず、更に明かなる形を取りて第三期の文學に現れたり。但し、不平の宿れると二元の衝突の行き亘れるとに於いては、第二期と第三期と、其の傾向畧、相同じ。唯だ、其の異なる所は、後者は前者に比して、稍、明かなるにあり、前者に於いては、深く、其の影を藏したる暗潮が、後者に至りて、其の聲を揚げ、其の形を現したるにあり。されど、第二期に於ける不平衝突の發現も、要するに、茫漠たる、若しくは、粗暴なる發現たるに止まりて、未だ、明瞭確實に其の形を現はすに至らざりき。此の大不平大不満足の、明瞭に大膽に發表せられたるを、第四期に於ける宗教革命とす。第一期より第四期に至る思潮の大勢を畧言すれば、第一期は粗樸強固なる自然兒が基督教の文化に觸れておひく／＼に、其の野蠻的習俗を脱する時なり。第二期は舊來粗樸の状態を脱して、人心漸く外に向かひながら、唯基督教の文化に酔ひたるに止まりて、未だ自らを知り、他を解するに至らず、従ひておぼろなる調和は成りながら、やがて内外自他の衝突の起こらんとして、猶ほ明らかたに起こらざりし時なり。『ニーベルンゲンリッド』『グロルン』及び『バルツィファル』等が、基督教的習

俗の外被を纏ひながら、裏に殺伐なる氣風を藏し、二者の調和せんとして、未だ調和せざる趣あるもの、一に此の思潮の行きわたれるに因る。第三期は、苟且かりそめなる調和遂に成らず、潜みたりし不平衝突漸く其の影を現し、其のこゑを大にしなからなほ所謂不平衝突の起因、性質、歸着等を明かにするに至らざりし時なり。此の故に、當期に於ける文學は、教訓詩、諷刺詩より、延いては一切の叙事詩、抒情詩、劇詩に至るまで、唯だ大膽に嘲罵し、若しくは諷誡するのみにて、其の嘲罵諷誡する所以明かならざりき。第四期は、第二期に於いて其の影を潜め、第三期に於いて漸次に其の聲を高め來たれる不平衝突の明かに其の影を現はし、明かに其の性質、歸着を示したる時代なり。無心むっぴんなる調和、其の緒を解き、衝突其の極に達して、茲に漸く自家を認め、そめたる獨逸國民が、更に堅固なる地盤に立脚して、他國の文學を咀嚼し、遂に燦爛たる國民文學を成して、世界の文壇に君臨するに至るといふを、第五期以下獨逸文學の消長とす。

一千三百五十年より一千五百二十五年に至る間は、一般の歴史に於いては、新世界の發見、印刷機の發明、文藝の復興、大學の設立等、數多の興味ある出來事に富める時

代なれど、獨逸の文界は、文學的價値の邊より見れば、一言暗黒といふも不可なき有様なりき。當代文學の最も著き特質は、諷刺的と云はんよりは寧ろ嘲罵冷笑的なると是れなり。是れ、要するに、前に謂へる不平衝突が、淺はかなる形を取りて、外面的嘲罵に現はれたるに外ならず。(社會の改良の深く人心の根底より始めざるべからざるを悟れるは第三期の末、第四期の初めなり。)當時の一詩人が、其の著の中に、鄙陋粗野は、今の世の人の神聖視する所なり。最も目やすからぬ談話をも、し得る者、特に眞面目なる題目に付きては、最も大なる天才として尊ばるといへるもの、實に、當代の眞狀を穿てるものなり。

當時の文學に就きて、先づ述ぶべきは、マイステル、ゼンゲル(のとなり)。當時大市府に住する人民は、封建貴族の暴戾を防がんが爲め、及び商業保護の爲めに商會を組織せしが、文學も、また、其の中に保護せられて、靴工、織工、仕立師、陶工等、いづれも詩歌を弄せる傍、時日、場所を定めて相會し、各自の作を誦し、審判者を設けて之れを批評せしめ、其の尤なる者一人を撰びて、「マイステル、ゼンゲル」最も秀でたる歌人の義と呼び、之れに花冠を贈るを例とし、其の撰に中たるを最大の名譽としたりき。此の種の會社は、ウルム、ニルンベルク等、幾多の市府に設けられ、ニルンベルクのは一千

七百七十年まで繼續しき當時有名の詩人、亦、おほむね籍を此に置けりき。當時の叙事詩、抒情詩にて、茲に其の名を掲ぐべきは、前にも云へる『狐狼物語』、『マクシミリアン帝の案に據りて侍臣のものせし』、『トイエルダグシ』、『Theuerdank』、『ゾイスターニッ』、『Weissknig』、『ヘルマン・ファン・サクセン・ハイム』、『Hermann von Sachsenheim. 一四五八死』、『ヤー・モーリン』、『Die Morin』及びオスワルト・ファン・デルケンスタイン(Oswald von Volkenstein)の抒情詩等なり。また時事を記し、點に於いて注意すべきは、シ・ハ・ホルン・ヘント(Michael Beheim 一四七四死)が『ブーフ・ファン・デン・キーテルン』、『Buch von den Wienern』、『ペーター・デル・ス・ハン・ギルト』、『Peter der Suchenwirt』、『ヘーレン・ローマン』、『Ehrenreden』、『フナイト・エーデル』、『Veit Weber』、『マルテン戦争』及び其の戦争を詠せる歌等、劇時にては、『フラウ・ユッテン』、『Flau Juten』、『フアスト・ナフツス・ホーレン』、『Fastnachts-spiele』等、翻譯小説にては、『七賢人』及び『グスタ・ロマノール』、『Gesta Romanorum』等なり。されど、嚴に謂ふ文學的考覈を假するものとしては殆んどなし。

諷刺滑稽物語が第二期文學の骨髓を成せることは已に述べたり。ヨハン・テス・バウリといへる僧侶が一千五百二十二年に出版せし『諷刺滑稽物語集』の忽ちにして

三十版を重ねたる、セバスチアン・フランツの『愚物の船』が一千四百九十四年より一千五百二十二年に至る迄に十版を重ねたる若しくは、當時の僧侶が、其の説教のうち、に世間の僧侶に對する嘲罵をまじへたるなど、以て、當代思想の一斑を窺ふに足るべし。當時の諷刺物語の作家の中にて最も著名なるを、セバスチアン・フランツ(Sebastian Brandt. 一四五八—一五二二)及びトマス・ムルテル(Thomas Murner. 一四七五に生れ一五三七の少し前に死す)とす。有名なる説教者がイレル(Dr. Geilar. 一四四五—一五一〇)がフランツ等の所作を取り入れてものせし諷刺的説教亦時代の反映として注意するに足るものなり。フランツの特色とも云ふべく、また、彼れが當代にもて嘲されたる所以とも見るべきは、其の諷刺の洒々として、厭味なきことなりき。其の有名なる『ダス・ナルレンシフ』、『Das Narrenschiff』、『愚物の船』の義は、世上の癡愚を百十種に別かちて描き出だせるものにして、彼れは、自らをば、讀み且つ解し得るよりも多くの書籍を購ふ愚物の中に列せり。此の書は、各部の調和を缺きて一貫の趣構なく、諷刺は淺膚、文學上の著作としては、もとより價值あるものにあらず。彼れは、當時の形勢を見て、いたく浮世をはかなみ、また一千五百二十九年

に世界は再度の大洪水の爲めに滅すべしといふ流言を信じて、遂に憫むべき最後を遂げきといふ。トマス・ムルテルは諸邦を遊歴し、休む時なき争論に生涯を終へたる僧侶にして、當時に於ける不平・不満足の化現とも見るべき者なり。其の激烈なる嘲罵は、ひろく凡べての階級に及び、僧正、僧侶、改革者、貴族、狀師、農商等、いづれも彼れの筆頭に醜弄せられざるはなく、彼れと主義を同じうせる者も、猶ほ其の嘲罵を免るゝこと能はざりき。彼れは、ルーテルに對して烈しき攻撃を爲したる後、英王ヘンリー八世に招かれ、英國に行きて『虚誕者は英王か、はた、ルーテルか』をものし、後、ストラスブルクに歸りて、彼れが激烈なる嘲罵の著作を印刷する出版者なかりし爲め、自ら活版所を起し、其の活版所は、やがて暴徒に破壊せられきといふ。彼れが作の有名なるは、『ディー・ナルレン・ベッショールンク』(“Die Narrenbeschwörung” 愚物降伏の義)、『ディー・シエルメンツンフト』(“Dis Schelmenzunft”) 及び『ドクトル・ムルテルに降伏されたるルーテルの大愚物』等にして、是等は當代を知らんとする者の必ず一讀すべきものなり。以上の外に、其の名を掲ぐべき滑稽物としては、唯だ、『ディー・シエル・シュルメル』(“Die Schildbürger”) 及び、『ムルテルの出版せる』(“O Erlenstörmer”) 等あり。

(“Eulenspiegel”) 等あるのみ。當時の嘲罵滑稽は、要するに、皮相的なり、熱あれども光薄く、烈しけれども根據弱し。所謂大不平は、當代に於て未だ明かに其形を現さざれば也。

尙ほ一の注意すべきは、編年記録なり。當時の編年史家の中、最も早く出で、且つ最も有名なるをストラスブルクの僧侶フリッツェクロゼチル(Fritzschel Closerer. 一三八四死)とす。彼れが簡潔なる散文を以て、當時の主要なる出来事に就きてものせし記事は、しばしの地震に關する件を除きては、頗る信憑するに足るものゝ如し。中につき、黒死病の流行、猶太人の處刑、フラッシュランツ(鞭教徒)に關する記事、最も趣味ありと稱せらる。ペーテル・エッセンローエル(Peter Eschenloer)が『リムブルク編年誌』、『プレスラウ史』、著者不詳の『コローン聖府誌』等、つぎて注意すべし。ソロー・トールの『ディー・ポールド・シルリント』(Diebold Schilling. 一四八五死)及び、『ルーツェルチのディー・ポルト・シルリント』(一五二〇の頃死)は、當時の瑞典史家の巨傑なり。ユスティン・メル(Justingero)、『フリック・ハルム』(Frickhard)、『メルロオルムス』(Melchior Puss)、『ペーテル・マン・エッテルマン』(Petermann Etterlin)等、また、編年記録家として名ありき。



最後に述ぶべきは、神秘家の散文なり。其等の冥想家の著述の、特に注意せらるべきは、彼等が所謂改革事業の、深く人心の奥底殊に改革者自身の心底より始めざるべからざることを知りたる、彼等が言論の外面的ならずして真情より發露せる、及び彼等が散文の進歩せる等の數點に在り。當時の神秘家の巨擘といふべきは、一千二百九十年ストラスブルクに生まれ、一千二百九十年に歿せしドミニカン派の僧エックハルトの弟子ヨハンテス、タウレル (Johannes Tauler) とす。彼れは深く哲學神學を攻め、著述に説教に論述する所頗る多く、聲名夙くより遠近に高かりしが、一日ペーゼルのニコラウスに、其の説教の價值なく、其の神學に關する知識の、單に知力的にして精神的ならざることを誡められ、教壇を退きて全く言論を廢すると二年、さて再び教界に現るゝや、彼れが神秘説は、燃ゆるが如き熱誠と相和して、其の深き思想、切なる感情は、一世を風靡しきといふ。數多き説教集の外、其の主なるは『謙和の徳に於ける基督の模倣』(Die Nachfolge des armen Lebens Christi) 及び『デルフランク・フールテル』(Der Franckforter) フールテルが後に『Eyn deutsch Theologie』の名を與へしもの等なり。タウレルに次ぎて茲に其の名を掲ぐべきは、彼れが友ハインリヒ、フ

ンチールドリッゲン (Heinrich von Nördlingen) ハインリヒ、デルソイゼ (Heinrich der Seuse) 及びタウレルの友にして『マスバッハ、フォン、デン、ノイン、フルゼン』(Das Buch von den neun Feisen) 九巖の書の著者ル、マンメルズヰン (Rulman Merwin) 等なり。是等の神秘家が當時の國民に及ぼし、影響は、甚だ著大にして、宗教改革の後にも長く其の餘波を止めたりき。さきに所謂二元の衝突は、當期の未つ方に至りて、益々著るくなりき。僧侶と俗人、貴族と平民、學者と黔首、此等は、皆に其の類階を異にせるのみならずして、今や全く相分離するに至れり。かくて、第四期は、胚胎しぬ。

#### 第四期 (一五二五——一六二五)

予はさきに不平不満足の行き亘れるは中世紀の特質なりと云へりき。されどこは上層の社會、換言すれば社會の耳目たる人々に就きていへるのみ、下層凡俗の社會に於いては、是等の不平衝突に氣づかずして、醉生夢死せる者ありしといふまでもなし。さきにも云へる如く、第四期は一面より見れば、所謂二元の衝突、其の當さに到るべき極に達して、大不平の大膽に發表せられし時、他面より見れば、衝突の餘

調和の漸く成らんとして之れに關する論議に汲々たりし時なり。蓋し十六世紀に於ける論争は神學教會にのみ關せるものに非ず、其の改革的潮流はた決して不平僧侶の熱誠によりてのみ成れるものに非ず、思潮の大勢より觀る時は、宗教改革の如き本より當世に漲れる大潮流の一波たるに過ぎざるなり。此の思想の充ち満ちて破壊と建設との間に橋梁をなしたること、是れ獨逸の十六世紀をして異彩あらしむる所以のものなり。所謂衝突(破壊)調和(建設)とは何の謂ひぞ。曰はく宗教改革は舊來の形式的束縛を破壊して自由思想の礎を成せり。ルuterが聖書の翻譯は學俗二語の對立を破りて新高地獨逸語といふ普通語を成立せしめたり。其の他文學が寺院、宮廷、貴族の手を離れて大學の手に移れる、モデル「模型市府」ソライ「太陽系的國家」等のユートピアを畫せる學者ありし、若しくは神學者、宗教家の論議の盛んなりし等、何れか之れを證せざるものぞ。然れども、當時は、要するに、衝突未だ全く終らずして建設やうやく緒に就かんとせる時なり。故を以て其の論談畫策するや、大膽に又熱心なれども、精細緻密は之れを缺けり。従ひて當時の文學は教學に關する論其の多きに居り、純粹に詩歌の範圍に屬するものとても、頌歌の如きもの、若し

くは、宗教的興味を帯びたるもの多かりき。而して其等は何れも、真情流露の掬すべきものありながら、表現の法、甚だ粗笨にして其の質は概ね其の形と伴はざりき。當期の文學に就き、主として述ぶべきは、宗教改革、ルuterが聖書の翻譯(即ち新高地獨逸語の成立)、神學者三派の論著、ルuter風の頌歌、及び、ハンス、ザックス等の諷刺詩、是れなり。而して、此等は何れも宗教改革を中心として成れりといふを得べく、之れを大にしては十六世紀思想の所産なりしこと勿論なり。

十六世紀の標章ともいふべき宗教革命の大事業は、此の略史に於いても細叙すべき價值あるものなれども、普通の列國史に詳しければ略しつ。さて、一千四百八十三年十一月十日アイスレーベンに生れて一千五百四十六年二月十八日に歿せし宗教改革家マルティン、ルーテル(Martin Luther)が獨逸國文學にいたし、大功二つあり。其の聖書翻譯によりて新高地獨逸語を文學上の用語たらしめしこと、及び、新に高雅雄麗なる頌歌をものせしこと、是れなり。彼れと時を同じうしてウルリッヒ、フレンツェン(Ulrich von Hutten。一四八八—一五二三)あり。愛國の心深く、獨逸國民をして政治上、宗教上、羅馬の羈絆を脱せしめ、又、諸侯伯の跳梁を抑えて其の獨立

を全うせしめんと力めき。彼れは、初め、ルーテルの改革運動を見て、單に僧侶等が神學上の小論争に過ぎずと爲し、己にして其の運動の、國民の獨立に大關係あるを見、在來用る來たりし拉丁語を捨て、新に獨逸語を學び、大にルーテルに力を添へんとしき。されど其の運動の餘りに激烈なりしと、ルーテルが言語によれるとは異なり、劍によりて改革を遂げんとせしとにより、終に異教徒、反逆人として國外に逐ひ排はれたり。是よりさき、フッテン、拉丁獨逸兩語の分立(十六世紀に至るまで、用お、人民は野卑なる獨逸語を用ゐ、大に文化の普及に害あるを見、獨逸語を以て書を用ゐ、二者分立せること數百年)の、大に文化の普及に害あるを見、獨逸語を以て書(十六世紀に至るまで、用お、人民は野卑なる獨逸語を用ゐ、大に文化の普及に害あるを見、獨逸語を以て書を用ゐ、二者分立せること數百年)を著して、一般の人民に讀ましめんと企てしが、遂に成功するに至らざりき。ルーテル一千五百二十一年の冬、聖書翻譯の稿を起こして、同二十二年新約書の譯を終へ、後、更に舊約書に着手し、一千五百三十四年、遂に、聖書全部を譯了して公にせり。ルーテルが此の大譯述を爲すや、高きと、低きと、學者と、俗人との凡べてをして了解せしめんことを目的としき。而して、其の世に出づるや、直ちに人民の書として重んぜられ、一千五百五十八年に至るまで、聖書全部は三十八版を、新約書は七十二版を重ねるに至りき。かくて、新高地獨逸語は、漸次に文學上の用語となるに至りぬ。

次に述ぶべきは、神學者の論著なり。當時の神學者は、其の唱道せし主義の異なるに従ひて、三種に區別することを得べし。直受派、正統派、及び自由討究派、是れなり。直受派とは、唯だ、聖書其のまゝを信じて、宗教の極致は、聖書を基として成せる。教義の組織にも存せず、また、人間理性の指示する所にも存せずと、駁けるものにて、羅馬加特力教會の學者、之れに屬す。正統派とは、之れに對して起これるルーテル等の一派にして、聖書の中に明かに現れたりと自から信ずる教義に依れるものなり。されば、彼等の中には、聖書の解釋に於いて、若しくは、極致とする教義を、選ぶ點に於いて、ルーテルと意見を異にせるもあれど、其の宗教的立脚地の、聖書以外に出でざるとに於いて、其の主義を同じうせる者なり。自由討究派とは、神秘家ゾイグルの徒、或は敬虔家(Pietist)など稱せらるゝ者にして、一定の主義によりて一派を成せる者の謂ひには非ず。唯だ、理性の指示する所に従ひて、各自の信仰する所に赴くとに於いて、其の見を同じうせる者を、總稱せるなり。第一派の神學者等の著書には、獨逸語を用ゐたる者、甚だ少なし。其の主なるは、カヂシウス(Cajsius)、一五二二——一五九七、及び『獨逸神學』の著者、ベルトールド(Berthold)等、第二派に屬する者の主要なる

は、教義の正統に關して久しくルーテルと争ひしウルリッヒツギンクリ(Dirich Zwingli. 一四八四——一五三一)及び、ルーテル等なり。第三派に屬する者にて、茲に其の名を掲ぐべきは、ヨハン・マテツウス(Johann Mathesius)ヨハン・アルント(J. Arndt)ヨハン・アグリコラ(J. Agricola. 一四九二——一五六六)ルーテルの論敵『道理』『俚諺集』『獨逸國民編年誌』等の著者にして論鋒の鋭利明晰なることによりて名ありしセバスチアン・フランク(Sebastian Franck. 一五〇〇——一五四五)及び、一千五百七十五年、シレシアなるアルトサイテンベルヒに生まれ、六百二十四年に死せし獨逸神秘派の泰斗ヤーコプ・ボーム(Jacob Böhme)等なり。當時の歴史家には、『バツリア編年誌』の著者ヨハン・トアルマイル(J. Turmair. 一四七七——一五三四)フアレリウス・ブンシヘルム(Valerius Anselm.)ヘーギテウス・テューデ(Aegidius Tschudi. 一五〇五——一五七二)ヨハン・クスレル(J. Kessler. 一五〇二——一五七四)ハインリッヒ・ブルリニングル(Heinrich Bullinger. 一五〇四——一五七四)クリストフ・レーマン(Christoph Lehmann. 一五六八——一六三八)ツァハリウス・テオバルド(Zacharius Theobald. 一五八四——一六二七)等あり。當代に於ける最も良き抒情詩は宗教に關せるものにして、中に就きて最も善きを

ルーテル風の頌歌とす。蓋し、ルーテルが當時會堂にて唱和せし歌曲の粗笨なるを患ひ、自ら一昧を創して、數十篇の頌歌をも、のせしを中心とし、時の詩人等の之れに倣へるを稱して、ルーテル風の頌歌とはいふなり。其等の頌歌をも、のせる詩人の主なるは、パウルス・スペラトウス(Paul Speratus)ニコラウス・デッシュウス(Nicolaus Deins)ニコラス・ヘルマン(Niklas Hermann)ニコラウス・セルキツケル(Nicolaus Selnecker)ヨッブ・ニコライ(Philipp Nicolai)等にして、彼等の作は、其の調の高雅なる、意の幽遠なる、及び熱誠の發露せる等の點に於いて、今に至るまで、内外に尊崇せらる。ルーテル時代の抒情詩と次期の抒情詩との間に介して、二者の橋梁を爲したるは、ゲオルグ・ルードルフ・エッシヘルリン(Georg Rudolf Weckherlin. 一五八四——一六五一)なり。彼れの詩は、風調律格の優雅なる點に於いて、第五期の詩人オピッツのに比せらる。又、當時に行はれたる酒醜、軍事狩獵に關する俗歌、及び、歌謠、滑稽物語等は、おほむね『アムブラーセル・リーデルブーフ』(“Ambraser Liederbuch”)に收められたり。當代の詩界に於ける精華として、上はブルテルに比せられ、下はオピッツに比べらるゝを、一千四百九十四年、ニルンベルヒに生まれ、六十餘歳の高齡を以て逝りしハンス・ザツクス(Hans

Saaks)とす。彼れは靴工を業とし、傍ら文筆に従事して終にマイステル、ツンケルとなりしが、其の巧みに世態人性を寫せるや、野卑なる人生觀を有し、自負傲慢にして滑稽諷刺を好みし當代人民の習癖は、戯むれども卑しからず、鋭けれども毒なき彼れの筆によりて、隈なく描き出だされたり。其の作る所の抒情詩、諷刺詩、劇詩、物語歌等、合はせて六千餘篇其中、半ば滑稽諷刺的に、半ば教訓的なる物語歌、最も傑出せりと稱せらる。『聖ヒーターと山羊』等、最も名高し。彼れと時を同じうして物語歌を物せる詩人に、ブルクハルド、ヴルデイス(Burkhard Waldis. 一四八五——一五五八)、エラスムス、アルメルス(Erasmus Alberus. 一五〇〇——一五五三)等あり。ルーテルの歿後、十六世紀の後半に及びては、爭論嘲罵の氣風やうやくに衰へ行きしが、エスイト派新に起こりて盛に新教を攻撃するに及び諷刺家ヨハン、フィシヤルト(Johann Fischart. 一五五〇——一五八九)出でて、烈しく、エスイト派を嘲罵せり。當時に於ける嘲罵論争の痕跡は、時の劇詩、特に、ニクラウス、マヌーエル(Niklaus Manuel 一四八四——一五三〇)の劇詩に於いて見ることを得。所謂宗教劇は、此の期に至りて、見るべき進歩を爲せり。其の作者の重なるはパウ

ルレーナフルン(Paul Rebhurn)、バルトロメウス、クリューゲル(Bartholomaeus Krüger)等にして、ハンス、ザツクスも、亦此の種の劇を作れり。また、當時の劇界は英國喜劇家と稱せる輩によりて大に革新せられたり。ヤーコフ、アイレル(Jacob Ayer)、ハインリッヒ、ユーリウス(Heinrich Julius 一五六四——一六一三)等は、所謂英國喜劇家の重なるものなり。

所謂「人民の書」の中、最も廣く行はれたるは、一千五百八十七年に初めて出版せられたる『ファウスト物語』(“Dr. Faustus”)なり。此の魔力的物語の大に行はれたるは、魔力を信じ神秘を好める當代の人心に合ひたればなり。フィードマン(Wiedmann)フィックラム(Vielram)等の作、亦、人民の書としてもて囃されき。

#### 第五期 (一六二五——一七二五)

第四期に於いて大膽に發表せられたる衝突は、其の末年に至りて、益、其の勢を逞らし、更に、第五期に入るに及びては、潰裂四出、又收拾すべからざるに至りき。ルーテル派、カルヴィン派の意見の分離、南獨逸に於けるエスイト派の布教、諸侯伯の爭權、外邦の干涉等、宗教、政事、兵馬に關する是等の烈しき争ひは、今や滔天の勢をなして、獨

逸を襲へり。絶對權の下に統治せられたる舊組織は、已に破れて跡なく、宗教改革に次げる幾多の政治的運動は、些の統一、自由を國民に與ふる望みなし。是に於いて多感なる若しくは、思慮ある人々は、時世の旦夕に濟ふべからざるを見、現世を厭離して希望を他界にかけ、志を政權兵馬に絶ち、退きて、慰樂を文藝に求むるに至り、宗教家は讚美歌の製作に熱中し、他の教育ある人は、或は、獨逸語學研究會を組織し、或は、文學會を設立して、以て自ら慰めたり。是を以て、當時の文學は、時事に就きて、多く、語る所、あらず、慘怛たる三十年戦争に就きてすら、其の傳ふる所は、なほは、稀なり。

當期の時事に就きて記憶すべきものは、三十年戦争にして、當代の文學に就きて特に傳ふべきは、諸文學會の組織、第一シレツァ文學會の設立、オビツの詩、及び所謂敬虔家の讚美歌等なり。

當時勃興せる文學會の重要なものを舉ぐれば、曰はく、成果會「ベクニッツ文學會」一六四四設立、曰はく、第一シレツァ文學會「索遜文學會」ハムブルク文學會「第二シンツァ文學會」等は、是れなり。「第一シレツァ文學會」はオビツ之れを率ひ、「索遜文學會」はハ

ウル、フレミンクによりて、ハムブルク文學會「ツューゼン」(Zesen)によりて「第二シレツァ文學會」は、ホフマンズワルダウによりて代表せられき。

作詩の術、聲調律格の研究は、オビツ及び其の徒弟等に革新せられて、見るべき發達を爲しき。されど、其の進歩は、形式の上に止まり、思想内容の點に於いては、唯だ、外國の文學を模倣せしのみ。また、彼等の作の最も見るべきは、抒情詩、讚美歌等にして、叙事詩に至りては、一の注意すべきものなかりき。

當代第一の詩人として、時の文學に形式の上に、大なる進歩を與へたるを、第一シレツァ文學會の創立者マルティン、オピツ(Martin Opitz)とす。彼れは、一千五百九十七年シレツァなるアンツラウに生まれ、一千六百三十九年疫病に罹りて歿しき。彼れは、一千六百十八年拉丁語にて「獨逸語に對する輕蔑に就きて」なる論文をものし、其の作詩に對する意見を公にせしが、其の最も重要な著述は「獨逸詩書」なり。此の書は、一千六百二十四年より同六十九年に至るまで九版を重ねて、廣く世に行はれ、かくて、韻文改良は、漸次に實行せらるゝに至れり。蓋し、是より先き三百年このかた、作詩の術、いたく衰頹して、作者は、唯だ綴字を敷ふるの外、何事をも辨へざるに至

りしが、オビッツは句格韻律の重要なるを説き、兼ねて純良なる言語を選択せざるべからざることを論ぜり。彼れは學才の高くして、特に拉丁語の韻文に秀でし技倆ありしより、其の論は、大に學者等の注意を惹き、つひに、第一シレマア文學會を組織して作詩の改良に従事するに至りぬ。但し、オビッツの文學にいたせる功績は唯だ、詩形の上に在り。詩の精神内容の如何に就きては、彼れは、殆んど知る所なかりき。彼れが詩の、整正優雅なれども、摸倣たるを免れず、又、神來の聲にあらざして、彫琢の結果なるが如き觀あるも、自然の敷なり。其の抒情詩の尤なるものは、彼れが『戰亂の間の慰藉』(一六三二)の中に見ることを得。『心の平和』、『田園生活の頌』、『フェスフィウス』(Vesuvius)等、また誦すべし。

オビッツの徒弟、或は、摸倣者の作に就きては、特に述ぶべきことなし。精神内容を外にして、聲律調格にのみかゝつらひし者が、其の師以外に機軸を出だすこと能はざりしも、本より其の所なり。批評家の彼等を評して、ハムブルクより伯林に至る坦々たる大道も、オビッツが摸倣者の作(の變化なき)に比すれば平かならずと云へる、よく穿てり。

此の時代に出でたる詩の、最良にしてまた最も整實なるは、讚美歌、特に、敬虔家バプティストの讚美歌なり。オビッツの新詩法を用ゐて抒情的熱誠を歌ひたる最初の作家は、ヨハンナス・ヘヘルマン (Johannes Heermann. 一五八二——一六四七)にして、其の詩はおほむね宗教上の不満足を言ひ表せる者なり。シモン・ダッハ (Simon Dach. 一六〇五——一六五九) ロベルト・ロヴェンティン (Robert Rotherhin. 一六〇〇——一四八) アンドレアス・クリヒウス Andreas Gryphius. 一六一六生) 及び、其の子クリスチアン・クリヒウス Christian Gryphius. 一六四九——一七〇六等、また名あり。所謂バイテイスツの開祖をヒリップ・ヤコブ・スパーニヤル (Philip Jakob Spener) とす。バイテイスツは、神秘派の一種にして、ルーテル派教會の正統派に對して、神秘派の羅馬教會に對するが如き位地を取れる者なり。此の派に屬する頌詩作家の重なるは、パウルフ・レミング (Paul Fleming. 一六〇九——一六四〇) ゲルハルト・テルステーゲン (Gerhard Tersteegen. 一六九七——一七六九) 等なり。その他、フリードリヒ・スプエ (Friedrich Spee. 一五九一——一六三五) ゲオルク・ハイマルク (Georg Neumark. 一六二二——一六八一) パウル・ゲルハルト (Paul Gerhart. 一六〇六——一七二〇) ヨハンナス・シムン (Johannes Scheffer. 一六二四

——七七)クリスチアン、クノル、フオン、ローゼンロート (Christian Knorr von Rosenroth. 一六八九死) クイリヌス、クールマン (Quirinus Kuhlman. 一六五一生)等、又、頌詩作家として、名あり。是等の頌詩作家は、其の主張傾向、詩格等に於いて、各、特種の趣を具へたれども、教會の意見を述ぶるよりは、寧ろ、個人的感情を抒べし點に於いて、一致せり。先きに述べたるフレミングとクリスチヤン、ギンテル (Christian Günther 一六九五—一七二三)とは、群作家の中に在りて、少しく注意すべき詩人なり。フレミングの詩は、ひたぶるに文字を弄せし當世作家の通弊を脱し、おほむね時事に關係せるを以て、他に見難き興味を有し、ギンテルの詩は、概ね彼れが短生涯の中に起これる不幸、災厄を歌へるものにて、讀む者をして涙を催さしむる妙あり。二者の間、ヒリッ、フアン、ツューゼン (Philip von Zesen 一六一九—一八九) ヒリッ、フアル、スタル、フアル (Philip Harderffer 一六〇七—一六七) ベルト、ルト、プロクテス (Berthold Brookes. 一六八〇—一七四七) ホフマン、フオン、ホフマン、スワルド、ダウ (Hoffmann von Hoffmanswaldau. 一六一八—一七九)等、あれども、何れとも茲に特筆する要なし。教訓詩は此の期に至りて益、無趣味のものとなりしが、諷刺詩は、其の材料の選擇せ

られ、記事の短縮せられたるが爲めに、少しく發達せり。當時の教訓詩、諷刺詩、作家の中、最も秀でたるを、フリードリヒ、ロカガウ (Friedrich Logau. 一六〇四—一五五)とす。オピッツに反抗せるハンス、キルムゼン、ラウレムス、ルロ (Hans Wilmsen Laurenberg 一五九〇—一六一九) オピッツの徒ヨアヒム、ラハール (Joachim Rachel 一六一八—一六三) シリスタアン、ヘルニク (Christian Wernicke. 一七二〇死) ベン、ヂァ、ミン、ハイキルヒ (Benjamin Neukirch. 一六六五—一七二九)等とす。劇詩、また、當期に於いて何等の進歩をも爲さざりき。當期の劇詩界は、アンドレアス、グリヒウス (Andreas Gryphius. 其の著に“Papiuan” “Karl Stuart” “Horribilicribrifax.” 等あり) マニエル、カスバル、フオン、ロー、ハンシ、ュ、タイン (Daniel Caspar von Lohenstein. 一六三五—一八三) 及び、クリスチアン、ヴァイ、ゼ (Christian Weise. 一六四二—一七〇八)によりて代表せられたり。

翻りて、當時の散文々學を見れば、韻文に比して、更に粗笨蕪雜にして、或は半ば外國の語を用ゐ、或は虚飾、街誇の風の行き亘れるなど、文學的價値の立場より見る時は、殆んど顧みるに足るものなし。唯だ、其の時事に關して、獨逸の十七世紀に於ける、暗黒時代の影を寫せるものあるより、文學史家の注意を惹くあるのみ。



散文小説にて注意すべきは、ハンス・ヤーコン・シリスト、フンケ、シルトメルスハウゼン (Hans Jakob Christoph von Crimmelshausen. 一六二五—一七六六) が「シムツリシムツス」(Simptissimus.)、ヒールハルト、ヘルテル、ハムメル (Eberhard Werner Happel.) が「ペンヌン」(“Mandarell”) 及びヨハン、ミカエル、モーゼン、ロミン (Johann Michael Moserosch. 一六〇一—一六九) アンダレアス、ハインリヒ、ブーフホルツ (Andreas Heinrich Buchholz 一六〇七—一七一) ハインリヒ、アンゼルト (Heinrich Anselm 一六五三—一七九七) 劇詩家 ローハン、シタイン等の小説なり。又歴史的著述にては、ヨハン、ヤーコン、マスロン (Johann Jakob Mascoy. 一六八九—一七六一) が『獨逸人民史』、シグムント、ファン、ビルケン (Sigmund von Birken. 一六二二—一八一) が『アウストリヤ家の歴史』、ゴットフリート、アルノルト (Gottfried Arnold) が『教育史』等あり。また三十年戦争に關するものにては、ヒリップ、ファン、ハトニヤン (Philipp von Chemnitz. 一六〇五—一七八) フリートリヒ、フリマウス (Friedrich Frisius) 等著あり。また教訓的散文、バイテイスム、及び言語に關するものにては、ゲオルク、シトテル (Georg Shottel.) マウクステイン、エーゲンホルツ (Augustin Egenhoff.) ヘルタザル、シモン (Balhasar Schupp 一六一〇—一六一) ムルツ、エーゲン (Ulrich Megerle. 一六四

二—一七〇九) シリスタ、マント、マウス (Christian Thomasius. 一六五五—一七二八) ロッパ、ヤーコン、スパーケル (Philipp Jacob Spener. 一六三三—一七〇五) アウグスト、ヘルマン、フランケ (August Herman Francke. 一六六三—一七二七) ヨハン、ゲオルク、ギロテル (J. G. Gichtel. 一六三八—一七一〇) 等あり。哲學者にては、ゴットフリート、ヘルム、ライプニッツ (Gottfried Wilhelm Leibnitz. 一六四六—一七一七) 及びクリスタン、ゾルン (Christian Wolf 一六七九—一七四五) あり。されど、是等は、何れも純文學に縁遠きもの、此の略史の講ずべき際にあらず。

以上、予は第四世紀より十八世紀の初めつかに至る獨逸古代文學の要領を講じ了へつ。顧みれば、千有餘年の獨逸文學に於いて特に稱するに足るべきもの、唯だ一つの『ニーベルンゲンリド』ありしのみ。之れを除きては、片々たる幾多の作物と累々たる數百の小詩人の頭顱との存せしに過ぎず。もとより、歌曲小説、劇詩、頌詩、諷刺詩、教訓詩、滑稽詩、物語歌、既教集、さては、人口に膾炙せる御伽物語等の、歴史上の價值興味あるものなかりしには、あらねど、文學的價値の立場より見る時は、殆んど落莫荒涼とも稱すべき有様なりき。また、神學者、哲學者等が、拉何語にてものせ

る著述、論文等は、枚舉に遑なきほど多かりしかど、かゝる述作は、獨逸の國文學、特に純文學に對して、いさゝかも裨益する所なかりき。要するに、十七世紀に至るまでの獨逸は、特に國文學と稱すべきものを有せざりしなり。然るに、十八世紀の初めに當たりて一道の光明は、獨逸の文學を照らし、其の光は、やがて天に沖して世界に光被するに至れり。光明とは何ぞ。クロツプストツク、フンケルマン、ホーランド、レスシンジ、ゲーテ、及びシルレル等の、相つぎて出てたること、是れなり。是等諸文豪の輩出するに及びては、獨逸文學は、はや已に舊時の面目に非ず。精緻なる美學的的研究、嶄新なる文學批評、深遠高雅なる抒情詩、叙事詩、劇詩等、其の光彩の陸離たる、文質の相和せる、何れも、吾人の耳目を新にするに足らざるなし。この一轉機を境として、是れより以後をば近世獨逸文學と稱す。便宜の爲めの區劃たること固よりなり。今や、手は、ものうかりし斷片的古文學を講じをへて、やうやく近世文學を講ずることとなりぬ。いでや、新文學勃興の由來を説き、進みてゲーテ、シルレル等に及ばん。

## 近世獨逸文學史

### 近世文學

第六期(自一千七百二十五年至一千七百七十年)

第一章 當期の特質 文學諸派 スプス、ライプチヒ兩派の論

争 ポットシエト ボードメル フライティングル 小説作者

ハルレル ハーゲドルン 索遜派 グライム及び其の朋友

頌詩作者 散文小説

フンケルマン、クロツプストツク、レスシンク及びホーランド等が、獨逸の文壇に馳聘せし時代は、オピッツの時に比して遙かに時世を隔てたる觀あり。レスシンクが起ちて國民文學の改革を唱ふるに至るまで、ブルフが在世の間(一六九七—一七五四)に於ける獨逸文界の進歩は、吾人をして、前期と當期との間に數百年の歲月の経過しつらんとおもはしむるほどなりき。蓋し、改革家の名は、レスシンクに取りて決して溢美

の稱にわらず、彼れが自國の文學にいたし、功勞は、舊形式の上に止まらずして、之れに與ふるに新精神を以てし、之れに吹き込むに新活力を以てしたり。かくして獨逸の文學は摸倣的ならずして其の特質を具ふるに至り、單に知識學問の排列に止まらず、活動的生命を根據としてあらゆる材料を咀嚼するに至り、又固く其の特質を保持しつゝ、廣く世界の文學の精華を吸收するに至りぬ。但し、近世の獨逸文學を大ならしめたる是等の思想は、もとより彼れに次ぎて起これる幾多の文士によりて擴張せられ、また彼れ以前の學者にして多少之れを豫想せし者なきにはあらねど、盛んに之れを唱導し、之れを以て獨逸の文學を鼓吹せる者は、特に、ゴットホルト、エフライム、レスニングなりといはざるべからず。かく彼れは、當代の文界に於ける第一流の人物なれども一方より見ればまた時世の兒たるを免れざるの觀あり、從ひて、此の大事業は彼れ一人によりて成し遂げられたりとは云ひ難し。また、一方より見れば、彼れが成せる事業は、初めより彼れが爲めに備へられたるもの、如く、其が成功の次第を明かにせんには、文運の興起に便りよかりし當世の事情を詳かにせざるべからず。いでや少しく彼れに先きだち、若しくは、彼れと時を同じ

うせる群小作家を叙述しゆく傍ら、當期に於ける文學隆興の因縁を討ねん。右に謂へる因縁の中には、文學に對する國家の保護を含めざるべし。一千七百二十五年より同七十年に至る五十五年の間、述作に従事せし最良なる作家の數者は、普魯士に屬し、また、當時に於ける歴史上の大事業といふべきは、フリードリヒ、ヰルヘルム第一世及び其の子フリードリヒ大王の治下に在りし普國國權の擴張せることなれども、國權の擴張と文學の進歩との間には、何等直接の關係の尋ねべきものなければなり。當時伯林の朝廷に於いては、文學の進歩といふが如きことは、殆ど全く齒牙に懸けられず、殊にフリードリヒ、ヰルヘルム第一世の文學、哲學を蔑視せしや、其の文學者及び大學教授等と遇すること、歌舞音曲の藝人わきまに異ならず、其の宮中に招致せられし唯だ一人の師傅と史官とを兼ねたる學者の如き、殆んど帶間同様の待遇を受けたりき。大王フリードリヒ二世は武を尙ひ、兼ねて文學をも嗜みたれど、聊かも自國の言語を修めて文をものせんの心なく、其の佛蘭西語にて『獨逸文學論』を著すや、其の中には、一たびもクロプストック、レスニングの名を配さず、また人ありて『ニーベルンゲンリド』を獻じたる時、彼れは、一彈丸にも値せずとて、之れ

を斥けまた、此の書の書庫に在るを見、直ちに命じて之れを取り去らしめきといふ。要するに、彼れは文學上に於いては、あくまでも佛蘭西人なりき。彼れの友ブルテールが、ベルリンの朝廷にても、のせる書東に、此處に在る予は、猶ほ佛蘭西に在る如し。我等は、皆、我等自らの國語(佛語)を用ゐて談話し、ケーニスバルヒの教育ある人々は、真情もて、多く我が詩を誦す。獨逸語は、唯だ、兵士と牛馬とに用ゐらるゝのみ。我等は旅行する時の外に、此の語を用ゐる必要なし。と云へるもの、よく王の嗜好を表すると共に、當時の獨逸文界の一方に佛國文學の盛んに行はれたる有様を明かにするものなり。王は、かくの如く、獨逸語にて作れる文學を蔑視したれども、猶ほ、間接に、國文學の發達を助けたるものあり。何ぞや。彼れ自らの強大なる精神を國民の性質中に吹き込みたると、及び、國威を發揚して誇るべき或物を國民に與へたること、是れなり。王の文學に對する意見、嗜好及び其の政策の非難すべきと否とに拘らず、國民は、一身を國權擴張の犠牲に供したる王の生涯を仰がざるを得ざるべく、王の事業性行の、國民を感化することなかりせば、國文學の復興亦終に見るべからざりしならむ。

十八世紀に於ける國文學の勃興は、已に、オピッツ、トマサウス、シラ、プライプニッツ、及び、ブルフ等によりて始められたる事業の連続なりといふを得べし。當期に於ける政事上並に社會上の有様は、前期のに比して、大に、文學の興起に利あるものありき。此の時に至りては、三十年戦争を去ること已に七十餘年、殺伐の氣風や、和らぎ、宗教に關する紛争憎怨、亦著るく薄らぎて、人民漸く其の途に安んずるに至りぬ。かく兵亂争擾息みて、人々衣食に安んずるを得、國威の發揚するにつれて、後顧の憂ひなきに至れるより、元來政治に趣味を有せざる者、若しくは、小邦に生まれて政事に與ること能はざる人々は、心を文學の研究に委ねて他に得べからざるの快樂、自由を此の界に求むるに至れり。是に於いて、文學的盟社は、此處彼處に起こり、雜誌、通信論議等によりて、其の意見を闘はし、殊に、索遜、普魯士、瑞西等の諸州は、文學によりて其の氣脈を通ずるに至りぬ。

前世紀の諸文學會は、國文學の發達に關して、全く功勞なかりしにはあらず。されど、其の功は、唯だ、韻文界より佛語を驅逐せるに止まりて、彼等自らがものせる詩歌は、何れも模範を佛蘭西の詩歌に取れるものなりき。十七世紀に起これる此等の

文學會の一にして、當時なほライプツィヒに存せるものありしが、一千七百二十七年、ゴッティンゲンに出で、半ば其の組織性質を改めたり。之れに先だつと六年ばかり、ツェーリヒの歴史學教授ホーデルメル、及び其處なる牧師フラインティングルの二人、詩歌の研究、改善を目的として定期刊行の雑誌を起こしき。是れ所謂瑞西派の萌芽也。ハルレの文學盟社は、一千七百三十四年より同三十七年まで存したりしが、其を代表せし主なる者は、サミーエル、ランゲ (Samuel Lange) 及び、ヤーコフ、ピラ (Jakob Pira) にして、後に二人のハルレを去るや、同會は俄に有るか無きかの有様となりき。更に重要なるを一千七百四十四年幾多少壯の人々によりてライプツィヒに起こされ、後に瑞西派と稱せられたる盟社とす。彼等は、初めは、ゴッティンゲンの説く所を奉じたりしが、やがて、彼れに背きてホーデルメルに左袒するに至りき。ホーデルメルは、詩歌に關して組織的なる説を有せざりしかど、其のゴッティンゲンが究屈頑固なる説に反對し、想像の自由なる活動の、詩歌に缺くべからざるを説き、また、佛國詩人よりは英國の詩人を貴べる點に於いて注意せられたり。ライプツィヒ、及び、ツェーリヒの二派は、詩歌に於いても、批評に於いても、共に當時の

文界の牛耳を握りしが、幾くもなく、他の文學盟社は、伯林及びハルベルスタットに於いて形づくられたり。詩人クライム、猶ほ、ハルレに學生たりし時、已に、其の友ウーッ、ゲッの二人と文學小會を催したりしが、二人の青年詩人クライスト、及び、ラムレルの之れに入るに及び、普魯士派として世に知られき。ラムレル、後に、伯林に往き、レッシング、メンデルズゾーン、ニコライ等數人の友の贊助を得て、別に一の盟社を形づくれり。クライムは、友を諸派に求めて交遊する所甚だ廣く、後に一餐をハルベルスタットなる己が家に設けて、多くの青年詩人を養ひしが、ヤコビ、ミカエリス、シュミット、ハインゼ等、其の尤なるものなりき。以上、略々文學諸派の起源、沿革を説きたれば、次に此等諸派の代表者に就きて一言すべし。

ヨハン、クリストフ、ゴットシエド (Johann Christoph Gottsched) は、一千七百年を以てケーニスベルヒの近傍に生まれ、同二十四年ライプツィヒに行き、其處にて國文學の研究を目的として一盟社を組織しき。彼れは先づ、文學的事業の手始めとして、第二シレリア派の浮誇虚飾の弊を攻撃したりしが、此の攻撃に名聲を博するや、更に進みて、詩歌の製作に關して嚴格なる法則を説きぬ。彼れの主張せる三條の規則に

曰はく、詩歌は其の基礎を自然の模倣に置かざるべからず。知力は想像の上に立ちて之れを制御せざるべからず。詩歌の最好の模範は佛蘭西の文學に求めざるべからずと。此の時に當たりて、許多の英詩翻譯現はれ、ミルトンは特に多くの獨逸人間に賞讃せられしが、最も熱心に彼れを賞揚せしは、一千六百九十八年ツューリヒに生まれし『失樂園』の翻譯者、ヨハン、ヤーコフ、ボードメル (Johann Jakob Bodmer) なりき。彼れは、詩歌に於ける驚異すべき事柄に就きてといふ論文に於いて、ゴットシットが非難に對して、ミルトンを辯護せしが、かくて、批評界に生氣を興へ、また他の其結果を生ぜし盛んなる論争は始まりぬ。十八世紀の新文學の興起せしは、實に、此の論争の中よりなりしなり。此の論争(特に劇詩に關する)に於いて、しばしが程は、ライプツィヒの批評家の勢力頗る強く、又女優カロリチ、ノイベル及び其の妻ルイゼ、フィクトリア、ゴットシット (Luise Victoria Gottsched) の共に彼れを助けて、佛國風の模型を改めんとする諸運動に反對せるあり、ゴットシットまた、彼等及び其の他の小部下を率ゐて、勇ましく瑞西派に對抗したりしが、彼れの氣漸く驕りて、當時日の出の勢なりしクロッパストックを非難するに及び、彼れの黨與は、おしなべて彼れに反き

たり。ゴットシットは、クロッパストックの著『メシヤス』(Messias)を評して以爲へらく、其の不規律にして無價値なる、到底クリストフ、オットー、シェーナイク (Christoph Otto Schönaich) が新作の叙事詩『ヘルマン』(Hermann)に比すべくもあらずと。されど世間も、多くの批評家も、共に、『ヘルマン』を斥けて、散漫沒趣味、讀むに堪へざるものとなしき。劇詩的文學に於いては、彼れ、また、クリスチヤン、フェリックス、グライゼ (Christian Felix Weise. 一七二六——一八〇四)に、烈しく攻撃せられたり。グライゼは、熱心に劇界の改良を企てたる者にて、殊に、輕快なる滑稽樂劇、オペラ及びメロドラマを入れて、ゴットシットが『死するケート』の如き重も苦しき悲劇を排せんと企てたる者なり。グライゼが樂劇の場に上さるゝや、ゴットシットは、己れを侮辱するものなりとして、いたく憤りき。されど、彼れの否運は、猶ほ茲に止まらず、先きに彼れに従ひし流行女優カロリチ、ノイベルは、今や新派に黨して、ゴットシット自身に關する滑稽劇をライプツィヒ座にも、のし、彼れを助けし妻は、た、革新派に與して彼れを非難しぬ。その他、世間並びに批評家の、彼れに對する攻撃の烈しかりしは、いふまでもなく、中には、惡魔よりゴットシットに與へし書といへるを草し、處々に配布して彼れを辱むるものさ

へあるに至り、曾て一派の領袖として批評界の全權を握りし者、今や全く世間に見棄てられて、あへなくも草莽の中に沈みぬ。されど、ゴットシヨッドが獨逸の國文學にいたし、功は終に没すべからず。假令、彼れの功は第二シレツア派を攻撃してロヘンシグティンを抑へし外にこれなしとするも、此の一事、猶ほ能く、彼れが名を侮蔑の中に救ふを得べし。彼れの著『詩歌の批評的理論』は、詩歌の眞性質に就きて發明し得たる所なけれども、作詩の術、言語の發表等に関しては、見るべき説少なからず。彼れは要するに、文學外面の改革者なり、而して、其の功勞はた重に消極的方面に在り。

ポードメル及び彼れの率ひたる一派の詩歌論の成功は、其の論敵ゴットシヨッドのと同むく積極的方面よりも寧ろ消極的方面に存したりき。彼等が其の論敵に對して佛蘭西文學を摸倣することの終極の目的とすべからざるを論じ、ミルトンを侮蔑するところが批評家の判断の正しきことの證據とならざるを説けるが如きは、何れも、正當なる意見なりしも、其の進みて自家の詩歌論を發表するに至りては、其の既く所、ゴットシヨッドのに比して少しく廣きものあるに過ぎざりき。彼等は以爲へら

く、詩歌は自然の模倣ならざるべからず、言語にてもものする繪畫の一種類ならざるべからず、(繪畫の丹青を以て自然を模倣する如く)其の目的は實用に在らざるべからずと。又、彼等は驚くべきこと及び出來得べからざることをすらも、詩歌の原素として許容せらるべきことを痛論せり。實用的、驚異的の二條件は、一見調和すべからざるが如く見ゆれど、彼等は、其の事柄の虚誕にして道德的訓誡を目的とせる『エツツナ物語』に於いて、二者の調和を見るべしとなし、從ひて、此の種の物語は、大に此の派の人に尊崇せられき。かくてゲルレルトリヒトエル、ブフェッフェル等幾多の作家は、此の格言に準ひて小説をものしたり。

クリスチアン、フルヒテゴット、ゲルレルト(Christian Furchtegott Gellert. 一七一六—一六九)は小説、頌詩等の作家として、大に成功したる瑞西派の一人なり。其の言語文章の通俗なれども、明瞭正確なる、其の教訓的趣味の程よく用ゐられたる、及び、其の信仰の狭からずして且つ滑稽の才ありし等の故を以て、あらゆる社會の熱心なる賞讃を受け、名聲遠近に噴々たりき。其の多くの人に歡び迎へられし一例を挙げむに、フリードリヒ二世は、彼れを見んことを望み、會見するに及びて、いたく其の談話を

喜び彼れを評して「獨逸の教授中、最も理論的なる者の一人なり」と云ひ、また、或る賤の男が、彼れの詩に感ぜるの餘り、一輛の貨物を贈りて謝意を表せしことありきといふ。されど、彼れの成功せるは、主として、其の詩の教訓的、諷刺的なる方面に在り。燃ゆるばかりの熱情はもとより彼れに於いて見るべからず、其の想像はた、さまざま稱すべきものにあらざりき。他の小説作家マクヌス、ゴットフリート、リヒトエル (Magnus Gottfried Lichtner. 一七一九——一八三) 及びゴットフリート、コンラッド、ブッフフェル (Gottfried Konrad Pfeffel. 一七三六——一八〇九) また教訓的實用を主とし、想像を犠牲に供することに於いて、ゲルレルトと軌を同じうせり。是等の作家に就きては特に云ふべきことなし。ゾーフ、フルは、明を失ひて、其の長き生涯の半ば以上を盲目にて過ごし、が死に至るまで、文學並に、公務を謝することなかりき。文學的批評の方面を離れ、單に叙事詩、物語等に就きていふ時は、上に擧げたる作家等は、其の聲望及び價値に於いて、遙かにポードメルを凌駕せり。ポードメルが作につきては、「Noachide」の一篇を記すれば足る。但し、此の篇とて、本より作家としての彼れが位地を高むるに足るものに非ず。要するに、彼れの文學にいたせる功績

は、ゴットシマドの固陋なる詩論に反對せると、獨逸古文學研究の復興を企てたると、及び、英國文學の趣味を輸入せるとに在り。彼れは、一千七百五十七年に、『ニールンゲンリード』の一部を出版し、同五十八年に、ミンテリールデルの集を出版せしが、彼れの唱導せし是等の傾向は、一千七百八十三年彼れの逝りし後にも、姑く存在しき。彼れの友ヨハン、ヤコブ、ブライテイングル (Johann Jakob Breitingen. 一七〇一——一七六) 亦瑞西派の領袖にして、ポードメル等と共に、文學の批評研究に従事せる一人なり。彼れは、一千七百四十年に『詩歌術の批評的研究』と題する書を著して、其の詩歌に對する意見を公にせしが、所論おほむね穩當なれども、其の詩歌に下せる定義に至りては、頗る狹隘なるものなりき。ブライテイングル、性高雅にして、學博く、ゴットシマド、ポードメル等の如く、争を好まず、論争に熱せずして、寧ろ、眞理を見出ださんことに専心せりき。彼れが所論の中、或るものは、彼れ自身の主張せる定義、理論以上に出で、後の詩歌論を豫想せるものあり。其の詩歌に關する疑を述べて、事物のただの摸寫が、律語にても、せられたる故を以て、詩歌と呼ばれ得べきか。と云ひ、又、詩歌の本領を論じて、詩歌の眞正の目的は、其の物語的なる、と、抒情的なる、と、劇



的なるを問はず、性格及び情の種々の様態に於いて、人間の生命を表現すべきものなりと云へるが如き、是れなり。獨逸文學史家シェラーは、ポードメルとフライティンクルとに就き、述べて曰はく

ポードメルは性急にして野心あり、且つ論争を好める文學的布教者なり。フライティンクルは資性温良、思慮周到なる獨創的思考家なり。前者は史家にして翻譯家を兼ね、詩才に缺けたれども、其の健筆驚くべく、言ふ所、概は嘲罵諷刺の氣味を帯び、且つ、絶へず他の作家を非難せり。後者は神學者にして語學に通じ、博學にして其の言ふ所、或る方面には重大なる勢力を有せり。二者は、其の好尚を同し、事業を同し、相共に週刊の雜誌を發行し、また美術に關する理論の發達に關して、ともに運動せり云々

また、二者が、ゴットシヨッドに對する關係を述べたる要に曰はく、

フライツィヒ、ケッセルの兩派は、共に韻律に重きを置かず。彼等が論争の主眼を爲せるは、詩歌には、いかばかり想像力の入るとの許さるべきかに關してなり。されどゴットシヨッドは、其の述作の大に明瞭ならんことを求め、また、術の許すかぎり其の文章を莊大にせんと力めたり。彼れは、詩歌を以て組織的教訓によりて遠せらるべき術なりとし、其の準據すべき類型を、希臘詩歌の規則に求めたり。ツューリヒの作家は、之れに反して、其の述作は、行文形式の上に於いては甚だ粗笨なれど、思想の上に於いては、大に深遠なるものありき。彼等の主張せる理論は、ゴットシヨッドの比しては組織的ならざれども、其の目的と

せる所は、詩歌の種々なる階級に對する處方録を作るにあらずして、詩歌美の源泉を發見せんとするに在りき。されど、彼等は、其の目的を成就するに至らず、また、彼等の主張は、ゴットシヨッドがゆくりなく説き出でたる所に現れたるを見る。

兩派の一致せる所は、曰はく、詩歌は自然の模倣(吾人は寧ろ復現といふべし)なること、新奇にして尋常以上のもの、み、美にして復現する價值あると、及び詩歌の最高なる職分は驚異的事物の描寫にありといふこと、是れなり。されど、驚異的事物を模寫するに當たり、詩人は、有り得べきことの範圍を超えて、架空の妄想を描くべからず、而して如何ばかり驚異的なることが、有り得べきこととして許さるべく、從ひて、詩に入るを許さるべきか、例へばホメーロスの詩中に在る三脚の供物臺の事、若しくは、ミルトンの『失樂園』に於ける悪魔の如きは、正當に詩に入るべきものなるかといふこと、是れ、即ち、兩派論争の燒點なりき。而して、ゴットシヨッドは、詩に入るべき想像の範圍をいたく制限し、ツューリヒの作家は、其の廣く、詩中に入り得べきことを主張せり。(此等の論争が現今我が國の小説家批評家等があせりつゝある性格論及び自然不自然の論等に如何ばかり似通ひたるか、及び、其の論争の如何に決せらるゝかに注目すべし)。

スホス、ライプツィヒ兩派の論争は、いたく當代文士の詩歌に對する注意を惹き、又、レッシングの偉大なる批評を喚び起こせり。クロップストック、非ーランド等も、亦、ポールドメルに負ふ所少なからざりき。知るべし、今や漸く忘れし兩派の論争とレッシングが先驅となりし新文學勃興との間には、甚だ密接なる關係の存する者あるを。ゴットシテッド、及び、ポールドメル等が名の重きを獨逸文學に成せるは、之れが爲めなり。上に述べ來たれる論争に關係せず、當期の初めに、出で、後の文牒の發達に少なからず貢獻する所ありし二律語作家を、ハルレル及びバークゲルンとす。アルフレヒト、フォン、ハルレル (Albrecht von Haller. 一七〇八—七七) は知名の學者にして、主として、心を解剖生理の學に傾けたりしが、また、文學的著作にも從事し、其の短歌、及び、抒情詩は、嚴かなる品格と深遠なる思想とによりて稱せられたり。彼れの作には、また、多くの教訓詩、諷刺詩、及び『アルプス山』と題せる敘景詩、彼れの此の種の詩にて最秀とせられたるものあり。詩歌論に關して、彼れが『ライティンゲルの進歩せる思想に反對せし事は、其の教訓的小説『フアビウス及びケート』に記せる所にて明かなり。其の『永遠に寄する歌』の如きは、頗る生氣あり、威嚴あるものなれども、其の題

目の抽象的なると理屈めけるとの故を以て、上乘の詩に班せらるゝこと能はず。ハルレルの詩に比して一層快活に一層優美なる抒情詩を作れるを、ハムブルグの人にしてしばらく倫敦なる和蘭公使館に秘書官にりしフリードリヒ、フォン、ハーゲルン (Friedrich von Hagedorn. 一七〇八—五四) とす。彼れが抒情詩の主題となれるは、主として、酒、友誼、及び、ホレーヌ等の唱へたる實際的知識なりしが、小説及び物語に於いては、彼れは、半ば、ラフォンテーヌ及び其の他の佛國作家に倣ひたりき。されど、此の時に至りては、佛國作家を摸倣する風、漸く衰へ、英國作家、代はりて摸倣的作家の尊崇する所となりき。アルノルド、エーベルト (Arnold Ebert. 一七二三—九五) はヤンクの『夜思』 ("Night Thoughts") リチャードソンの小説數篇、及び、マックハリーソンの『オッシアン』 ("Ossian") を譯せしが、やうやくにして、英國が「アングロマニア」といふ一種の流行を成すに至りき。中にも、ヤンクの『夜思』は、獨逸の詩界に影響して、愛戀多感なる風調を養成せり。また、ミルトン、ポープ、トムソン等の翻譯は、幾多の喜ぶべき影響を及ぼしき。ポープの傑作 "The Rape of the Lock" の影響が、非ルヘルム、ツァハリエ (Wilhelm Zacharia. 一七二六—五九) をして幾多の嘲笑的敘事詩をもせしめ、トムソン

ンの『四季の歌』が、多くの作家を喚び起こして叙景的詩歌をもせしめたるが如き、是れなり。一千七百五十九年の戦に斃れし普魯士の陸軍少佐エザルド・クリステイアン・フォン・クリヤイスト (Ewald Christian von Kleist. 一七五一—生) は是等英國詩人の影響を受けたる作家の精華と稱せらるべき一人なり。彼れの傑作『春』の歌は、當時、普く人口に膾炙せし作にして、半ば、叙事詩の性質を帯びたり。此の詩は、戦亂の慘狀を口撃せし作者の經驗より起これる真情を吐露せるものなるを以て、語句活動して、頗る興味の掬すべきものあり。ハルレル・ハーゲドルン。及び、クリヤイスト等以下の小詩人に就きては、特に述ぶべきことなし。彼等の功は、要するに、章句形式の上に止まればなり。

次に述ぶべきは、索遜派なり。此の派は、カル、ゲールトホル (Karl Gärner. 一七二二—九一) の創立にかゝり、『デー、ブレイメル、バイトレーグ』 ("Die Bremer Beiträge.") なる機關雜誌を發行しき。此の派に屬する作家の主なるは、ゲールトホルの外、上に述べたるゲルレルト、ツアハリエ、エーベルト、及び窮屈なる規則に反對せし劇詩家エリアス、シュレーゲル (Elias Schlegel. 一七一八—四九) の弟にして、有名なる、シュレーゲル

兄弟の父たるアドルフ、シュレーゲル (Adolf Schlegel) 牧師にして、頌詩翻譯家なるクライメル (Cramer.) 諷刺家カストホル (Kastner.) 劇詩家クロトック (Cronck.) 及びアイレンホッフ (Ayrenhoff.) 等なり。此の派に屬して、彼等よりも更に重要なるは、グーテに「いみじき滑稽の才を具へたる人」と評せられし温和なる諷刺家ゴットフリート、ラベール (Gottlieb Rabener. 一七一四—七一) なり。彼れの諷刺滑稽は、穩にして忌味なく、また、間々時弊に適中せる言を爲せり。彼れがクエルレクイッチュといふ一小村の滑稽なる歴史を假設し、其の批評に擬して、當時の史傳の緩慢冗長なるを諷刺せる文の中に曰はく、

こゝに史家先づ筆を起こして曰はく、「究めて世界の原始に遡れば、吾人は最初世界に佳める者の、アダム、イヴなる唯だ一組の夫婦のみなりしを見る」を、さて後に、悠々とカルデア、アッシリア、埃及、猶太、希臘及び羅馬等の歴史を舒説し、やうやくにして本題なる一小村の歴史に廻り來る云々

當時の諸文學派の中、グジイムを首領とせしハルバルスタットの詩派の如く、自足逸居せしものなし。ヨハン、非ルヘルム、グライム (Johann Wilhelm Gleim. 一七一九—一八〇三) は、資性温良、獨身にして相應の財産を有せしが、いたく文學を好み、少壯詩人

の爲めに、研究所を其の家に設けたり。初め、彼れの小會をハルレ(Halle)に開くや、其の會員となれる者、唯だヨハン、ペーテル、ウーツ(Johann Peter Dz. 一七二〇—一七九六)及びヨハン、ニコラウス、グッツ(Johann Nikolaus Götz. 一七二一—一八一)の二人なりしが、二人の長所は何れも思想の上に在らずして、重に、文詞發表の上に存しき。クライムが作の最良なるは其の愛國的詩歌なり。彼れは、尙ほ、他の多くの抒情歌を詠じ、また「ハルラダット」(“Halladatt”)と名づくる一教訓詩を作りき。彼れ、常に曰へらく、「余は若かりし時より、聖書の如き書を物せんと、の考を懐けり」と。されど、此の倨傲なる企望の結果は、道徳に關する陳腐凡庸の言を並べたるに止まりて、些の創意なきものなりき。要するに、グライムは、唯だ、文學者の信切なる朋友、保護者として肥體せらるべきのみ、到底、詩人として傳へらるべきものに非ず。彼れの詩人を歡待せしや、多くの小詩人(稀には秀てたる詩才もありしかど)は、思ふまゝに夫子グライムの家にて、百十有八名の詞友の肖像を掛けたる大なる一間に會して、快よく其の所思を談せり。思ふに古來世に現れたる如何なる大詩人も、曾て、グライムの如く幸福なる生涯を送れる者なかるべし。彼れは、曾て、一たびも、其の朋友及び徒弟の

作を非難せるとなく、また、日毎に、若しくは週毎に多少の詩を物する者をば、何人と雖も之れを保護し、又是等の人々に擁せられて、樂しく其の生涯を送れり。彼れの友にして有名なるは、不幸なる女詩人アンナ、ルイゼ、カルシト(Anna Luise Karsch. 一七九一死)初めには見るべき作なかりしも、後、ゲーテを學ぶに及びて、詩境大に進みしヨハン、ゲオルク、ヤコビ(Johann Georg Jacobi. 一七四〇—一八一四)及びカル、非ルヘルム、ラムレル(Karl Wilhelm Ramler 一七二五—一八九)等なり。ラムレル、摸範をホレースに取りて短詩、抒情詩を作りしが、大に、ゲーテの賞讃を受けき。彼れは、しばし伯林の兵學校に教授たりしが、其處にて國王の軍功を頌する短歌を作りき。レッシングも、曾て、其の詩の批評をラムレルに乞ひしことあり。

短詩及び頌詩作家等の、一向に摸倣を事とせし者に就きては、こゝに、委さに叙述する必要なければ、中に就きて主要なる作家のみを掲ぐべし。索遜派の一人なるヨハン、アンドレアス、クラーム(Johann Andreas Cramer. 一七二三—一八八)の作にては、其が讚美歌の翻譯の方、自作の頌詩に比して遙かに價值あり。其の他の頌詩作家は、おほむわケルレルトの詩風に倣ひし教訓派、及び敬虔派同胞協會に屬せし作家

をも含めて)の二派に属す。自然神學を尊奉する傾向は、ハムブルクの牧司クリス  
トフ・スツァルム(Christoph Sturm. 一七四〇—一八六)の作れる頌詩、及び散文に於いて見  
ることを得。彼れは、クロッペンストックの摸倣者等と比肩すべき詩人にして、『神の事  
業に於ける默想』と題せる彼れが散文中の最も傑れたる著作は、英語及び他の國語  
に翻譯せられて、大に、人口に膾炙せり。多くの敬虔的頌詩家の中最も多く、其の作  
を出だしは、『同胞協會』の創立者ニコラウス、ルドヴィヒ、グラフ、フォン、ツィンツェンドル  
フ(Niklaus, Ludwig, Graf von Zinzendorf. 一七〇〇—一七六〇)なり。彼れは、宗教上の迫  
害を避けて故國を遁れしモラヴィアの同胞に、自己の所有地を與へて、其處に寺院を  
設け、之れを中心として、傳道士を諸國に派遣しき。彼れが頌詩の多くは、其の單純  
素朴なるによりて名高し。されど、其の中には、彼れ自ら後に排斥せし痴情的性質  
を帯びたるものあり。

思想の上に於いても、發表の仕方にも、何等の進歩發達の跡を現さざりし當  
時の小詩人等につきては、こゝに敘述せざるべし。さて、韻文界を去りて、眼を散文  
小説界に放てば、當代の注意すべき作としては、やがて説き出づべき井ーランドの小

説のみなるを見る。ヨハン、ティモートイス、ヘルメス(Johann Timotheus Hermes. 一七  
三八—一八二二)がリチャードソンに摸倣して作りたる『ソフィアの旅』は、唯だ、中流社會  
の生活を寫せる點に於いて注意せらるゝのみ、其の他の關係に於いては、全く、無意  
義の作なり。風景畫家サロモン、ゲステル(Salomon Gessner. 一七三〇—一八六)は丹青  
の餘力を以て文筆に従事せしが、其の文學に於ける成功は、繪畫に於ける成功より  
もして覺束なかりき。但し彼れの作『アーベルの死』は、獨逸及び英吉利に於いて大  
に稱揚せられき。

井ーランド。レッシング等に先だち、或は、時を同じうして、力を純文學、律語、散文の方  
面に致し、廣き意味にて、彼等の事業に資し、國民文學の興起に影響せし作家等のお  
ほかたは上に述べつ。蓋し、ライプツィヒ、ハルレ、及び、ハルベルシュタット等の諸派に  
屬する多くの作家が、詩人と稱せられ得るは、最も通俗なる意義に於いてなり。詩  
人など云はんよりも、更に低く小やかなる名こそ、彼等には至當なるべけれ。蓋し、  
彼等の作するや、言はざるを得ずして言ひ、言ふところ、即ち、詩を成せるにあらず。  
言ふべきもの甚だ僅少に、托すべきこと皆無なるに當たりても、彼等は、猶ほ、美しく

之れを言ひ現はさんと力めたり。されば、彼等の詩は、多くは、英吉利、及び佛蘭西の作物より、用ひ陳し、題目、及び感情を引き來たりて、章句、按排の練習を爲せるに過ぎず。是を以て、當代に於いては、其の抒情的なると、叙事的なるとは、た、劇的なるとを問はず、あらゆる詩形（讀むに堪へざる形式すらも）は、是等の詩人に試みられ、『牧場の灌溉』『理性の權利』等の題目に就き、律語を以て無味乾燥なる教訓詩を爲のせるさへあり。こゝには、ありふれたる些事が、屢、個性特色の發現を以て肝腎なる要素となすべき抒情詩の主題とせらるゝあれば、かしこには、友誼、酒、自然美等、多くの變化なき慣用題目の繰り回さるゝありき。物語的詩歌に於いては、幾多の作物語フエテの讀むに足るものあり、少なくとも、其の意義を有する點に於いて、千篇一律なる短歌に優りき。ポーアの傑作『The Rape of the Lock』は、大に、當世に持て囃されて、幾多の摸倣的諷刺詩を生じき。劇詩に於いては、レッシングが國民的劇詩をも、せし前、ワイゼ、ニコライ、エリアス、シュレーゲル等が、多少の改良を爲したるありき。また、オピッツ等が唱導せし韻律の法則は、當時に於いても、多く用ゐられ、又、擴張せられしが、彼等は、競ひて形式の斬新なるを求めたるより、おのづから、古代の律語を學び

來たれり。思ふに、是等の事業は、當時の文學の進歩に對して、多少の功績ありしに、は相違なし。されど、美はしき發表の形式に結び付くるに大なる思想を以てせし詩人等のと等しき班位は、到底、是等の摸倣的小詩人に與ふべくもあらず。

## 第二章

普魯士のフリードリヒ二世 歴史家 通俗哲學者  
唯理論者 美學の著者 弁ンケルマン

フリードリヒ二世時代の律語作家が、取るに足らぬ詩題を追ひて汲々たりし時に當たり、散文作家の論說し描寫すべき主題は、甚だ多かりき。されど、當時、眼前に起こりつゝありし價值ある出來事を、巧みに描寫し得べき手腕ある歴史家、及び政論記者無かりし爲め、幾多當代の快事業も、あはれ、之れを描寫すべき史筆を得ずして止みぬ。此の時代に於いて、散文々學の見るべきは、道德及び美術に關する論文なり。

道德及び社會生活に關する多くの價值ある論文は、通俗哲學者と稱する一派の文士によりて發表せられ、美術評論の方面に於ては、世界の文學に於いて最も重要

なる産物に列なるべき『古代美術史』及び『ラオコオン』の二篇亦、此の時に出でたり。

獨逸語にて作れる歴史的著作の中、最も價值あるもの、一ともいふべきは、一千八百三年まで存せし監督牧師の管轄地なる小邦オスマブリックの歴史なり。蓋し、宗教改革後、重要な事件の相次ぎて起こりしにもかゝはず、歴史家及び政論記者等の絶えて、之れに關して注意すべき著作を出ださざりしは、甚だ怪訝すべきとなり。然れども、當時文學に従事せる人々は、おほむね時世に暗くして、シレシア戦争の如き運動の重大なる所以を解し得る者すら、甚だ稀なりき。されば、是等の重要なる出来事に關する價值ある記録を見んと欲せば、吾人は、是等群小作家の著作より眼を轉じて、フリードリヒ大王自身の著作『フランドンアルク史補遺』『七年戦争史』及び、彼れの時代に關する王の自著を顧みざるべからず。而して、偉大なる國王、偉大なる將軍、偉大なる政治家なるフリードリヒ大王の手に成れる是等の著作は、凡べて、佛蘭西語を以て綴られたりき。されば、歴史としては無上の價值ある是等の著作も、其の國文學に對する關係としては、唯だ彼れが、時の文學者に對して冷淡なりしとを辯護する料たるに過ぎず。蓋し、多くの作家等が、道德若しくは美學上の論争に致々たりし時は、是れ、方に、埃太利及び佛蘭西が、獨逸の聯合を破り、普魯士を顛覆する謀計に汲々たりし時なり。而して、時の多くの文學者等は、王が慘憺たる經營を顧みずして、陳腐なる主題の吟詠に餘念なかりき。フリードリヒ大王が國文學を保護せざりしことは、文壇の一大愁訴たり、されど、吾人は、之れに加へて、佛蘭西文學を崇拜し、アルテールに師事して、國文學につらかりし大王が、慘憺たる事業なくして、獨逸國民及び其の文學が十九世紀の末に於ける盛運を見るべかりきや否やを考へざるべからず。

フリードリヒ大王の著作に比ぶれば、當時の文學者等の手に成れる歴史上並に、政治上の著述は、殆ど一顧の價だもなし。唯だ、これらと等しなみに見るべからざるは、先きにも云へる『オスマブリック史』(Osnabrück)なり。此の史の著者ユストゥス、メーゼル(Justus Möser)は、一千七百二十年を以てオスマブリックに生まれき。彼れは、グッテングンにて法律を研究し、後、其の故國に歸りて、暫らく辯護士の業を執りしが、一千七百六十三年、オスマブリックがフリードリヒに屬して以來、翌二十年間は、此

の管轄地に總務として政事上の萬機を處理しき。メーセルに取りては、文學は唯だ、國家繁榮の爲めに用ゐらるべき器具に外ならざりき。而して、彼れの著述『オスナブリック史』は、よく著者の主義、識見、愛國心等を現はせり。彼れが奉じたる格言中の格言ともいふべきは、政治上の組織は、凡べて人民の歴史に據らざるべからずといふことなり。是を以て、彼れは、少しも抽象的理論を顧みず、また紙上に經畫せられたる、若しくは、外來の權力により、強ひて人民の上に加ふるが如き政府の組織に耳を傾くることなかりき。彼れは機械的專制的なりとして、凡べて是等を斥け、一意、歴史及び古來の習慣に基ける組織を主張し、また、全く、古來の事實に依りて組み出だされたる法律を得んと欲せり。彼れは、滑稽の才ありて、又、諷刺にも巧なりしが、其の金錢を用ゐることに反對せる論文に曰へらく、其を海に投ぜよ、然らずば、懲罰の方便として、之れを汝が敵に與へよ、金錢は數ふべからざる害惡と伴ふことなくして、如何なる國にも用ゐらるゝこと能はずと。篇を終ふるに及ばずして止まむ讀者は、必ず、彼れを以て狂人とするなるべし。されど、彼れは、終はりに臨み、簡單に、其の本意を説明して曰はく、かくの如きは、ソフィストが宗教の原理に對して用

ゐつべき議論なり」と。以て彼れが諷刺の才を見るべし。

彼れが道德上の目的、論題の範圍、及び、其の著書の毎頁に映れる不羈の性格に關していふ時は、ユストゥス、メーセルは、人民の爲めに筆を執れる著作家の模範と稱せらるゝを得べし。彼れの著『オスナブリック史』若しくは『愛國的空想』を讀まむ者は、何人と雖も、ゲーテが彼れを稱へて「及びなき人」と云へることの無理ならざるを知るならむ。『愛國的空想』は、曾て或る新聞紙に掲載したるを集めたるものにして、實用を主としてものせる多くの短論文、及び、物語より成れり。彼れは、また、當時獨逸の上下を風靡せし佛國的好尚の流行に對して、いたく反對を試みたりき。

フリードリヒ、カル、メーセル(Friedrich Carl Moser. 一七二三—一八九八)のこゝに傳へらるべきは、唯だ、其の性質の愛國心に富めるのゆゑを以てなり。彼れは、甚だ、精勵なる政論記者なりしも、其の著作文章の体裁に至りては、亂雜にして、見るに堪へざるものなりき。彼れの文を作るや、場所をも選ばずして、如何なる事柄をも挿入せり。是を以て、其の『獨逸國情』『政治の眞理』若しくは『主人と奴僕』等の題目に就きて論ずるや、幾百部の書籍雜誌を引き來たることを辭せざりき。彼れが諸王侯の宮廷に



關する知識は、半ば實際の觀察に基けるものなりしが、其の同時代の一歴史家を評して、善良に柔順に可憐なるイーゼリン、おはれ、彼れは、唯だ肖像によりて諸王を知るのみ」と云へるが如き、彼れの諷刺の中、最も見るべきものゝ一なり。メーゼルに、かく非難せられし歴史家アイザック、イーゼリン (Isaac Iselin. 一七二八—八二) は、『人類の歴史につきての臆測』及び『愛國心論』を著し、が是等の著作は、後に、ヘルデルの唱導し、又半ば成就せるが如き歴史の哲學的討究を豫想せるものとして推重せらる。彼れの議論は、常に、重複に流るゝ弊ありき。

此の時代に於いて歴史政治の述作に従事せし散文作家等は、實用を旨とする傾向に於いて、等しく相一致せり。中にも、トマス、アプト (Thomas Abbt, 一七三八—六六) は、特に熱心に、凡べての文學が、實用の爲めにもせられざるべからざるを唱導しき。『人民の爲めに物せよ』とは、彼れの堅く執りし規則なりしが、ヨーハン、ヒルツェル (Johann Hirzel, 一七二五—一八〇三) は之れを奉じて、『哲學的農夫の經濟』と題する一書を著せり。此の書は、バウエルといふ小農夫の個人的生涯を基礎とせるものにして、著者は田舎のソークラテースとして彼れを描けり。ホルツェルが著作の半ばは、歴

史に屬するものなれども、彼れは、寧ろ當時の、謂はゆる通俗哲學者の中に班せらるべき者なり。謂はゆる通俗哲學者とは、哲學的天才、若しくは大家といふほどにはあられど、優れたる才能を有し、其の論述、嚴かに且つ明瞭にして、一般に、利用厚生を主眼とせる一派の學者の謂ひなり。彼等が、宗教、及び道德の根據に關する意見は、一般に、後に唯理派ラショナルと稱する學者の唱へしが如きものなりき。

謂はゆる通俗哲學者の中、最も秀でたる者の一人を、モーゼス、メンデルゾーン (Moses Mendelsohn, 一七二九—八六) とす。イスラエル族にして、さきに、レッシングの友として、其の名を掲げしものなり。彼れは、教訓を主眼とせる多くの著作を爲し、が、其の最も名高きは、靈魂の不滅に關する對話篇『ヘードン』(Phaedon) なり。是れ、半ば、プラトーンと同じ對話篇に本づき、多少著者の意見を加へて敷衍したるものなり。メンデルゾーンは、固く、道德哲學の中には、必ず廣義に謂はゆる實用の含まるべきものなることを唱へき。彼れ、其の著の一篇に於て曰へらく、

佛國の一著述家が「蛾蠅に汚されぬやう、毛布窓掛を見守るルームールの骨折は、ライプニッツが道德に關する凡べての思想よりも、遙かに歎美すべき假値あり」と云へる論に對し、余は其の妄を憫むことなきにして、之れを讀むこと能はず。是れ、まさしく、家々のあだ

なる虚飾を以て、吾人自らの靈魂若しくは高貴なる神性よりも、更に貴重なりとするものに非ずや。余は、之れに反して斷言せんと欲す。鍊金者が、首尾善く其の志を遂げて、地上なる凡べての石塊を黄金に變ぜしめたりとも、若し彼等にして、かゝる事業を哲學の完成、若しくは、終極の勝利と同視せば、其はいみじき過失なるべし」と。

クリスティアン・ガルフェ (Christian Garve, 一七四二—一七九八) は、また、所謂通俗哲學者の一人にして、其の文牒に就きていへば、十八世紀に於ける散文作家の中にて最も秀でたる者の一人なりき。彼れは、道德及び文學的研究(特に文牒)につき、多くの短論文をものせしが、後、フリードリヒ二世に用ゐられてシセロが『人生の義務』といへる著作を翻譯せり。彼れ、また、利用厚生を主眼とし、よく、忍耐して久しく艱苦に堪へたること、温良節制の徳とによりて、世に知られき。カントの著述に關し、彼れ、曾て曰へらく、予は、よく哲學に於ける高尙なる領分を咀嚼すること能はず。余は、到底、或る實際的事物を目的とせざるを得ず」と。彼れは、實に、彼れ自ら限なく解し得と信じたる主題に就きてのみ筆を下せり。『山里の景色』と題する美はしき論文に於いて、彼れはカントが新美學説につきて何事をも言はず、又、巨大なる外界物が、凡べて、他の自然界の物に比して、強大なる道德的威力あることにつきても何事をも言はず、唯だ曰はく、山の景色の人心を感ぜしむる主要なる原因の一つは、吾人が、山岳に於いて、同一の廣袤面積ある平地に於いてよりも、多くの物を見るが故なり」と。以て、其の主張の大體を察すべし。

明瞭にして通俗なる文牒を用ゐたることに於いて、ガルフェが最高の敵手たりし一人は、同じく通俗哲學者にて、家庭小説『ローレンツ・スタルク』(Lorenz Stark) 及び、教訓を主とせる他の物語の著者、ヤーコプ・エンゲル (Jakob Engel, 一七四一—一八〇二) なり。彼れは、一七七五より同七十七年に至る間に、『世界の爲めの哲學者』と題する論文、漫筆、物語等を載せたる續きものを發刊せしが、メンデルゾーン、ガルフェ、エーベルハルト等、之れに寄書したりき。蓋し、エンゲルが著作に従事せし年月は一七七七年(第六期)以後に亘れど、彼れは、通俗哲學者の派に屬し、又、明らかに、彼等が實際的傾向、嚴格なる風、及び、彼等が自足の特質を表せり。彼れが散文にてものせるフリードリヒ大王の頌は、流暢にして誦すべき作なり。

通俗哲學の義、甚だ漠たり而して、此の派に屬すべき作家の、範圍を限定すること、亦、はなはだ難し。著名なる説教者にして、實際的宗教につきて多く述作せしゲオル

ク、ヨアヒム、ツォルリコーフマン (Georg Joacher Zolliker 一七三〇—一八八) 其の著『メクラ  
テスの辨護』に於いて異教徒の靈魂が天に入るを許されずといふ教義に反對した  
るヨハン。エーベルハルト (Johann Ebelhart. 一七三九—一八〇九) 及び、ビエティズムに反  
對し、宗教の根據は論理なりと説きしヨーハンスバルディング (Johann Spalting. 一七  
一四—一八〇四) 等の神學者、また、其の中に數へらる。已に詩人として掲げたるゲ  
ルレルト及び通俗なる文牒にて道德哲學をものしたるゆゑを以て通俗哲學者と  
稱せられしハンノーフェル朝廷の醫師、ヨハン、ツィムメルマン (Johann Zimmermann 一七  
二八—九五) もまた、時として、此の派の中に數へらる。ツィムメルマン、初め『幽寂につ  
きて』といふ一書を著して世に知られしが、後、フリードリヒ二世が臨終の記事に托  
し、自らを揚げたる書を著し、によりて、其の名、頓に衰へたり。

宗教に關する自由討究の許さるゝに至れる時期、及び、前の唯理的哲學の興起せし  
時期につきては、正確に、其の年月を區畫すること能はず。但し、是等の諸運動の起  
こるに先だちて佛國及び英國の學者等が謂はゆる自然宗教に關する著述の研究  
せられたるあり、次ぎて『デルンエンボッタテル、フラグメンツ』 ("Vollenbüttel Fragments.")

の著者ヘルマン、サムーエル、ライマールス (Hermann Samuel Reimarus. 一六九四—一  
七六八) は一千七百五十四年に『自然宗教の原理』を著し、同じく六十年に『動物の天  
性』と題する更に興味ある著述を出だしき。後者に於いて、彼れは、靈魂の不死なる  
ことを辨じ、比喩的に論證して之れを確信し、少しも疑を其の間におかざりき。彼  
れは先づ、動物の天性と宿命との調和することを説き、さて曰へらく、

現世以外を認むことの、吾人に自然なるは、猶ほ、下等動物が現在の生活に安んずるの自  
然なるが如し。彼等の天性は、一定の境界の中に限られ、吾人自らの天性は、不斷の希望  
を爲すべき能ある點に於いて、彼等のと區別せらる。而して、かゝる發達に對する希望  
は、吾人の造化主が吾人に賦與せしものなり。

さて、吾人は、自然界に於いて、何處に欺かれたる天性あるを見ることを得るか。或る種  
類の食物を要求する本性が賦與せられながら、其の種の食物を獲ること能はざる動物  
の例は、いづこに在りや。燕が暖國に往かんさて雲を破りて飛び去るは、果たして、其の  
天性に欺かれたるものなりや。彼等は、終に、海の彼方に、暖國を見出だすにあらずや。  
若し若しくは水生の蟲類が、其の殻を棄て、其の羽を廣げて水を去り空氣中に入る時に、  
彼等は新なる生活に於いて、其の生命を支ふるに適應せる空氣を得るにあらずや。自  
然の聲は、決して、欺瞞的豫言を爲すことなし。其は、造物に告り玉ふ造化主の宣言なり。  
而して、若し、此のことが、生物の本能に對して誤りなくば、なごか、人間靈魂の高等なる本

と。かゝる推理論證を確信することは、十八世紀に於ける通俗哲學者、及び唯理論者の特質にして、歴史若しくは他の外來の教義等は、彼等に取りては、理性の宣告の反響としても見られざりき。但し、彼等の目的とせしところは、全く消極的なりしに、はあらず、其の眞理と認めしもの、例へば、神の存在、靈魂の不滅等につきては、彼等の之れを信ずること頗る堅固なりしかども、是等の断定、確信を維持すべき根據に至りては、甚だしく獨斷的なりき。且つ、所謂自然神學に就きて、彼等が説きしところの多くは、極めて淺薄に、且つ單に樂世的に偏して、少しも、暗黒の方面を見ることなく、又、其の自然神學の證明の基礎ともいふべき論理をすらも、精密に吟味することせずざりき。カントの如き思想家の出で、自然神學者等が、信仰に關して堅く保持せる證明を説破し去らんことなどは、本より是等唯理論者等の豫想し得ざりし所なり。彼等の一般に取りし消極的傾向は、凡べての奇怪なる出來事を拒否し、若しくは説明し去らんといふにありき。而して、萬事を拒否するよりは、寧ろ説明し去らんとせる是等の企圖は、往々にして笑ふべき結果を來たしたり。彼等の開化

を衝ふに熱衷せるや、光を温熱より分かち、又、彼等が、以て宗教に代へんとて案出せし、冷やかに、知力的に、且つ倫理的なる組織は、感情と想像との、兩つながら排除せられたるものなりき。最高の詩歌に於いて見出ださるべき詩的直覺、及び、一般人民の迷信等は、彼等の爲めには、唯だ空虚なる小説として取扱はれ、哲學的思索は、中に凡庸ならざる或る物ありやとて、嗤笑せられ、伯林なる書肆の主人ニコライ若しくは、ドクトル、バールト (Dr. Bahrdt) 一七四一—九二等の、見て以て眞理とせざるものは、全く無價値のものとして、彼等に捨て去られき。

天啓に重きを措かずして吾人の理性其のもの、萬能を信じ、凡べて靈妙、奇異なる事物をば全く拒否し、若しくは説明し去らんとせる是等唯理派の傾向特色は、他の更に消極的なりし神學著述家等に於いても見出ださるれど、初めア、リ、ク、ン、ナ、フ、ス、の唯理論者等は、何れの方面より見るも、嚴密に一派を成せりとはいふこと能はず。例へば、上に擧げたるドクトル、バールトの如きは、殆んど孤立して激烈なる諸詭的宗教論に従事せし著作家なりき。蓋し、當時の唯理論者には高等なる者と下等なる者との兩派ありて、一千七百六十四年に「唯理的基督教綱要」を公にせしガ、ル、ヘ、ル、ム、ア、フ、ラ、ハ、ム、

テペル (Wilhelm Abraham Teller. 一七三四—一八〇四) 及び學識高遠にして當時の最も秀てたる説教家の一人に數へられしヨハン・フリードリヒ・エルサレム (Johann Friedrich Jerusalem. 一七〇九—八八九) 等は高等派に屬する餘々たる唯理論者なりき。(エルサレムが晩年をはかなうせし其の子の自殺は、ゲーテが「エルテル」のわづらひ」をものする原因となれり)。

初めの唯理論者等の中少數の思慮ある人々は、一派の消極的評論及び其の奉じたる特殊の眞理の外に、多少明瞭に一致せる意見を有せり。其の意に以爲へらく、實行的宗教の心髓は、其の山りて廣まりし凡べての傳說的(世俗的)形式と區別せられざるべからず、而して、また、組織的正統説若しくは其の教會より補助を受くることなくして維持普及せらるべきものなりと。

教會史の方面に於ては一の浩瀚なる著作ヨハン・マッティアス・シュレーン (Johann Matthias Schrock. 一七三三—一八〇八) が『基督教會史』の半ば、此の期に成れるあり。此の史は全部三十五冊にして一千八百三年に完成しき。ヨハン・ローレンツ・モスハイム (Johann Lorenz Mosheim. 一六九四—一七五五) の名は、人をして、學者が國語を用ゐ

ることに反對せる僻見の猶ほ當時に存せしことを思ひ起さしむ。彼れは有名な説教者にして獨逸文にも堪能なりしかど、其の主要なる著述『基督教會史』を著すや、獨逸語を斥けて羅典語を用ゐたりき。ヤーコプ・ブルケル (Jakob Brucker. 一六九六—一七七〇) また羅典語にて『批評的哲學史』を著し、が、此の書は、主として、其の考證の跋博なることによりて推重せらる。

上に述べたる歴史的並に教訓的著作は、其の特質として、おほむね時の改革的傾向を表現せり。蓋し當時、恰も佛蘭西に其の勢を高めつゝありし、過去に満足せずして新なるものを求むるの傾向は、同じく、獨逸にも存したれど、此の傾向は、此の國に於いては、やゝ靜穩なる形を取りて國文學革新の事業に現はれたり。是等多くの革新的事業の中、全軀より見て最も文學の興隆に功ありしは、廣き意味に謂ふ美學(詩歌美術)に關する理論及び批評をも含めていふの方面なりき。クリスティアン・ルドホリヌコウ (Christian Ludvig Liscow. 一七〇一—一六〇) は十八世紀の最初に出でし批評家の一人にして、時の小作家に對して多くの諷刺的批評を試みしが、其の文章の純粹なると雄健なるとによりて世に知られき。少しく彼れに後れて出て、『美

學』の創立者として其の名の後世に知られたるをアレクサンデル、ゴットリープ、バウムガルテン(Alexander Gottlieb Baumgarten. 一七一四—六二)とす。彼れは、當時獨逸の哲學界に勢力ありシライプニツ、ダルフ學派の學者なり。先きにライプニツが其の哲學に於いて知識を論ずるや、其を別かちて感覺的知識或は混雜せる知識及び概念的知識の二つとし、後者を研究するを論理學と稱せしがダルフがライプニツを繼承して其の説を組織するや、概念的知識に就きて大著述を成したれども、終に、感覺的知識を論ずるに及ばざりき。バウムガルテンは、此の缺點を補はんとして、感覺的知識を論ぜる一書を著し、『美學』(“Aesthetics”)と名づけて、之れを公にせり。エステティカとは感覺的知識の論といふほどの義にして、美學の名稱はこゝに初めて出でたるなり。彼れは、美を解して以爲へらく美とは感覺の眼を以て漠然と、完全を見るの謂ひなり。而して完全は道理(概念)の眼には眞として現はれ、感覺の眼には美として現はる、美は眞或は善と異なるに非ず。唯だ之れに對する知識の明瞭なると漠然たるにより、或は眞となり、或は美となるのみと。彼れの説は、英國のバークの感覺説に對して唯理説レゾナブルと稱せらる。彼れの弟子フリードリヒ、マイエ

ル(Friedrich Meier. 一七一八—七七)其の師が『美學』の出版と、殆んど時を同じうして『美術の第一原理』を著はしき。また、少しくバウムガルテン等に後れて、ヨハン、ゲオルク、スルツェル(Johann Georg Sulzer. 一七二〇—七九)は『美術理論』を著したりしが、此の書は、已にホードメル及びプライティンゲル等の唱道せしものに比して、幾何の進歩をもなさいりき。是等の理論的著作は、もとより、國文學の興隆に資する所なかりしにはあられぬど、其の所論、おしなべて形式的、また、獨斷的なりき。彼等の唱へたる理論は、最良の美術品を賞鑒し解剖せる結果として成り上がれるにあらず、又、其の規則は、美術文學の實際的研究に基きて定められたるにもあらずして、おほむね、漠然たる心あての論評たるに過ぎざりき。

レスニングの述作は、上に挙げたる小批評家の其等とひとしなみに見らるべくもあらねど、彼れの友にして書肆を業とせしクリストフ、フリードリヒ、ニコライ(Christoph Friedrich Nicolai. 一七三三—一八一)は、是等美學の小作家と同じ列に班せらるべき者なり。彼れが書肆として、及び、レスニングの友として文學にいたせる功績は、遙かに彼れ自らの著作によりて爲せるものゝ上にあり。彼れの編集出版せる『

ルレス、レトレスの圖書(一千七百五十七年版)レッシングの寄稿せる『文學信書』一千七百五十九年—同六十六年、及び五十六冊に亘れる『一般の獨逸圖書』の如き、何れも、當代文運の發達に少なからぬ利益を興へき。彼れが書肆として文學に盡くせる功勞は、かくの如くなりしかど、彼れ自らの著述に於いては、唯だ哲學に對して淺薄なる攻撃をなし、笑ふべき高言者として自家を暴露したるに過ぎざりき。彼れは自ら容易に了解すること能はざる凡べての論述(例へばカントの著述の如き)に對しても、容赦なく、其の嘲笑的批評を試み、而して自家の所説を以て常識上最終の標準なりとなせり。但し、彼れが論評のしかく苛酷激烈なりしも、一つは其の晩年に起こりし文學革新的運動の、彼れを激せしめしによれることを許さざるべからず。ゲーテが『エルテルのわづらひ』のいたく持て囃されて、多感的氣風の一世を風靡するや、この諷刺的老書商は之れに對して『エルテルのよろこび』を出だしき、是れ、ゲーテを嘲らんが爲めにあらずして、時の多感沈鬱的氣風の流行を防遏するの道を講ぜるなりき。蓋し、其の名聲漸く衰へ、ゲーテを領袖とせる少壯詩人の盛名を成すに至るまで生き残りしは、ニコライの不運なりけり。彼れは、ゲーテ等の粗暴なる

を嘲笑して、『肥滿男物語』を出だしたれど、顧みられざりき。彼れが多く著作の中、最良と稱せらるゝは、『獨逸瑞西旅行記』にして、彼れが文學及び政治に對する意見は、善く、其の中に現はれたり。また、その著『Sebaldis Nothankir』に於いては、主として正統説及び敬虔主義に反對せる意見を述べたり。彼れの思想は、深遠高大ならず、其の評論諷刺又た妥當銳利ならず、淺薄なる諷刺家と云ふ稱は、大躰より見て、彼れに對する正當なる批評なるべし。十八世紀の終り十九世紀のはじめ、ハマン、ヘルデル、ゲーテ等が、新時勢に伴ひて其の羽翼を伸ばし、頃に至りては、ベルリンの書商の如き批評家は、老朽陳腐、また、人の之れを顧みる者なかりしなり。但し、ニコライが名聲の衰頹は、ゴットシエドの如く迅速ならざりきと雖も、其の初めに盛なりしにも似ず、其の終りのはかなかりしは一なりき。

レッシングを除き、上に述べたる批評家等は、其の才能よりいふも、其の學殖より見るも、共に、能く、美術詩歌の原理につきて論ずるに足る資格あるものにあらずき。彼等の定義、規則批評は、要するに形式的にして、根據なく、且つ、其の素養、未だ美術品を賞鑒し、詩篇を讀破すると能はざるに、早くも、天才の作物を是非せんとせり。是

等紛々たる小批評家が心あての濫評に汲々たりし時に當たり、貧困に苦しむ逆境と戦ひながら、渺たる一介の身を以て美學的批評の新學派を建て、考古學若しくは言語學の一隅に、果敢なき名残を止めたる枯骨に、生命を與へんと企てたる者あり。彼れは手初めに古代彫刻の論を公にせしが、其の著述は、實美學的理論並びに批評の上に新時期を畫せるのみならず、今日に至りても、なほ言語學の研究と關聯して、樂て難き趣味を與ふるものあり。之れを誰れとかなす。ヨハン・ヨアヒム、

ボンケルマン (Johann Joachim Winckelmann)

是れなり。ボンケルマンは、貧しき靴工の子にして、一千七百十七年アルトマルクなるステンドルに生れき。家甚だ貧しくして、少壯の頃は、辛うじて生計のたつきを得たるほどなりしが、窮乏艱難の中に處しつゝも、彼れは斷えず自家の修養に力めたりき。三十一歳の時ドレスデンの圖書館に雇はれて、秘書官兼圖書掛助手となりしが、同館の美術品展列室に藏せる多くの寶物は、彼れの研究を助けしと少なからざりしも、古代美術の歴史を考覈せんとの彼れが志望はこれにて満足すると能はざりき。古代美術史の研究、是れ實に、彼れが畢生の大志願大目的にして、此の

目的を達せんが爲めには、何等の事物をも犠牲にせんと心がけたりしが、當時古代美術の名品は、おほむね羅馬府に集まりたるを以て、羅馬は彼れに取りて世界の中心と思はれたり。彼れは、故國を去るに忍びざれど、迫り來たる困乏の苦に堪へず、且つは、年來の宿志を達する便を得んが爲め、羅馬府に於ける最大なる私立圖書館の持主、牧師パシオナイ (Passionei) の圖書掛たらんとせしが、此の志望を遂ぐべき一の條件は、其の信仰を變へざるべからざることなりき。ボンケルマンが希臘古代彫刻の美に關する堅固なる信仰の外に、何等かの信仰個條を奉じたりしかば、甚だ疑はしく、且つ、彼れの朋友は彼れを目するに無信仰者<sup>アソシエ</sup>を以てしたれども、彼れは、表面上プロテスタント教を奉じたりしを以て、此の條件に對して躊躇すること數年、心苦しくも、彼れの語を用ふれば、終に意を決し、羅馬教會に歸依して、伊太利人となりぬ。之れによりて、彼れは大君牧師アレクサンデル、アルバニーの保護を受くるを得たり。アルバニーは羅馬にて最も多く美術品を藏せる一人にして、其の時恰も、其の別墅に於いて、熱心に古代美術品の蒐集に従事したりしが、朋友の禮を以て、ボンケルマンを遇したりしも、其の彼れに與へし報酬は甚だ僅少なりき。されど



執務の餘多くの閑隙ありしを以て、彼れは孜孜として其の大著の材料を蒐集せり。一千七百三十六年、彼れは羅馬府古蹟局の長官に任ぜられ、其の地に來遊せる貴人等を導きて多くの古蹟を巡覽せり。かくて、彼れの名聲は噴々として獨逸、伊太利の古物學者間に傳へらるゝに至り、曾て、彼れを冷遇せし獨逸の學者等さへ、あまた、及び切なる意を致して、其の故國に遊ばんとを請ふ。非ンケルマンは、幾たびか躊躇せしが、再び故郷を見んことのゆかしさに、一千七百六十八年、伊太利の彫刻師カブゼビを伴ひ羅馬を發して、故國に向かひぬ。テコロセ山に至れる時、彼れは、思まはしき前兆ありしに、意氣沮喪して、切に伊太利に歸らんとを望み、同行者の勸誘によりてやうやく思ひ止まりしも、一時は羅馬に歸らんの一念に、心激して氣も狂ひぬべき様なりき。維也納に至れる時、同行の彫刻師は、彼れに説くの、到底無益なるを覺りて、彼れに別れぬ。彼れはこゝにて女帝マリア、テレジアに謁して、數多の金貨を賜ひ、エニズに向け發船せんとて、トリーステに旅したり。トリーステに行く途上、或は旅宿に於いてともいふ、彼れは伊太利人にして、其のころ放免せられし兇徒アルカンマヨリと相知りしが、女帝の恩賜の兇徒の心を惹きけん、一千七百六十八

年、六月廿八日、彼れは終に五箇所の重傷を負ひてアルカンマヨリの刃に倒れぬ。アルカンマヨリは直に逮捕せられ、十四日にして死刑に處せられき。非ンケルマンが羅馬に在りし時に脱稿して、一千七百六十四年ドレスデンにて出版せし大著『古代美術史』(『Geschichte der Kunst des Alterthums』)の中に含まれたる思想は、一千七百五十五年に公にせし彼れが最初の著作『希臘の繪畫及び彫刻の摸倣に對する意見』(『Gedanken über die Nachahmung der Griechischen Werke in der Malerei und Bildhauerkunst』)に於いて、未熟ながら已てに其萌芽を現はしたり。彼れが大名を成せる此の大著の出現は、古代美術の歴史に於いて及び其批評に於いて、實に新時期を畫しき。其發行せらるゝや、忽ち、全歐に喧傳せられて、希臘の彫刻に關する唯一の歴史、また、唯一の批評として受け容れられ、其の該博なる考證と雅致ある文辭とによりて、大に一般世人の稱讚を受けたるのみならず、古代の美術が、時の社會、政治、及び宗教上の組織に對する關係に就きて、詳細に論評せるふしの如きは、實に、古物學の研究に新生面を開きたるものと稱せられき。一部の美術史、別かちて四篇とし、第一篇に於て、初に總論を掲げ、次ぎに、希臘美術の興起發達に裨益を與へし諸々

の事實を説明し、第二篇に於いて、希臘美術の精髓といふべき特質を説き、第三篇に於て其の發達及び衰頽を叙し、第四篇に於いて美術品製作の上、に於ける機械的作動を論じ、最後に、古代の繪畫に關する事を記して其の論を終へたり。彼れは先づ温和清閑なる氣候を以て希臘の美術家を秀逸ならしめし、外來的影響の一に數へ更に一段の注意を以て、道徳上及び知識上に於ける希臘國民の特質及び其の政府組織が大なる影響を美術の進歩に與へたるを論ぜり。非ンケルマンが古代の希臘人を賞揚するや、殆んど其の崇拜者とも稱すべきほどにして、彼等の特質を叙し其の教育修練を説くや、少許の曖昧の點をも止めざりき。彼れは、其の著に於いて、希臘人の特質につき、樂しげに、また明らかに説き出でて、曰はく、古代の希臘人は如何に精神上の修練と身軀上の修練とを調和せしめたるか。各種の尊ぶべき性情が、如何に彼等が教育の組織、特に、公會的饗應によりて發達せしか。天才と稱せらるゝ人々が、如何に、比武競技の會に於いて桂冠を獲んことを競ひしか、また、後に僧侶等の卑しめ初めし、肉軀を蔑視することにつきて何事をも知らざりしか。プラトーンは曾てイスマミアの競技會に於ける角力者たりき。ピタゴラスはエリス

に於いて賞與を得、また、曾て、イリリマテスの訓練者たりき。エチスに於ける最も秀逸なる勝利者の一人、イム、ティムスの彫像は、いたく希臘人に崇拜せられき。希臘人の能力は一部の勞力にのみ從事することによりて其の發達を限らるゝことなかりき。マルクス、アウレリウス帝は道徳哲學に就きて、教を一畫師に受けきと。是等は『古代美術史』の著者が、崇拜の情を以て古代希臘人の特質に就きて叙述せし事實の二三なり。彼れが古代希臘人の、おしなべて美術を尊べること、及び私情によりて美術家及び美術品を左右せざりしこと等につきて叙述せる所の如き、特に、近代の世人が、美術に對するおもはくと對照すべきものなり。曰はく、

希臘人の一般に、美を觀る眼ありしや、其の結果として、美術品は其の保護者の野心慾望を満足せしめんが爲めに作すべきことを望まれずして、寧ろ、一向に天才(美術家)の本分を確守せんことを望まれ、又、一般人民の聲によりて褒貶獎勵せられたり。而して、當時の人民は野卑無教育なる匹夫に非ずして最も賢明なる人々の指導に従ひしがゆゑに、彼等が美術品に對する判断は、一般に公平にして、競技美術家に與ふる名譽、また正當に頌つたれき。フィディアスの時、コリンスに於いて、デルファイに於いての如く、繪畫展覽會を開き、適當なる審判者を置き、之れを審査せしめし時、神才と呼ばれしフィディアスの親族なる一畫師が、カルシスのタイモゴラスといふ者に負けて賞與を争ひたることあり。

かゝる秀逸なる審判者の前に、エーテイオンといふ一磁師が、歴山王ロクサナと結婚する圖を出だせる時、之れを判ぜしプロクセニテスといふ審判者が、其の作を激賞して、自らの女をエーテイオンに與へしことあり。彼等の間には、秀逸の名譽が、不公平に大家と稱せらるゝ者にのみ與へらるゝことなかりき。また、サーモスの博覽會に於いては、アキルレスの武器を備ける幾多の畫幅出品せられしが有名なるバルラシウスのば、テイマシテイスと呼べる一競争者のに勝を制せられたることありき。……

希臘の美術は主として最高なる事物、例へば宗教的思想若しくは、人性の高尙なる發達等を表現するものとせられて、瑣細なる玩弄物を作り、或は、富者が私宅を粉飾する料となるを許されざりき。蓋し、雅典府の盛時に於いて富者なる市民は、自らは租よく質素に裝飾せる家屋に住しながら、公共寺院に於いて莊嚴美麗なる彫像を安置せんが爲めに多額の寄附をなしたりき。ミリアイアテス、テミストクレス、アリスタイアス、及び、シモン等の如き勇將名士は、其の邸宅を華美にして、市民間に自ら高うするこゝさをせざりき云々。

古代希臘の彫刻に關するフンケルマンの理論は、其を理想的なりといふにあり。彼れは、古代の美術家は宇宙の意向、及び、其が個人に於ける表現を研究したりと説き、また美に關する一般の觀念を基礎として凡べて現存する形骸及び動作を取り扱ひたりと論じ、此の點より最美なる古代彫刻の位地安固にしてすはり善く、素材

にして餘情擲すべきものある所以、及び、凡べての形骸がよく暢健なる輪廓に支配(統一)せられ、其の動作を現す時に於いては靜寂なる威嚴の具はれる所以を説明せり。

フンケルマンが希臘の古美術に關する理論、及び、批評は、實、彫刻界に大なる影響を及ぼせるのみならず、又、古物學の研究に新精神を與へたり。レッシングが其の著『ラオコオン』の中に説き出でし最良なる思想のうちにて、此の最初の美術史家に啓發せられたるもの、亦、少なからず。彼れが古希臘の社會組織と美術とが密着に關聯せるとを論じたるふしの如き、實に、美術に關してのみならず、其の半ばは、文學に就きても當てはめらるべきものにして、又、近世の文化が向かひ行く理想を暗示せるものあり。其の意に以爲へらく、希臘の文學は生活の文學なり。其は、一般國民の生活、進歩及び嗜好と密に關聯したればなり。詩人、史家、畫家、彫刻家等が其の作をものするや、人民の一階級、一社會の爲めにせずして、國人一般の爲めに作せり。プラトインのうち建てたる最高の哲學すら、純粹に抽象的なるものにあらざして一般人民の同感と社會の嗜好とを織り込めたるものなり。彼等が形骸上並に智

力上の諸性能は、調和してともく、に發達しきと。尙ほ曰はく、國人は詩人、史家、若しくは、音樂家を作らんが爲めに犠牲に供せられずして、詩歌哲學、歴史、繪畫彫刻等凡べての美術は、寧ろ人間性能の最も安全に、最も美はしき發達を成さんが爲めに用ゐられき。かくの如きものは、凡べて、希臘の文化に通じたる特質なりと。

クロツプストック、レスシンク及びポーランドの述作は、十八世紀の文學と十九世紀のとを結び付くる橋梁ともいふべきものなり。クロツプストックは、其の作に於いて、一の大なる觀念、即ち基督教國民詩結合の理想を表現せり。而して、彼れは、其を表現するに於いて失敗せりと稱せらるゝも、其の失敗は、ありふれたる尋常の成功に比して、遙かに高尚なる價值あるものなりき。レスシンクは、詩歌と冥想との結合といふことを基礎として、國民文學の理想を發揮し、美はしき文章を以て其の理想を表白せり。ポーランドは、其の主題の多様なる、其の文辭の明晰流暢なるとの故を以て、時を同じうせし群小作家の班を抜けり。彼れは、高等なる社會（特に獨逸の南方に於ける）の描寫に成功せるの故を以て、其の著作は、また歴史的價值を以つて推重せらる。以上の三文豪は、其の當時に於ける勢力、及び後世に及ぼし、影響の大

なるものあるを以つて、特に章を改めて其の性行及び著作を叙述すべし。

### 第三章

クロツプストック　レスシンク　ポーランド

フリードリヒ、ゴットフリート、クロツプストック (Friedrich Gottlieb Klopstock) は、一千七百二十四年、クポリンナルクに生まれ、シルナファルテの學校に學びき。此の學校は、索遜に於ける最も善き古文藝學校の一にして、彼れの此の校に在るや、希臘羅馬の諸作家を研究せしのみならず、また、クヌン及びミルトン等の著作にも涉獵しき。一千七百四十五年、彼れは、更に其の業を修めんとして、エーナに行きしが、此處にて、散文もて其が大作の「叙事詩」『メシヤス』の一部分の筋書を作り、翌年にはライプツィヒに行きて當時有力なりし定期刊行の文學雜誌『アレーメル、バイトレーグ』(Bremer Beiträge)の寄稿者等と交り、結び、同四十八年には『メシヤス』(此の詩は六脚韻に)の最初の三篇を同雜誌上に公にせり。彼れは、匿名にて此の作を掲げしかども、其のクロツプストックの作たることは、直ちに知れ渡りぬ。瑞西の批評家ポードメル、此の作を歡迎して自家の詩歌論を實現せる者となし、切に意を致して、彼れのツューリヒに遊ばんことを請へり。クロツプストック、ポードメルを訪ひて瑞西に止まると數月、後に、

彼れは教師たらんことを求めしが、偶、デンマルク王フリードリヒ五世より少許の年金を給せられたるにより、デンマルクの首府コペンハーゲンに到りて、一意其の大作の叙事詩を成さんことに力めたり。彼れが此の旅行を爲すや、ハムブルクに停まること數日、こゝにて文學上の技倆拔群なる若き婦女メタ、モルレルと相知り、やがて偕老の契りを結び、爾後琴瑟相和して幸福なる歲月を送りしが、一千七百五十八年終に、其の妻を失ひぬ。當時、彼れの切なる哀みは目も當てられぬ有様なりきといふ。其の後、クロッパストックは王より受くる年金により生計の煩ひなく、専心詩作に従事したりしかど、彼れが叙事詩の廿一篇を終ふるに至るまでの進行は甚だ遅々たりき。彼れが『メシヤス』の稿を起こし、は齡僅に廿一歳の時なりしが、四十六歳に及びて、やうやく其の稿を脱しぬ。第三、四の兩篇は、一千七百二十五年に出で、次きなる六篇は其の後七年を経て公にせられぬ。而して最後の五篇の一千七百七十三年に出づるや、世間の之れを見ること、甚だ冷淡なりき。蓋し、作者が、作の結構意匠につき豫定の考案なくして筆を下せること益、明かになりたればなり。例へば、一篇の骨髄ともいふべきメシヤス(教主)の苦難及び其の死に關する記事は、

全篇の半ばを占むるに至らず、而して、此の部分に於いては、連続せる物語的趣味なくして、長々しき述懐及び對話を以て埋められたり。クロッパストックの名聲は、此の作によりて、やがて、歐洲全土に喧傳せられしかど、其の詩は、おほむね、全躰として讀まれざりき。多くの人の愛誦せしは主として最初なる十篇にして、此の十篇は、實に、此の叙事詩の最も優れたる部分なり。

一千七百九十二年、クロッパストックは、其の最も親密なる朋友として久しく交りを結びし寡婦と婚し、後ハムブルクに退隱して靜かに其の晩年を送り、一千八百〇二年終に其の幽居に逝きぬ。其の葬儀は、官費を以て盛大に營まれ、アルトナに近きオ、テンゼンの寺内、先妻の傍に葬られたり。古來獨逸の詩人にして、未だ曾て彼れの如き盛大なる葬禮を受けたる者あらず。其の日、ハムブルク及びアルトナに於ける、あらゆる寺院は鐘を鳴らして哀悼の意を表し、百二十六臺の馬車は相次ぎて其の柩を送れり、今日第二のシエークスピア起るとも、之れに過ぎたる禮遇を受くるを得じ。

其の有徳にして信仰の厚かりしこと、及び、其のいみじき天才を具へて燃ゆるが如

き熱誠ありしことは、當時に於ける幾多の事情と相應じてクロップストックの名をして衆人敬仰の府たらしめたり。彼れの當時に出でたるは、猶ほ自から耀く星が旭日未だ出でざるうば玉の夜半に現れたるが如し。蓋し、當時獨逸の詩歌は其の形骸に於いては已に見るべき發達をなし居たれども、なほ其の内容を缺きて見るべき意義精神の其の中に發表せられしものなかりき。而して、クロップストックは在來發達し來たれる形式をして、更に變化趣致多からしめたと共に、之れに與ふるに偉大なる意義精神を以てし、獨逸の詩歌をして國民的また基督教的たらしめたり。彼れは、弱年の頃より自家の天才を信ずること深く、かくて大膽にも『メッシアス』といふが如き高上なる詩題を取るに至れり。而して、かゝる高上なる叙事詩をもつてせんと、彼れが慾望は、彼の性格をして愈、高からしめしが如し。蓋し、彼れは、常に作し得べきあらゆる題目の中、最も高尚莊大なる題目につき、叙事詩を作らんと欲して、其の徳性品格の修養に心をひそめられたれば也。されど、彼れは、決して街誇的學者に非ず、また世を捨て慾を絶つ隱者にもあらず、其の作は凡べて胸に溢るゝ熱誠の結果なりき。而して作の全篇に行き亘れる精神は宗教的にして、獨逸文學の特

質の上に、深大なる影響を與へたり。彼れが『メッシアス』を作する考案を立てたるは、早く已に一千七百四十五年に在り。其のシムルプホルテの學校を退く時、叙事詩の性質及び特色につき告別の演説を爲すや、明らかに後に大名を成せる叙事詩を作せんと、その意をほのめかせり。最も莊高なる題目、宗教心に關して最も高貴なるもの、基督教的信仰の中心たるもの、救世主の苦惱、死、蘇生、升天、是等は、實に彼れが當時より描寫せんと志し、題目なりき。かくて彼れは初代の基督教徒及びヒューマニスム等の叙事的作物、九世紀に現はれたる救世主に關する作、十五、十六世紀の間に現はれたる宗教的劇詩、十七世紀の叙事詩、抒情詩、並に、散文、及び十八世紀の聖樂等を涉獵して、其の作の地を成しぬ。中に就きて、其の負ふ所の最も多かりしは、聖書の傳説に據れる作の中、最も高大に、最も成功せる者といふべきミルトンの『失樂園』也。地獄に關する細密なる叙寫、惡魔の勸誘、惡魔等が意見の違異、惡魔等が容貌を變ずるとによりて懲罰せられしと、惡魔及び神使等の飛舞逍遙する宇宙の通路、及び、篇末なる最終裁判の記事の如きは、まさしく、彼れのミルトンに負ふ所也。されど、クロップストックはミルトンの例に範りて自ら益すると、甚だ多からざりき。ミ

ルトンが地獄の記に次々に樂園を以てし、樂しき風物によりて慘憺たる情景を救へるに反して、クロップストックは筆を天國の光榮に起し、終りに見苦しき地獄を叙して、吾人をして嫌厭の情を起こさしめ、ミルトンが枝葉の記事を延長せしむるを避けて、常に首尾の一貫、全篇の統一、趣構の發展等に注意せしに引きかへ、彼れは些末の描寫にかゝづらひて、本末の調和、全篇の統一を亂し、また、傍觀者の感情を雜へて、敘事發展の徑路を攪せり。蓋し、クロップストックの才は抒情的にして、敘事的にあらざ、彼れが『メシヤス』の中に描き出だせる人物、惡魔、及び、天使は、何れも特質、個性といふべきものを具へず、其の動作の甚だ乏しきに加へて、心たゆまるまでに冗長なる獨白——志かも其の性格を現すべきものなき獨白——を爲せり。此の詩篇、寧ろ幾多の詩の聯續といふべきもの、最も善き部分は、叙狀及び譬喩に於いて見るとを得べけれども、其等は、其れ自身に獨立せる生命あり。引き離したるものとしてこそいみじき價值あれ、全篇の調和に於いては加ふる所甚だ少なし。例へば、彼れがサタンのユダスを誘惑せんとして、疫癘の如く近づきぬることを記せる條に曰はく、

かくて、魔惡(人を殺す疫病にも喩ふべき)は眞夜中ころ、  
なべてのもの脱しづまれる都府に降り來ぬ。

人民は皆睡れり、唯こゝかしこ

燈火がけて學生の書讀める、

またなちこちに紅色の酒酌みて、

善き友のれもせで語る、或は木蔭の小草に、

靈魂不死の希望を語れるはあれど、

嫁くとやがて寡婦となりし新婦等のわび歎くべき、

世の母の孤兒抱へ就泣きつべき、

やがて來む悲しき日をば誰れひとり悲みもせで

云々と譬喩の延長せる讀者をして、ユダスとサタンとの事を忘れしむるに至るものあり。而して、全篇の中かくの如きもの決して五六のみならず。されど、其の部分につきていふ時は、初めの諸篇の中、其の譬喩叙景の巧妙にして、雄健なる筆力、新なる、創意の歎稱すべきもの、亦少なからず。聖靈が夢心地なるユダスを誘ひて、メシヤスの重もだてる從者に願かたるべき美はしき地上の光景を示せる條に次ぎで、背反者に配分せらるべき土地の有様を叙して曰はく、

狹隘なる不毛の地、阜丘崩壊充ち満ち、  
 荒廢して人跡絶え、荆棘いっかに繁り、  
 烏玉の夜は長へに泣く悲雲を纏ひて、  
 地上を厭ひ、荒涼たる岩などの裂目には  
 三冬の積雪絶えずもかゝる。  
 汝と共に此の寂寥を忍ぶべき永劫の宿命うけし  
 夜の鳥は暗所を飛びながらひて  
 雷火に裂かれし樹間に泣き叫ぶ。  
 此の荒地ぞ、是れ、ユダス！汝の所領なる。

と。叛逆者が其の謀を案出して其を實行せんと決意する條に至るや、其の萬有を  
 睥睨せる倨傲なる状を叙して曰はく

默せる驕傲を以て

サタンは眼下に彼れを睨下し、大派越え

恐ろしき崩壊の上に高く飛び、雲間より

波間を見せしむ。破船、屍骸

散り布きて充ち満ちたる其の波間を、

と、譯文拙けれど、彼れが抒情的筆力と巧妙なる叙景とは、かすかにも認め得べきか。

さばれ趣味ある叙景雄健なる對話が其の實際に存するより更に多く存在すとも、  
 叙事詩としての立場より見る時は、其等は『メシヤス』の價値を増すに足るべきも  
 のにあらず。蓋し、クロファストックは、如何なる詩人も失敗せざるを得ざる所に失敗  
 せるなり。詩才は吾人の心作用の中に最も高上なるものの一なり、されど、決し  
 て最も高上なるものとは云はるへからず。詩人の想像力、如何に秀逸非凡なりと  
 も、クロファストックの擇べる如き題目を取るに至りては、失敗せざると困難なるべし。  
 何となれば、這般の詩材は、おほよその詩才を超越すればなり。シエターの彼れを評  
 せる語に曰はく、クロファストックは、實に、叙事詩人の假面を被れる抒情詩人なり。彼  
 れが徹頭徹尾、抒情詩人の分を守らず、また、アンゲルス、シレショウスの如く、基督の苦  
 難の同情的註釋に専心せざりしは惜しむべしと、當たれり。

、クロファストックの才は、要するに抒情的なり。而して、其の詩の最も善きものは、短歌  
 及び讚美歌、特に、其の壯時の(即ち彼れが古代詩歌の韻律を研究して、語句の换位倒  
 置等を爲さざりし以前の)作に於いて見るとを得。其の短歌の最も巧妙なるもの  
 に至りては、到底其の妙味を外國語に譯し出たすべからず。蓋し、其の價値の、おほ



むね形式の上に存すれば也。彼れが其の友に寄せたる哀歌及び短歌の多くは、餘りに多感的なれども、それは當代の作家に行きわたりし通弊なりき。其等の詩中に涙もろく情迫れる語句の多きや、嘆息、號哭、泣きはらせる眼等の語句が、さにもあらぬ無意義些末なる多くの場合に用ゐんとて備へおかれたるの觀あり。されど、其の友誼及び戀愛に關する短歌の中には、是等のかよはく多感的なるもの、外に、多くの高尚ある雅作あり。

クロップストックの作は、獨逸文學の興起に與りて力ありし多感的思想の煥發に最初の動機を與へたるものなり。詩歌に於ける彼れが特殊の技倆は感情を喚び起す力に在り。彼れは人性の根柢を振盪する甚深不可言の情緒を現さんと力め、而して、此の點に於て幾分が成功せり。彼れは、また、ただの言語が其の音韻の妙力によりて人を動かすこと、章句配合上の効力に優るものあるを知り、簡勁なる僅少の語句によりて、最も人を感ぜしむべき自然美を描きたり。

クロップストックが宗教心厚く、其の詩歌を作するや、世間的の事に觸るゝこと稀なりしより、多く成功の機會を逸せしは彼れの爲めに惜しむべきことなり。例へば、愛

國的詩歌の如きは、彼れが之れによりて更に廣く通俗なる範圍に訴へ得べきものなりき。其の齡の猶ほ、壯なるや、クロップストックは其の宗教的熱情と共に父より受け繼げる愛國の熱情の燃ゆるが如きを感じ、其の熱情は一千七百四十九年フリップリヒ大王を頌せんとするのせられたる『戦争の歌』(Kriegslied)となりて現はれき。此の歌は、現實の生活に關し、現實的熱火に充ち滿ちたるものにて、普漏士王に崇拜的頌讚を捧げしものなりしが、彼れは、長く、此の種思想を保持せず、クロップストックが詩人としての熱情欲望は、やがて、臣民としての愛國心を抑壓せり。蓋し、彼れがフリップリヒに待ちし希望破れて、大王は國民詩人等國語にてもせし詩人といふほどの義を保護すると能はず、却て、佛國の自由思想等を禮遇したりしを以て、クロップストックはこゝに國王に蔑視せられたる獨逸の國詩を興し、國王及び自由思想家等に嘲られし宗教の爲めに盡くさんと、堅く決心せる也。かくて、彼れは活きたる現實を見捨て、材を死したる過去に取りて、其の愛國的熱情を描き出ださんとし、『戦争の歌』は、新に Henry the Fowler に獻げられ、而して、シメルキの將軍アルミニウス(Minins)は、短歌及び劇詩によりて頌せられたり。しかのみならず、彼れは、古代の詩

人を模倣することを止め、當時普く知られし希臘神話中の鬼神の代りに北方の神話に於ける神々を用ゐて、一劇詩を成し、名つけて『バルディーテ』(Bardiete)と云へり。彼れが一千七百五十二年に作りし短歌『Hermann und Thunhelda』(ヘルマンの主人公バルディーテ)は問答體の物語歌にして彼れが傑作の一なりしが、一千七百六十九年、一千七百八十四年及次全八十七年に順次に其の稿を脱したる『バルディーテ』の三篇『Hermann's Schlacht', 'Hermann und die Prinzen' 及び 'Hermann's Tod' は場に上す劇としては、全く用なきものにして、唯、其の最初の一篇の多少、詩歌的意匠の見るべきあるのみなりき。要するに、クロッポストックが劇詩の、價値あるは其の企圖の善良なる點に在り、即ち模倣を斥け、國民的獨逸劇詩を創せんと企圖せる點に在り。

クロッポストックが文學上の經歷は一見甚だ奇異なるが如くなれども、其の作は、おほむね當代に行きわたれる傾向を表現し、また、多くの作家に模倣せられたり。彼れが古風なる短歌は、ギゼーケー(Giseke)ラムレル(Ramler)グッツ(Götz)及び彼れと時を同じうせる多くの青年詩人等に模倣せられ、其の無韻律語の自由なる運用は、ゲーテに學ばれ、又、彼れが聖書によれる叙事詩は、ツォーリヒの詩人に繼續せられたり。ク

ロッポストックは、其の生時に於いて、已に多くの模倣者を得、また、多くの影響を當時の文界に與へたれど、巨細に、其の性行及び著作の影響を知らんには、彼れが死後の文學を檢せざるべからず。彼れの叙事詩は、やがて、讀まれずなりにき。されど、其の愛國的熱誠と基督教的感情とは、依然存留して、文士等の頭腦に入れり。彼れ自身の生涯は、善く、文人の行ふ所は、其の教ふる所と調和せざるべからずといふ信仰と一致しき。彼れは、詩歌を遊戯と見做す論を破らんと力めたり。彼れが自國の古英雄古神話を取り來たれる企圖は、詩歌の上より見れば、不幸にして終に失敗に屬しきと雖も、是等は正しく、彼れの獨立の氣象、及び愛國心の厚きを證する者なり。古來何人も自國の言語を愛すると、クロッポストックに過ぎたるはあらざるべし。彼れが其の國語につきていふや、常に誇稱に過ぎたる觀あり。彼れ曰はく、現存する凡べての國語を獨逸語の領域に入らしむる勿れ。其は、タシタスが我等の事柄につきて作りし上古に在りし如く、今も其のまゝに存す——獨立して、混ざるとなく、又、並ぶべき者なくと。彼れは、かくの如く國語を愛せしより、其の短歌の一つに於いて、烈しくフリードリヒ二世が國詩を願みざりしことを難じき。但し、クロッポス

トックは深く、王が心づくしの存する所を知らざりしを以て、其の非難は當を得たりといふことを得ず、王は國民の存立は國文學の興起に先だゞざるべからずといふとを以て、正當に之れに答ふるを得べく、また佛蘭西及び埃太利の隱謀は、王が國詩に對して冷淡なりしことの辯解ともなりぬべし。彼れは、また大に當時の懶惰放肆なる諸侯伯を嘲笑し、またいたく自由を愛して熱心に亞米利加の獨立戦争に謳歌し、佛蘭西革命の宣言に歡呼せり。其の短歌の一に曰へらく、おはれ、汝佛蘭西人よ。願はくは余が曾て我が國人の汝の例に従ふを誓めたることを答むるなかれ。今や余は汝の例に倣はしめんとして、彼等を懲恤しつゝありと。彼れが意氣昂然として、是等の痛快なる詩をもせしは、其の齡已に六旬に達せし時なりしが、彼れは其の後、尙ほ長く生きのび、佛國の革命に對する希望の破れたるを見て、深く悲しめる色ありきとぞ。彼れが此の希望の失望を詠せし短詩は、熱情溢るゝばかりのものなれども、寧ろ粗笨にして散文的なる嫌ひあり。

ヘーデル曰はく、クロツプストックの偉大なるは、本國、自由、戀愛、友誼及び宗教に對する思想の上に在り。或る方面より見れば、彼れの詩才は當代に存せし幾多の事情によりて制限せられたり。されど熱誠にして丈夫らしく且つ獨立を尊ぶ性格より見るときは、彼れはシルレル前に其の比を見るべからざる人物なりと。是れ、ヘーデルが其の抒情詩論講義の結末に於いてクロツプストックを評せし語にして、彼れは明らかに抒情詩の方面に於いてクロツプストックの價值特色を認めたるなり。要するに、クロツプストックの偉大なるは抒情的方面に在り、其の獨逸文學にいたせる功勞は、國民的といふことに着眼したる點に在り。

## レッシング

なり。ゴットホールド、エフライム、レッシング(Gotthold Ephraim Lessing)はクロツプストックに後るゝこと五年、ネーランドに先だつこと四年、一千七百二十九年一月二十二日を以て上ルザリアなるカーメンツに生れき。父は、ルーテル派教會の牧師なり。彼れの學問は一千七百四十八年マイセンなる古文學院に始められ、一千七百四十六年にはライプツィヒの學校に入り、一千七百四十八年にベルリンに遊びき。この七年間に彼れの攻究涉獵せし所は、頗る廣大なりしかど、其の胸中には猶ほ閑日月

の存するありて、大に演劇に對する鑑賞眼を養ひたり。

一千七百五十三年より同六十年に至る八年の間、彼れは主としてライプツィヒ及びベルリンに住し、同六十年にはベルリン府の學士會員に選舉せられしが、間もなくシレチャア朝廷の顧問に聘せられてプレスラウに逗留することとなれり。任地に在りし間、レスシンクの生涯は前とは異なりて讀書に専らならざりしかば、學問を抛ちて博徒となれりなど噂せられ、多少の令名も是等の流言の爲めに打消されたる趣なりき。されど、プレスラウに停まれる五年の間に彼れは劇詩『ミンナ、フォン、バルシヘルム』(『Minna von Barnhelm』)を草し、また、其の他の作の準備を爲せり。一千七百六十七年には國民的演劇を打建つるの計畫を助けんとて、ハムブルクに行き有名なる劇評雜誌『ハムブルク演劇評論』(『Hamburgische Dramaturgie』)を出だせり。彼れが此の演劇革新の希望は、終に失敗に歸せしが、會、ゾルフエンヒツテルの圖書館員たるべき委囑を受けしかば、喜びてハムブルクを辭しぬ。此の大圖書館に藏せる書籍は、レスシンクの志業を助けて、大に其の眼界を擴くしたり。一千七百七十六年、彼れはさきにハムブルクにて相知れる可憐なる寡婦と婚したりしが、契り承からず、

一千七百七十八年に於ける其の妻との死別は彼れが生涯に於ける最も大なる悲嘆の一なりき。其の後、彼れは唯理學徒フレイマールライマールスガものせる斷篇を出版せしが、此の事、端なくも、レスシンクをして神學に關する論争を爲さしむる導火となる。彼れの晩年は頗る、之れが爲めに累はさるゝに至りき。彼れ、また宗教上の寛容に對する自家の所見を公にせんが爲め、劇詩『ナタン』(『Nathan』)を草して一千七百七十九年に出版し、一千七百八十年には『人類の教育に關して』といへる論文を公にせり。後の書は今日に於いても、猶ほ、自由神學主義の爲めになせる論說の最も明瞭なるものとして珍重せらる。彼れが晩年の精勵と其の烈しき論争とは、大に、其の健康を害し、其の快活にして交際的なりし氣風は、全く亡せ、多くの烈しき病魔に襲はれたる後、一千七百八十一年二月十五日、遂に、不歸の客となりぬ。

此の偉大なる批評家の彫像は一千七百九十六年ナルフエンヒツデル圖書館の側に建てられ、更に巨大なる他の彫像は、一千八百五十三年にアルンスホッフに建てられたり。されど、彼れが眞正の紀念碑といふべきは十九世を賑はし、最良なる獨逸文學なり。彼れと時を同じうし、若しくは、彼れに後れて出でたる獨逸の大詩人の

著作にして、多少、レッシングに負ふ所なきものならずといふも誣言ならず。彼れの全集は、初め、一千七百七十一年より同九十四年の間に出版せられ、更に善き全集は、一千八百三十八年以降同四十年の間に出版せられたり。

レッシングの性行は、其の在世の間及び其の死後に於いて狭量なる批評家等の非難を受けたれども、其の真正の行爲品性は其の作及び書翰によりて明かに知らるべし。特に、其の書翰の示す所によれば、彼れの兄弟に友に、朋友に信なりしこと明らかなり。文學的改革者としては、彼れは當代に充ち滿ちたる偏狹なる書齋若しくは抽象的又専門家的なる大學教授等と其の選を異にし、超然、時表に卓立して其の銳利周到なる評論の筆を揮ひき。但し、彼れが論争の激烈に過ぎたることありしは事實として許さざるべからざれども、其の徹頭徹尾公平なる眞理探求者の本分を守り、其の批評の破邪顯正を主眼として、人物の攻撃を目的とせざりしは疑ふべからざるなり。

レッシングはクロッパスストックの長へに若かりしに似ず、弱冠にして早く已に成熟の期に達しました。クロッパスストックが發達の遅々たりしに反して迅速なる發達をなせり。

レッシングの生涯は確實なる進歩發達の生涯なり。而して彼れの攷究は多方面にして而も散漫ならず、其の富贍なる性質の中より漸次に新しき能力を開き出だせり。其の知識の該博にして、しかも獨創の見ありしことに於いては、彼れ亦アリストテレース、ライプニッツ等と並べ稱せらるゝに足るべし。

レッシングの最良なる著作は之れを大別して劇詩、批評及び訓話の三種となすことを得べし。蓋し、彼れは創作批評の才を兼ね、創作に於いても決して人後に落ちず、特に、其の劇詩の如きは、獨逸文學の精華と稱へらるゝものなれども、其の本領にして、また、其の國民文學の鼓吹者と稱せらるゝは、要するに其が批評の方面に在るを以て、予は、少しく詳かに彼れが批評事業を叙すべし。彼れの批評は文學、美術、教育、神學等の諸方面に於いて枚舉に遑あらざるばかり多かれど、其の重要なるは美術論と劇詩論となり、語を換ふれば、『ラオコオン』と『ハムブルッキンシエドラマツルヤ』と是れなり。

レッシングは古來の批評家及び論争的作家の最大なる者の一人なりき。屢引用せらるゝ彼れが有名なる語に曰はく、

人間の眞理は眞理を有することにあらずして、寧ろ眞理を迫うて努力する誠實なる苦辛に在り、吾人の力を擴大にするは眞理を有するにあらずして其れを得んとして探求するところに在り、人間に於いて漸次に生長する美性は獨り此の力あるのみ、而して眞理を有することは、却て人をして驕らしめ忘らしむ。神若し右手に一切の眞理を持ち左手に活潑なる究理心を握りて其の一を擇べと云はば、假令右手なる究理心には常に迷誤の恐れありとの附言ありとも、予は恭しく左手の方に跪きて其の賦與を乞はん。

と、以てレッシングが生れながらにして批評家の資格を具へたるを見るべし。彼れは自家をば明かに反對者の地位に置くの能を有し、而して反對者の論に精密なる解剖を加へながら、自家の論旨を發展するの用を爲さしめたり。彼れが批評の昧裁は、自家の思想を將て作物に蔽ひ被らす如くには見えずして殆んど我れより持して臨む成見なきが如し。言ひ換ふれば、彼れが批評の對境に臨める有様は自己の衣を以て對者を包めるが如くに非ず。譬へば蜘蛛の糸を以て纏ふが如し。殆んど是れより彼れに加ふるありとは見えす。彼れの批評は論理的にしてまた劇詩的なり、簡に云へば内在的批評なり。もろくの思想がおのづからなる順序に

したがひて相踵いで起こり、談話し、論争し、終りに最も強き者勝を得て明かに其の勝利者たることを布告するに至る、かくの如きもの、即ちレッシングの批評法なり。(このゆゑに當時の形而上學及び美學等を論ぜる學者の說に於いて普通なりし誤認の對峙は、もほむレッシングが評論の中に見出ださるゝを得べし。要するに、彼れが批評は一二學派の美學說、若しくは美術論を根據とし、狹隘なる自家の成見を以て作物に臨むことを爲さずして、作自身の性によりて其の價値を判ずるにありき。彼れが批評の眼目とせる三設問に曰はく、(一)其の想能く詩歌の本質に合へりや、(二)其の想を發展舒暢する法能く、獨逸國民の性情に、適するか、(三)其の作に於ける形と想とが能く相渾融して美妙なる一個體を成し、法則の首尾を貫くありて能く一個の組織を爲すかと。レッシングは常に此の標準によりて、凡べての著作を評せるなり。

彼れは當時の批評家が理論的及び教訓的著作と詩歌とを混同する誤認を指摘すること、を以て其の評論を開き、ポードメル、ブライティンゲル等が賞揚して過分の價値を與へたる訓話(作物語)を貶して相當なる地位に墮としたり。彼れは其の一論

又の緒論に於いて「詩人は(哲學的)系統を有し得るか及び抽象的眞理と感覺的詩語とは相容るゝを得べきか」といふ二問題を研究し、此の二者は牴觸して相容れざるものにして、古來詩形を以て哲學的系統を叙列したる例しはあれど、律呂を附したる哲學を詩なりとはいふべからず。之れを作れる者、また、唯だ韻語排列者たるに止まりて詩人にあらずと説きて、哲學と詩歌との界限を明かにしたりしが、また訓話の性質目的及び叙述法を説き、エソプ物語を以て其の上乗なるものとして以爲へらく、訓話に至要なるは其の簡潔にして精確なることなり、其が至美の文飾ともいふべきは、毫も文飾を加へざることに在り。エソプ物語は假作動作の物語にして靈活なる實例を以て倫理上の通則を會得せしむるものなり。訓話の終極の目的は倫理の法則にして、訓話中の動作は此の倫理的格法を讀者の心眼に瞭然たらしむる活例たらざる可からず。訓話と劇詩及び史詩との異なる點は、前者は動作を倫理の目的に局せしめて動作以外に目的を置き、後者は動作以内に目的を樹て動作其のものを主眼とするに在り。即ち訓話は詩歌倫理の兩界に跨れるものなりと。而してレスシンク自らの訓話は著く簡潔にして些の注釋をも要せざるほどに明晰なるものなりき。彼れが模倣的作家を諷せる最も短き訓話の一に曰は

猿狐にいふやう、我が真似ること能はざるほどに伶俐なる動物あらば之れを示せ、狐答へていふ、汝を真似んと思ふほど卑しむべき動物は何處にありや、我れに語れ」と。

レスシンクはかくして詩歌と哲學との區劃を立て、また純粹の詩歌界より道德主義を却け、さて更に詩歌と他の美術(主として繪畫彫刻)との本領及び其の區劃を論定せんとして、一千七百六十六年に有名なる大著『ラオコオン』(Laokoon)を公にしぬ。フンケルマンが希臘の美術を論ぜる中に、希臘彫刻の名品ラオコオンに關する一節あり。其の意に曰はく、希臘美術の妙處は高潔にして靜寂なる威嚴の具はれるに在り、希臘の彫像は其の何れを見るも情海波瀾の中に於いて、隱然大度量の蔽ふべからざるものあり。ラオコオンの像の如きも其の猛烈なる熱情の中に在るにも拘はらず、偉大沈着なる度量の顔面に髣髴たるものあり。其が身体各部の筋肉纖維は悉く苦痛を現し、下腹部の状のみを見ても觀者自ら苦痛を感ずるが如き想

ひのせらるゝに、此の苦痛の顔面態度に發する所甚だ激烈ならずラオコオンの彫像はゾーシャルが詩中のその如く悲鳴をあげずして纔に呻吟の微聲を洩らすか如し。ラオコオンの像に於いては、身體の苦痛と精神の高大と相伴ひて其の全面に充ち兩者の配合平等なり云々と。レスニングは此の井冈山マンが語を假り來たりて繪畫彫刻等の具形的美術と詩歌との本領界限を論じたるを以て、此の書に負はするに『ラオコオン』の名を以てせり。

ラオコオンの一篇其の主眼とする所は、詩歌と具形的美術との界限を論じて、前者は動作の連續を叙するがゆゑに、苦痛の頂點をも寫すことを得れども、繪畫彫刻は、唯だ一時一處の動作を寫すに止まりて、永く之れに停住するものなるがゆゑに、激甚なる苦痛を寫すべからずといふにあり。其の論の大意に曰はく、詩人ゾーシャルが希臘の僧侶ラオコオン及び其の子の大蛇と闘ふところを寫すや、苦痛に堪へかねたるラオコオンをして聲高き悲鳴を擧げしめたれども、同じ僧侶の破滅を寫せる有名なる彫刻に於いては、ラオコオンの顔面に甚しき煩悶苦痛の状態なし。古來これに就きて論ずる者、或は彫刻家が詩人の如く大苦痛の狀を寫さざるを難す

るあり、或はゾーシャルの詩を以て、希臘美術の眞意を失ひたるものとする井冈山マンの如きあり。されど、是れ皆、詩歌と彫刻との異同を辨へず、同一の標準によりて二者を律するの誤りに出づるものなり。シモニデスが畫は無聲の詩にして、詩は有聲の畫なりと云へる語、及び詩は畫の如くなれと云へるホレーズの言、ともに、詩と畫とが人心に感化を及ぼす點に於いて相類似する所あるを示せる名言なれども、二者を混同して其の特質界限をひとしなみに見たるは非なり。近世の批評家が、是等の言に泥みて兩者の異同を辨へず、或は繪畫彫刻の狹隘なる範圍に詩歌を局せしめひとし、或は繪畫彫刻をして詩歌の廣濶なる領分を犯さしめんとするは、大に誤れり。抑も、繪畫の事物を描寫するや、其が取るところの手段は大に詩歌の描寫と異なり、詩歌は序を、おうて、出來事を、敘述し、行くものなり、繪畫及び彫刻は、共在する物象を表現するものなり。一は空間に於ける形象、色彩を以て事物を摸し、他は時間内に連續する言語音調を以て出來事を寫す。一の材料とする所は眼を以て見るべき物體なり、他の材料とする所は時間の中に發展し行く動作なり。但し、繪畫彫刻も物體を寫して動作を想見せしむること能はざるに非ず。詩歌は



た動作を叙して物体をも想見せしむるを得ざるにあらず。されど、形体の美を摸して同時に並び存する諸部分を一目の下に通観せしむるは繪畫彫刻の特得の長所に於て、推移變遷し行く動作を叙するは詩歌の特色也。希臘の彫刻家がラオコオンの苦痛を摸するや、其の實際の煩悶に比して顔面の沈靜なるが如きは、彫刻の本性之れを然らしめしのみ。詩歌に於いて激烈なる苦痛を描寫することの許さるゝは其れの直に過ぎ去るがゆゑなり。其の繪畫彫刻に於いて許さるべからざるは一状態の永久に住着し居ればなり。フンケルマンが靜寂なることが希臘古代彫刻の主要なる特質なりと云へるもの、是に於いて加理ありといふべし。蓋し繪畫彫刻と雖も、連続せる事柄の中の一部を現し觀者の想像を以て其の前後を補はしむることを得ざるにあらず。されど繪畫彫刻の動作を寫すといふ、かくの如きのみ、二者の詩歌に類似せるは唯だこれに止まる。また一方に於いては、詩人は動作と共に物体をも現し得べく、其の敘述的形様を物体に加ふる時に於て、彼れは繪畫彫刻の領分に觸るゝことを得れども、彼れは永く一物体の描寫に住着すべからず、語を換へて云へば、畫家彫刻家が輪廓、色彩、陰影等を用ゐて詩人よりも一層成

功し得べきことを、詩人は言語彫刻にてものせむと試むべからず。今若し、彫刻家をしてゾーソルの時に倣ひてラオコオンの悲鳴を揚ぐる像を作らしめむか、其の口を開きたる顔面の醜きは更にも云はず、之れを見る初めに於ては或は觀者が其の苦惱を思ひて同情を起すものあらむも、忽ち其の醜狀を見るに厭きて之れに對する同情は、やがて、苦痛に堪ふる能はざる薄弱を笑ふ情と變せん。但し、口を開きて悲鳴を揚ぐるは苦痛の極に達したるものなり、而して事物の極度は、吾人に想像を運らす餘地を與へず。是を以て彫像に現れたる烈しき苦惱を見たる觀者は、更に想像を之に加ふること能はざるべし。是れ、まさしく觀者の想像を束縛するものにして其の直ちに倦厭を來たすべき所以なり。且つ、又實際に於いては、一瞬に變化推移して其の跡を止めざるものも、之れを彫像に現はす時は固定不變のものとなるがゆゑに、之れを見るの度重なるに従ひ、背理の感を起こさしむること益甚だしく、之れに對する同情の消え失すると共に、終には、之れを嫌忌するに至るべし。されど、詩歌は之れと異なり、ゾーソルが詩中のラオコオンが悲叫したりとて、誰れか、其の開きたる口の大なることを想ひ起こさむ。誰れかは之れが爲めに

其の面相を崩したることを懐はむ。時歌に於ては繪畫に於けるが如く其の描く所を一瞬間に集むるを要せずして順次に動作の發展を叙し得るが故に、其の中なる一節を切り離していふ時は、或は讀者の感情を害するものありとも、其の推移し行くことによりて、若しくは其が前後の關係によりて、之れを妨ぐこと難からず。このゆゑにラオコオンをして叫ばしめざるはヴァーヨルの失敗にあらず、ラオコオンを叫ばしめたるも彫刻家の拙なるに非ず、畢竟各自の技術の範圍内に於いて正當なる表現を爲したるものなり。

要するに繪畫と詩歌とは、同じ家に住まふ姉妹の如し。されど、二者の本領界限は明瞭に區劃せられざるべからず。「若し、我れ、ホメーロスの實例によりて其が堅固なる證據の存するを見ずば我れは我が此の論を信ずることなかるべし」。ホメーロスの『イリアドス』を見よ。彼れは、事件動作の發展に就きては、精細なる敘述をなしたれども、物語の中に在る物體に關しては曾て長々しき敘述を爲したることなし。例へば、其の船に就きて、叙せる所は、唯だ、黒き舟「うつろ舟」若しくは「いみじく漕ぎゆく黒き舟」といへるのみ、定着不動の物體に關して、ホメーロスは其の他を云はざりき。されど、彼れが船に關する動作若しくは動作の聯續、例へば、漕ぐこと、乗船上陸等、を云ふや、若し畫家をして其の全體を畫かしめば、敷葉を費さざるべからざるほどに精細なる敘述を爲せり。彼れのアガメノンの笏を叙するや、其の黄金より成れること、若しくは、彫刻飾付の美なることを描かずして、ゾルカンの冶場に鍛へられて以來傳へて終に彼れに歸せる歴史を叙せり。繪畫と詩歌との本領及び界限、豈に甚だ明瞭なるにあらずや。

以上はレスシンクが名著『ラオコオン』に於けり所論の大畧なり。此の書は其の批評法を以て及び其の精細なる美術論を以て、方今も尙ほ世界の珍とせらる。レスシンクは、かく美術論に於いて功勞あると共に、演劇の批評に盡くし、こと亦決して少にあらず。而して、獨逸の文學に影響を及ぼしたる點に於いて、其の演劇論は彼れの手成れる論著中第一のものと稱せらる。此の演劇論は定期刊行の劇評雜誌にして、題名を『ハムブルク演劇評論』(Hamburgische Dramaturgie) (一千六十七年以降同六十八年まで發行)といへり。中に論ずる所の主要なるもの三、即ち佛蘭西演劇の攻撃、シエークスピアの稱揚、及びアリストテレスが詩歌論の解釋に就き

ての論難(主として三一致の論)にして、第二と第三とは其の中心たる佛國演劇の攻撃に附帶せる議論なり。

レスニングが佛蘭西演劇に對する攻撃の中、其の鋭鋒の最も多く加へられたるは、ブルテールとコルチーユとなりき。蓋し、此の二文豪は作家として當代に君臨せしのみならず、其の理論に於いても一世を左右せしがゆゑに、彼等の爲せる議論が文學の發達を害すること大なるを以てなり。レスニングとブルテールとの關係は、善惡いづれにもせよ、彼れが生涯に於ける重大なる要素なりき。彼等は、曾ては室を同じうして相對し、師弟らしき關係さへ其の間に存せしが、後には、主張のみならず、私交上に於いても相反するに至れり。レスニング曾て「Die Feder des Lotharius」(路易十四世の時代)の原稿を出版するに先ちて、其の執事より借り受けたりしが、他人にこれを秘せざりしゆゑを以てブルテールの意を害しやがて、其の交りは破れたり。但し、此の破裂なくとも、彼れは、終にブルテールの風下に居ること能はざりしならむ。ブルテールの宗教に對する嘲罵の彼れを服するに足らざるはいふ迄もなく、其の多くの弱點は到底此の鋭敏なる觀察者の眼を免かるゝこと

能はざればなり。要するに、ブルテールはレスニングを獨立せしむる楨杆たりしのみ。彼れがブルテールを評せる意に以爲へらく、ブルテール自らは佛國演劇の改革者たらんと欲せしならん。されど、彼れは、實際曖昧なる法則書の著者たるに過ぎずして、創作の才に於いては、生熟の域を脱すること能はざりき。彼れの英國演劇を言ふや、アッティソンを過賞して甚だしくシェイクスピアを貶したれども、是れ、唯だ影に向ひて眼を挑めるが如きのみ。彼れは、誹謗しながら、シェイクスピアに模したるもの少なからず。而して、其の模倣の拙なる到底、沙翁の才に及ぶべからざることを明かなり。彼れの悲劇「セミラミス」を見ずや。是れ、正しく沙翁の「ハムレット」に出でたるものなり。されど、曲中の陰鬼をして白晝稠人滿座の中に現はれしめたるが如き、之れを沙翁が老ハムレットの幽霊を深夜に現はれしめ之に對する者を「ハムレット」一人たらしめて觀者の注意を集注せしめたるに比すれば、其の巧拙、豈日と同じうして語るべけんや。蓋し、幽霊の如きは、夜陰寂寥の間に現じてこそ、觀者をして恐れおのゝかしむるを得べけれ、また之れに對する人を一二の少數者ならしめてこそ、觀者をして、専心に之れに同情せしめ得べけれ。今は然からずして、

白晝に於いてし衆人の前に於いてす、其が観者の嗤笑を買ふもとより其のところのみ。アルテールと雖も、全く之れを知らざるにはあらざらむも、唯だ新奇を街ふに急なるより、此の舉に出でしなるべし。冷淡なる思索家アルテールがシェイクスピアを摸して終に其の皮相に止まれる、憫むべきかな。

アルテール、其の悲劇『ザイール』に就きて曰ふ、數多の貴婦人は、我が悲劇に戀愛の分子の足らざるを難じぬ。我れ乃ち之れに答へて曰はく、悲劇は戀愛に至適なるものにあらず。されど、若し切に戀愛的主人公を望まば、予は此の種の作に於いても敢て他に譲らざるべしと。『ザイール』は、即ち此の言に則り、十八日間に作りて喝采を博したるものなりと。レッシングは、之れを評して曰はく、或る批評家は『ザイール』を以て戀愛の真相を寫したるものなりと云へれど、非なり。是れ唯だ痴情的戀愛の皮相的描寫に過ぎず、戀愛の悲劇としては、予は唯だシェイクスピアの『ロメオ、エント、チュリエット』あるを知るのみ。アルテールが、鮎治郎ザイールをして其の情念を吐露せしむるや、頗る精妙なるものあれども、之れを『ロメオ』に比すれば、殆んど顔色なし。同じ作の中なる嫉妬者オロスマンを以てシェイクスピアのオセロに比

する、もまた然り、或る批評家はアルテールを評して彼れはシェイクスピアの悲劇が人を熱殺する火銃を奪ひ來たれりと云ひたれど、彼れの奪ひ得たる所は、唯だ、其の一小部分而も光熱共に薄弱にして煙のみを吐く部分のみ。

『ザイール』が戀愛の戯曲なるに對し、『メロップ』は母の愛を除きては、毫も愛情の分子なき戯曲なり。此の作は、伊太利の詩人マッフェイの作『メローベ』を改作したるものにして、彼れは、卷首に長々しき文を掲げ、陽にマッフェイを稱して陰に自家を掲げ、又其の友に送れる書翰及び其の友人間の往復書翰等、いづれも此の曲を賞揚せるものを掲げ、更にランダルといふ假設の人名によりて、陰に陽に自家を賞賛せり。レッシングは、仔細に、此の卑怯なる術數を指摘し、ランダルとアルテールとの異名同人なることを暴露し、此の佛國の文豪は一の虚言者なりと斷じ、『メロップ』の脚色は希臘のイッピダス之れを案じ、マッフェイ之れを改めたるものにして、アルテールがそれを踏襲せる跡の顯然たるを難じ、さて、ランダルの言を擧げて三一致の論に及びぬ。ランダルマッフェイを難じて曰ふ、マッフェイの戯曲には往々齟と齟との間に聯絡なくして舞臺に空隙を生じ、又其の人物の出入に些の理由の存せざることあり。是

れ、現今に於ける最下流の作者に對しても許すべからざる重大なる過失なりと。レシシク之れに對して曰はく、是れ果たして重大たる過失なるべきか、假令、且らく其の言に従ふも、此の最下流の作者にだに許すべからざるもの果たして佛蘭西の作家に稀有のことなるか。但し、佛蘭西人は一定の方式に従ふことを以て得意とすれども、擅に規則の範圍を定め之れに曲從するの餘り却て、之れを守らざるに劣れることあるも、佛人の常なり。ブルテールは、特に此の術に長け、其の意に任せてほし、いよいよ美術の方式規律を左右するの妙を得たれども、其の不調和なる、或は自家撞着の失態を演ずること亦少なからず。彼れが戯曲「メロップ」の舞臺をメロップの宮殿に置きたるが如き、是れまさしく、佛人の謂はゆる場所の一致に合せざるものにあらずや。既に場所の一致といふ、宮殿の中に於いても、其の一部に限らざるべからず、若し又宮殿の全部を舞臺となし得べくんば、一市、全國を舞臺とする亦可なるべし。コルチーユは場所の一致に關する法則を擴めて一都市の内は其の範圍を超えずとせり。されば、アルテールが其の「メロップ」に於いて、或は正殿或は女王の室等、屢々局面を變更せるは、必しも難すべきにはあらず、されども、彼れは須

らくコルチーユが同一の幕に於いては頻繁なる變更を爲すべからず、同一齣に於ては更に不可なりといへる注意を守るべかりしに、之れを輕視して同一齣内に於いて屢々舞臺を變更せるもの、是れ豈場所の一致の法則と全く相反する者に非ずや。時の一致に至りては更に甚たしきものあり、コルチーユは此の法則に關して一晝夜を三十時間まで延ばし得ることを許したれども、「メロップ」に叙する所は到底三十時間内に結了し得べきものにあらず、彼れが幾多の纏綿せる事變を、無理にも短時間に收めたるは、場所の一致の法則に合ひたりと云は、いふべし。されど、其は、單に此の法則、而もほし、いよいよなる法則に合ひたるのみ、其の精神は業に己に法則の外に逸せるなり。コルチーユは齣と齣との聯絡を以て、詩歌の裝飾なりとは云ひたれども、之れを須守の規則とするに足らずとせり。ランデル(即ちアルテール)が此の裝飾の缺けたるを以て最下流の作者にだに許すべからざる過失とせるもの、之れをコルチーユの説より一步を進めたる卓論といふべきか、はた戯曲の本領を忘却せる愚論といふべきか、此の疑問の決せられざる間は、コルチーユの説を捨て、ランデルに與すること能はず。人物出入の理由に至りても亦アルテール

ルとマッフェイとの間に著き徑庭あるを見ず。アルテールは曲中の人物をして一々登場退場の中理由を明言せしめられたれども唯だ口して之れを言はしめたるのみ人物をして之れを實際に履行せしめ、事件性格の發展を貫徹せしむる點に至りては未だ多く成功したる所なきなり。

佛蘭西人が時と所との一致を重んじてそを動かすべからざる法則としながら便宜により多少之れを左右したることかくの如し。是れ規則を遵奉する者に非ずして之れを蔑視しながら猶ほ之れに對する忠實を粧はんとするものなり。且つ、彼等は時所の二一致を以て古代希臘より傳へ來たれる規則なりとすれども、其實は然らず、場所の單一に就いては、アリストテレスは一言も述べたることなく、時の一致に關しても、彼れは單に、敘事詩よりも短き時間を用ゐ、能ふべくは太陽の一廻轉する間に其の局を收むべしと云へるに過ぎず、希臘の著名なる戯曲家等亦多く、時所の一致に注意せざりき。要するに、戯曲に缺くべからざる要件は動作の一致 (Unity of action) 現今の謂はゆる往格の一致といふに略々相似たりといふことにして、他の二つは此の要件に附加せられるものに過ぎず、佛國の戯曲家が、之れを

忘れて、却て此の附加物に重きを置けるもの、これ正さしく戯曲の精神を誤れるものと云はざるべからずと。此の三一一致既は佛國文學の流行と共に、一時は獨逸の文界を風靡したるものなりしが、之れを排斥するに於いて、レッシングの辯難最も力ありき。蓋し三一一致の説はもとコルネーユの主唱せし所、而して其の基づく所はアリストテレスが詩歌論の誤解に在りき。レッシングがアリストテレスの論に根據し秀逸なる希臘の戯曲家及びシークスピア、カルデロン等より引證して、佛國批評家等の妄論を打破しつゝ、一方に於いて自家の説を打ち建てたるは、其がコルネーユに對する攻撃に於いてなり。而して此の爭論は、詩人ライゼの『リチャード三世』の批評に其の端を開けり。

レッシング曾て『リチャード三世』を以て當時の文壇に於ける傑作の中に數へられしが、其の少なからぬ缺點をも挙げたる中、アリストテレスの悲劇論に據りて、主人公リチャードの性格を論じて曰はく、此くの如く、憎むべく厭ふべき暴虛無道の怪物はアリストテレスの論旨に合ひたるなるといふべからず。アリストテレス曰はく、悲劇は觀者の同情と恐懼とを惹き起すべし、而して至善の人と至惡の人とは

共に此の目的に合せず。と。それ、リチャード三世の如きは、人面の悪魔ともいふべくして吾人に同じき所なき者なり。されば、吾人は目のあたり其の地獄に陥りて苦難を受くるを見るも、少しも同悲の情の起ることなく又、さる炎禍の吾人の身にふりかゝらんことをも憂へざるべし。是れ、此の戯曲が悲劇の真意に合はざる所以なり。かゝる戯曲をして秀逸の名わらしむる獨逸現時の劇界は、實に果敢なきものなれども、百年以來歐洲に於いて最上の演劇を有すと自稱し、また、現今獨逸文界の歎美模倣を受けつゝある佛國も、實は上乘の悲劇を有せず。但し、佛蘭西人に真正の悲劇を作すべき能力なきにはあらず、若し彼等にして、已に上乘の悲劇を得たりと自信することなかりせば、俊秀なり作家等は、已に悲劇に於いて最高の名譽を擔ふことを得しならん。彼等がコルチーユ、ラシーヌ等を得て、無上の悲劇作者を得たりと信じ、模範を之れに取りたるもの、是れ、佛蘭西悲劇のはかゞしき進歩を見ざりし所以なり。就中コルチーユは、其の創作に附加するに偏狭なる學理を以てしたるがゆゑに、其の詩歌の發達を害したること頗る大なりき。彼れがアリストテレスの詩歌論に對して加へたる牽強附會なる解釋の要に曰はく、

(一) コルチーユはアリストテレスが「悲劇は觀者の同情と恐懼とを惹き起すべし」と云へるを解して曰はく、然り、然れども此の二條件が必しも常に同時に起ることの必要なるにはあらず。同情若しくは恐懼の一を起せば足ることありと。コルチーユは例を自己の作に取りて之れを主張せり。

(二) コルチーユはアリストテレスが「悲劇は同情と恐懼とを同一の人物によりて起すべし」と云へるを解して曰はく、能ふべくんば可なり、されど、此の兩感情を喚起せんが爲めに多くの人物を用ふるも不可なしと。彼れはまた自己の作によりて之れを辨せり。

(三) アリストテレスは以爲へらく、悲劇は觀者の同情と恐懼とを喚び起こして、其の心の全體を洗淨せざるべからずと。コルチーユは之れに附會して曰はく、悲劇は觀者の同情を喚起して其の恐懼を喚起し、而して此の恐懼によりて同情せられたる劇中の人物の不幸を招く基となれる情と同一き情を洗淨すべし云々。是れアリストテレスの既に非ずしてコルチーユの、強に附會せるものなり。コルチーユは、此の主義によりて悲劇を作り、佛國の悲劇、亦皆之れに據れり。是れ、彼等が真正の悲劇を得る能はざる所以なり。

(四) アリストテレスは以爲へらく、悲劇に於いては、些も限なき吾人を不幸に陥らしむべからず、憐憫見るに堪へざればなりと。コルチーユは解して曰はく、然り、かくの如く心は苦惱する吾人は對して同情せよよりも、苦惱を與ふる人に對して憎惡を感じることに

大なるべし。而して作者の描寫至らざる時は此の憎惡憤怒の念、同情を壓して終に悲劇の眞意を書し、觀者をして満足せしむるも能はざらむ。されど、詩人にしに若し此の兩感情の配合を適宜ならしめ、有徳者に對する同情の感をして惡人に對する憎惡の念より強からしむる時は有徳の人を不幸に陥らしむるも不可ならずと。前者は、慘憺見るに忍びざるが故に不可なりと云ひ、後者は憎惡の念が同情の感を壓するがゆゑに不可なりといふ。是れ正しくアリストテレーノの意を曲解したるものなり。

(五) アリストテレーヌは不徳なる人物は同情をも恐懼をも喚起せざるが故に、悲劇の主人公たらしむべからずと云へるに對して、コルチーユは曰はく、惡人を主人公とせば同情を喚び起すこと能はざるも、恐懼を起すべきこと明かなり。豈し觀者の中、其等の不徳を悉く爲し得べしと信ずる者あらざるべければ、之れより生じたる不幸を見て、恐懼の念を起すものあらざらむも、其等の不徳の一部が我れにも存するを思ひて其の不幸の我れにも降り來たらんことを恐るべければなりと。是れ、恐懼とアリストテレーヌが悲劇論に謂はゆる心情の洗淨とを混同せるものにして、自家撞着の謬論なり。

云々、かくて佛蘭西劇を排斥し、シェイクスピアを稱揚し、アリストテレーヌの眞意を辨ぜるもの、是れレスシンクが『フムブルギッシュドラマトールギー』の大略なり。但し、レスシンクは、決して唯だ、消極的に佛蘭西劇を排せるにはあらず、佛の喜劇に對しては十分に其の長を稱せり。要するに彼れが評論の骨子を成せるは、それが獨逸

國民の性情に合ふか否かといふに在りき。

レスシンクは『ラオコオン』の卷末に、劇詩が諸種の詩歌の中最も高等なるものなることを説いて曰はく、凡べての美術は直接に自然を表現するを目的とせざるべからず、而して、唯だ言語を用ゐて間接に自然を描寫し表現し得る所の詩歌は演劇に於いて高く直接表現の域に至り、人生を眞實に模倣する程度に上ることを得と。以て彼れが演劇に對する趣味の如何ばかり深かりしかを知るべし。彼れは己に『演劇』の性質を論じ、『ラオコオン』に於いて叙事詩の本質を説きしが、詩歌の一部門なる演劇に對して理論的基礎を與ふることは、彼れに取りて遙かに重要なことなりき。彼れは模範として訓話に於てはエソプ物語を、叙事詩に於いてはカメロトスを取りしが、演劇に於いて彼れの指導者となりしは、理論に於いてはアリストテレーヌ、實際に於いてはソフォクルスなりき。彼れが眞正の演劇を説くや、佛蘭西派と共に最も重きをアリストテレーヌの所説にあき、又當時隆盛を極めて彼れ亦其の中に養はれたるブルフ學派の哲學に左祖して、正確なる定義を、一切の理論の基礎となし、甚だしく之れを重んじたり。彼れはアリストテレーヌが悲劇論、少な



くとも彼れの之れに對する解釋は明かに演劇の眞髓に觸れたるものなりと信じ、又此の定義はソフカクルスの戯曲と、全く一致すと見たり。更に奇異なるは、彼れが「シェイクスピアの戯曲が、アリストテレースの要求に、全く應じたりと見たることなり。而して、彼れが此の判断によりて吾人は獨逸人に類似せる國民(英國人)の文學が如何ばかり彼れに重んぜられたるか、又彼れの鋭利なる批評眼が、いかに假面を透ぼして骨髄を看破し、種々の外觀の裏に眞天才を辨じたるかを見るべし。彼れ以爲へらく、人物の性格よりあつからし流れ出づる避くべからざる結果として、人力の如何ともすべからざる事件を描寫し、これによりて觀者を驚懼せしめずして其の同情を喚び起すこと、是れ、悲劇の骨髄を成す所以にして、是れ、ソフカクルス及びシェイクスピアの同じく有する所なりと。彼れは此の立脚地より、獨逸當時の戯曲を批評し、ゴットシマト、コルネーユ、ラシーヌ、ゾルテール等を排斥せるなり。

レッシングと時代を同じうしたる作家批評家にして、彼れの批評攻撃に遇ひたるもの少なからず。上に述べたるゾルテール、ラシーヌ、コルネーユ、ゾイゼ等に對する

攻撃の外、クロプストック、ボンケルマン、ポトランド、ゴットシマド、ポードメル、プライティンゲル等、亦、皆其の手強き批評にあふことを免れざりき。レッシングが一千七百五十八年にベルリンに歸るや翌五十九年より『文學書翰』(「Litteratur-Briefe」)を發行し、爾後繼續して一千七百六十五年に至れり。是れ機智に富みたる書翰體を以て對話體に時文を評せるものにて、レッシングを知らんとする者の看過すべからざるものなり。中に就いてゴットシマド、クロプストック、ポトランド等に對する評論特に出色の文字なりと稱せらる。彼れがゴットシマドを攻撃せる意に以爲へらく、ゴットシマドの謂はゆる演劇の改良は、一方に於いては、不要の瑣事に關し、一方に於いては、寧ろ演劇を壊亂するものなり。ゴットシマド以前の獨逸劇界が、卑猥沒理にして腐敗の極に達したる事に關しては、ゴットシマドは、必しも之れを看破したる第一の人に非ず。彼れは、自ら之れを短正し得と信じたること、於いて時流に先たてるのみ。而して其の所謂矯正改良とは、自ら佛蘭西の戯曲を翻譯し他人にも之れを獎勵し、在來の演劇を改めて佛蘭西風の新演劇となさんとしたることに過ぎず。而して、佛蘭西風の演劇が獨逸國民の性情に適するか否かは、彼れの問はざる所なり。

き。獨逸國民の性情は佛蘭人のよりも寧ろ英國人のに似たり。高壯幽凄なることの獨逸人を感ぜしむることは、優雅溫柔なることの彼等を樂しましむる比に非ず。今、ゴットシテップは、殺伐蕪穢なる者から猶ほ是等高大沈痛雄壯等の分子を具へたる我が在來の戯曲を排して、之れに換ふるに我が國民の性情に適はざる佛蘭西風の戯曲を以てせむとす。是れ豈に獨逸の劇壇を壞亂するものに非ずやと。語往々にして危激に亘れる所あれど、獨逸國民の性情に適せずとて佛蘭西劇を斥け、又英獨二國民の性情の相合することを脱ける所は、慥に千古の卓見なりといふべし。非ーランドが其の特長を捨て、岐路に彷徨せるを見ては曰はく、彼れの長所は輕妙艶麗の文致に在りて、未だ莊高雄渾、熱情等を寫し得るの境に至らず。然るに自家の長を捨て、ポードメル、ブライテンゲル等瑞西學派の所説に投じ、クロツプストックの響に倣うて基督教的情感を詠じ、多感<sup>ヒトイオン</sup>的文字の排列を是れ事とす、思はざるの甚だしきなりと。クロツプストックが其の盛なる感情に驅られ架空の想像を逞うして、模糊茫漠たる畸形を描くを見るや、彼れ、又之れを指摘して忌憚する所なかりき。蓋し、第一流の作家に對して嚴酷に、又精密に批評せよとは、レスシングの固く

保持せる主義なりき。

レスシングのラオロオンを公にするや、間もなく羅典學者、史學の大家にして「古代寶石の用」を著したる教授クロツツ (Kloß) 之れを批評したりしが、レスシングは之れに答へて、評者の「古代寶石」の著を攻撃し、且つクロツツに對する數多の攻撃文を草せり。是等は「骨董的書翰」(“Antiquarische Briefe”) 一七六八—六九の名を以て出版せられたり。

以上述べ來たれるは、レスシングが批評事業の概略なり、之れによりて其の全豹を知るに足らざるはもとよりなれど、其の一斑は窺はれつべし。約言すれば、彼れは平淡なる描寫を特長とする詩人の熱情的または超絶的詩歌を作することを斥け(非ーランドの例の如き)、ゴットシテップが獨斷的なる詩歌演劇論を排し、又ポードメルの詩歌論、クロツプストック敘事詩に感情を喜ぶ傾向あり、且つ美術的形式の缺乏せるとと、及び教話作者の卑俗に又散文的にして詩歌を説教の用に供せんとすることを難じたり。彼れが是等の著作は表面上おほむね消極的なれども、其の眞實の企望は決して嘲弄的なるにもあらねば、又、破壞的なるにもあらず。彼れは打ち壞す

と同時に建設せり。彼れはシェークスピアが非凡の才を稱へて讀者の注意を促がし、又奴僕的模倣を斥くると同時に大に古人の大作を尊重すべきことを説けり。一言はして蔽へば、彼れは獨逸の文學に與ふるに活潑なる精神を以てせるなり。ヘーゲル曰はく世界に於いて成されたる凡べての大事業は、思想の力を通ほして成されたるなりと。レッシングの如きは此の言に強固なる證據を與へしものといふべし。

翻りてレッシングが創作を見れば、此の點に於いても亦彼れの一世に卓絶せるものあるを見る。彼れの戯曲は其の正確なる手腕によりて描かれ、其の目ざしたる企圖は常に保持せられ、又到達せられ、其の趣旨結構は常に明かに發展し行き、會て、枝葉の描寫に走りて全篇の統一調和を害ひ、或は趣旨の進行を澁滞せしむることなかりき。彼れが戯曲の場面は、概ね巧妙に組み立てられ、其の滑稽も亦輕妙に、其の人物性格は多少時流に投じたる場當りの氣味なきにあらねど、おしなべて善く描かれたり。要するに、彼れは其の創作に於いては假令第一流の作家たること能はずとも、其の精細銳利なる識見を用る幾多の得難き傑作を出だして、其の主張を

實にしたるもの、蓋し又當時獨逸の文界に於ける刮目すべき現象なりと云はざるべからず。レッシングは、長く觀者嬉笑の具に供する娛樂的の戯曲を作ること、満足せず、其の戯曲をして觀者に道德的感化を及ぼすべきものたらしめ、又之れによりて其の父に對し、其の唯だ浮きたる目的に向かひて生涯を捧ぐるものに非ざることとを證せんとせり。かくて彼れは其の『マライガイスト』(Die Freigeist)に於いて、氣高き神學者と尊ぶべき自由思想家とを並べ出だして、教書に對する自由思想家の癖見が如何にして矯正せられしかを描き、『デーユードン』(Die Yuden)及び『デムシヤツ』(Der Schatz)に於いて、又世教に裨益する底の事柄を寫せり。されど、彼れは決して詩歌を世教道德に隸屬せしめむとしたるにはあらず。

レッシングが主要なる戯曲の中、最も初めに現れたるは、一千七百五十五年に出版せられたる『ミス、サラ、サムソン』(Miss Sara Samson)なり。此の作は彼れがメデアの希臘古話を、近世化したるものにして、其の注意せらるべきは、主として當時に於ける中流社會の實狀を描寫せる點にあり。浮氣なる遊冶郎あり、其の初めに相愛せる婦人をふり棄て、他の女と逃走せり、されど彼れの意、其の女と結婚せんと欲する

にはあらざりき。捨てられたる女は怨みて彼れを追ひ、彼れを難詰して其の兒を殺さんと嚇し、而して終に、其の競争者たる女を殺しぬ。之れを『ミス、サラ、サムソン』の梗概とす。彼れが是等の卑しむべく恐ろしき人物を描くや、之れに被らすに英吉利人の假面を以てし、而して英國演劇例へばツルローガ『倫敦の商人』の如きに倣ひて此の劇を成せり。篇中人物の對話には、凡べて散文を用ゐ、而して其の對話の激しき烈なる感情に充ちたる、往々讀者をして顔を背けしむるに至るものあり。此の戯曲は獨逸に於ける中流社會を主題とせる悲劇の嚆矢にして、レッシングが之れを作るや、此の種の戯曲は大に流行を極め、凡べて之れと類を異にするものはむねの戯曲を壓倒せり。蓋し、彼れの始めたる此の新戯曲の盛行せるには種々の原因ありしが、作家が切に自然に忠實ならんと望めること、彼等が近世の中流社會若しくは貴族社會の人物を描けるものが古代の君王侯伯の運命を叙せる作に比して遙かによく觀客の感を惹くべきを信ぜること及び、彼等が當時流行せる佛蘭西風の擬古的悲劇を排斥せんと望めること等其の重なるものなりき。されど是等中流社會を主題とせる戯曲は後不幸にも、一方に於いては、感覺的描寫に墮落し他方

に於いては平凡なる事柄を寫すの弊風を生ずるに至れり。

『ミス、サラ、サムソン』はレッシングの生涯に於いて、及び、彼れが詩歌に於ける發達の経路に於いて一期を畫せるものなり、而して、世間が此の作に對する喝采の聲、猶ほ彼れの耳邊に囁々たるに當たり、彼れは、更に高等なる他の戯曲を作らむとして、一千七百五十五年の秋ライプツヒに歸りぬ。

一千七百六十三年、レッシング『ミンナ、ファン、バルンヘルム』(“Minna von Barnhelm”)を公にす。こは、獨逸の劇壇に現れたる最初の眞國民的戯曲と稱せらるゝものなり。

此の作は、材を七年戰爭中の事柄に取れるものにして、伯林を舞臺とし、戰爭後間もなき出來事を事件とせり。而して作中に現はれ來たる人物は從來の劇に於けるが如く、希臘人若しくは英吉利人若しくはの名を負はず、又抽象的類型の塊に非ずして個人的性癖を具へ、作者の經驗にて描かれ、又作者の同情を寄せたるものなりき。レッシングは狹苦しき愛國心に就ては與りも知らざりしもの、如く此曲の全体を貫ける調子は、索遜に對しても普漏士に對しても、共に偏する所なし。其の梗概に曰はく、主人公、テルハイムは普漏士の士官なり。彼は戰爭の當時、索遜の貧村より

軍資徵募の任を受けしが、貧民を憫む餘り、自らの財を抛ちて其の負擔に換へたり。戦息み平和成りて、後、彼れは敵に對する此の不當なる所爲の爲めに非難せられ罪せられて軍人としての大不名譽を受け、又甚しき貧苦に陥りぬ。されど、彼れが此の行爲は、戦争の當時に婚を約したる索遜の婦人ミンナの尊敬を得たるのみならず、其の他の人々にも、亦、いたく歎稱せられたり。ミンナは、今や彼れを助け彼れと運命を共にせんとて進み來たりぬ。されど、テルハイムは彼の女をして彼れと不名譽と貧困とを共にせしむることを肯せざりき。ミンナは、初めには理を説きて彼れの決心を翻さんとせしが、其の甲斐なきを見て、更に自らの困窮なる有様に陥りて保護者を要すと詐り説きて、切に其の意を翻さんと力め、終に、其の志を達しぬ。之を一篇の梗概とす。此の作の示す所の趣意は甚だ明瞭にして、人物の性格動作の發展、亦、頗る其の宜しきに合ひ、第三齣に於ける動作の進行は、少く滯滞したる趣あれど、又枝葉の小事件は一篇を貫ける大旨意の進行を助けて巧に運用せられたり。唯だ惜しむべきは、作者が後、再び此の種の戯曲を作らざりしことにて、次に現はれたる彼れの主要なる作『エミリア、カロッティ』は、全く之れと其の體裁を異に

せるものなりき。

レスニングがゾルヘンヒラテルの圖書館に長たるや、専ら諸典籍の涉獵に其の心を凝らしたりしが、ハムブルク演劇の彼れに與へたる印象は、猶ほ盛んに其の心上に活躍し、又戯曲の理想原理等を究むること愈、密なるに従ひて、之れを作物の上に實現せんと欲すると愈、切なりき。此の結果として現れしは、一千七百七十二年に出版せられし有名なる『エミリア、カロッティ』(Emilia Galotti)なり。此の作は、已に一千七百六十年以前に立案せられたるものにして、彼れはフリーゾニアの古話に據りて之れを組み立てたり。彼れは其の血氣盛んなりし壯時にも、他の悲劇の如く、此の作に於いても自由を謳歌せんと欲せしが、後に國事を劇とする考察を捨て、舞臺を近世伊太利の一小邦に變じ、前案を近世化し、改竄して此の作を成せり。此の作を作れる彼れの旨意は當時到る所に見られし腐敗貴族の罪惡暴虐の暴露に在りしが、其の旨意は、よく、簡勁なる寫實的筆法によりて貫かれたり。其の梗概に曰はく、利己心強き君主あり其の行非道猛烈にして自家の欲望を満足せしめんが爲めには、其の臣下の生命を物の數とも思はず。彼れは、其の熾なる色情に驅られ

て思ふまゝに淫慾を逞うし、一人の婦女を見捨てゝは之れを狂せしめ、又新に嫁せる婦女を奪はんが爲めに許嫁の新郎を逆殺せり。而して其の新婦は其の身の辱しめられんよりは寧ろ死せんとを欲し、其の切なる望みにより、其の父、遂に彼の女を刺して汚辱より救へり。劇中に現るゝ人物はいづれも巧妙に描かれたり。性急にして一徹短慮なる、而も自らの性急短慮なるを愛へて深く省み戒めたるエミリア尊むべき老父オドアルド、柔弱陰氣にして、用意密ならざる母、温順正直にして男らしき新郎、愛嬌あり貞淑にして世なれずまた甚だ臆病なれども女子の貞操につきて固く決心せる新婦優美にして才智あり、美術に就きては能く畫師と議論を上下することを得、又其の他の高尚なる學術にも通じたれども、自ら凡べての法律制度の上に在りと信じ、凡べて其の欲望する所を遂げんとし淫行暴虐を逞うせる君主彼れが最初の犠牲となりて半ば狂したるオルシナ、専制的習慣に浸潤して正義名譽の觀念の全く消滅し、其の淫行の奴隸となりたる侍従マリチルリ、是等の人物は、凡べて眼のあたり見るが如く描き出だされ動作の進行發展はた彼れが「ドラマトウルギー」の要求せし如く、ものづからに各自の性格より流れ出てたり。但し、

其の趣構は豫め構設せられ、而して諸の人物は唯だ其の趣構を成さんが爲めに點出せられたるの趣なきにあらず、又エミリアの老父は其の娘を刺して暴虐者を殺さざる點に於いて非難せらるれど、猶ほ其の趣構性格の隙間なく發展して、場へのぼす上の難點をも難なく切り抜けたるもの、皆、レシシクノ天才を證するものといはざるべからず。彼れは「ミンナ」に於いて自家の喜劇の大家たることを證せると同じく「エミリア、ガロッティ」に於いて、其の悲劇の大家たることを證せるなり。「エミリア、ガロッティ」の作者として彼れは獨逸の新劇壇を教ふる真正の師となれり。

「エミリア」の一篇其の結末、エミリア最後の段より傷ましきはなし。清淨無邪氣なるエミリアは暴戾なる君主及びマリチルリが詭計のわなに陥りて免るゝ術なくなりし時に於て父オドアルドは其の女としばしの間會見することを得たり。此の時に當たり、彼の女を凌辱より救ふべき道は唯だ一あるのみなりき。

オドアルド

法律公談の假面を破りて——あはれいふもいまはしや——暴虐人等

が我が儼より汝を愛かんと惡慮ふとは——グーリマルサイの家に汝をつれ行かんとたくなむとは……

エミリア

彼等が妾を裂き行かんとおもふと父上は仰しやる、——我れを彼處につれ

行くことや。彼等は意志ふと父上はのたまふ、あはれ我等に意志なしとあなづるが如き  
彼等の舞振。

オドアルド、それ思へば我れは氣も狂ふ心地がするワイ。我れはこれもて(七首に  
手なかり)二人の中一人は刺し殺し突れん。

エミリア、双を妾にかし給へ、父上。  
オドアルド、イヤ、これは玩弄にする針サヤないぞ。

エミリア、それを貸し給へ、いかで貸し給うて。  
オドアルド、サ、遣らう、サ。

(と七首を渡すエミリア取りて其の身を刺さんとするトタン、オドアルド、双を奪ひ  
取る。……)

エミリア、髪飾の簪を取、切れ、に裂き苦々しき調子にて)

エミリア、ア、ア古へは其の女を助けんとて女の腕に双をとほして辱めより救ひ、再び、  
生命を興へし父もあつた。さりながら、其れは古りたる物器——かゝる父も曾ては  
在りしに、今や、其の如き人は一人もないか。

オドアルド、エ、少なくともまだ一人は在る(とエミリアを刺し)神——あさましき我  
がこの行ひ。 (エミリア父の腕に刺る)

エミリア、傷め害はる、前は簪の花を破り去れる、其の手に接吻させて、父上——  
(君主及びマリヤの登場)  
國君、淺ましき味たらく。こは、エミリア——者共、誰れが彼女の傷けたのサヤ。

オドアルド、エミリアは仕合せ者で御座ります——ハイ全く仕合せ者で御座りる  
する

國君、オドアルドの傍近く進み寄り恐ろしや、こは何事ぞ。

マリヤ、恐ろしの父や。其方向を致したのサヤ。

オドアルド、それがしは簪の花が吹きすさむ風に害はれぬ中に、摘み取つてやつたの  
で御座ります。これ娘さうぢやないかいの。

エミリア、父上、あなたではありませぬ。妾自らが……  
オドアルド、さうぢやない、娘——此の世を去る今はの際にそんなと言やるなよ。

それは其方の父サヤ——其方のあはれな父サヤライノ。  
(エミリア死す。オドアルド、徐に、屍を床上に移す)

いてや、閣下、此處へ御進みなさりませ。ようこれを御覽あれ、閣下は有りふれた懸  
劇同様のものがしが、自ら我が胸に双を刺して相果つると御待設けて御座りませう。

さり乍ら、其れは、閣下がそれがしの心を知り給はぬと申すもの——此處に(ト劍を抛ち  
て)こゝにまッ赤になつた劍がそれがしの犯せる罪の證人に成つて居ります。イザ  
これより牢獄に——次ぎには、宣告を受けん爲め、閣下と共に法廷に、さて後に彼方に行  
きて——あちゆる人間の裁判をせさせ給ふかの全能なる判官の前に現はれ申され  
ん……

暴虐なる侯伯及び腐敗せる貴族社會に對する攻撃の半ば、此の悲劇の裡に隠れた

ること知るべし。

レスシンクが戯曲的才能は未だ此の劇に盡きざりき。「エミリア」現はれて後七年、千七百七十九年に彼れは、更に其の最後の戯曲「賢者なたん」(Nathan der Weise)を出だしぬ。劇場の實際に通じたること、彼れをして「エミリア、ガロッティ」を草せしめたるが如く、神學上の論争は彼れをして「ナタンアル、ワイゼ」を作らしめたり。彼れは此の戯曲に於て、寛容主義を主張し、而して彼れが「サラ、サムソン」に用ゐる又其の當初の企圖には反しながら、猶ほ「エミリア」に於いても幾ひ用ゐたる散文體を捨て、律語體を取り、最も高尚なる題目に被らすに莊重なる形式を以てし、一視同仁の大慈愛の福音に加ふるに、律呂の妙力を以てせむとせり。此の戯曲主題は彼れが「アルテール」と交りし頃「猶太人」といふ喜劇に於いて曾て一たび之れを試み、アルテールも亦、多少の思想を彼れに供せしものにして、其の大骨子はボッカッチの作「三つの指環」の物語より來たれるものなり。この物語の梗概に曰はく、

土耳其王カワテン、錢を要することありて、使を、富める猶太人に送り、尙ほ彼れをして逃るゝ跡なからしめんか爲めに、離離を設けて猶太教、回々教、及び、耶蘇教の中、彼れが何れを真正の宗教として奉ずるかを駈かしむ。富饒にして且つ極めて謹慎なりし猶太

は之れに答ふるに先だち、一の物語を述べんを請うて曰はく、昔し東邦に寶石の指環を蔵せる人ありき。此の指環には、恭しく之れを帶ぶる者は神にも人にも愛せらるゝといふ奇異なる徳ありき。之れを持せる人、死に臨みて其最も愛せる一人の子を呼びて指環を與へ、さて、殿かに命じて曰はく、汝死せんとする時、必之れを汝自らの子にして汝の最も愛する者に與へよ。決して汝が子等の生得の權利に由りてすることなかれと。斯くて、此の寶環は、代々父が最愛の子に傳へられたり。最後に此の寶環を有せし父は三人の子を持ちしが、いづれも温良、誠實の徳ありて父の彼等を愛するも、亦差等なかりき。かゝれば、父は其の子の一人のみ、此の寶環を與ふるに忍びず、乃ち之れに換して父自らだに眞偽を辨別し得ざるばかりなる他の二環を作りて之れを三子に分ちらぬ。父の死するや三人の子は何れも同一の請求をなし、かども、誰れとて、何れを眞に眞の寶環なるかを知り得るものなかりきと。猶太人は之を三つの異なる宗教の協合に應用せり。ザラテンは其の昏昧の眞理なるを認めて其の請を容れ、又其の求むる所を得、爾來朋友として猶太人を遇せり。

ボッカッチが此の物語は、十一世紀の頃には西班牙王の事として持てはやされ、十七世紀の頃には三人の兄弟はピーター、マルチン、及び、ジョンの三人なりとせられ、種々に附會せられて傳播したりしが、レスシンクは之を用ゐて十一世のに於けるが如く、寛容主義を表さむとしたるのみならず、之れと共に、廣く、仁愛の福音を傳へむとせ



り。されどポツカッチのレッシングに供せるところは、さまで多からず、後者の前者に假りたりと見るべきは、第五齣の意匠、及び猶太人ナタンが幾多の試験にあひたる後、遂に勝利を得る危急の場景に過ぎざりき。レッシングが此の戯曲の中に描ける猶太人ナタンは、彼れの友にして猶太人なるモーゼス、メンデルスゾーンの如く賢明善良なる者なりしが、彼れは、更らに趣味多からしめ、又、觀者の感惹かんが爲め、其の妻及び七人の子が同じ日に耶蘇教徒に殘殺せられ、自身も亦虐待せられて悲嘆に沈める者としてナタンを描けり。されど、ナタンの性行は實際基督教の教旨に一致せり。彼れは、其の敵を愛して基督教徒の子を養たり。基督教徒と同々教徒とは、かく、家族關係によりて結付けられ、而して一の猶太人は、血族上の關係によるとなく、唯だ、其の氣高き品德によりて彼等の間に迎へ入れられたり。

此戯曲に於ける人物の行爲は『エリミア、ガロッテ』のに於けるが如く、凡べて各自の性格より、おのづからに流れ出て、而して、其の人物は活如として特殊の個性を具へたり。曲中に於ける人物は、多くは、彼れの親交し精察したるもの、模寫なるらし。ナタンは、商人、又、哲學者にして、彼れの友モーゼス、メンデルスゾーンに酷似し、克己

同情の心に富み、歎美すべき品德を具へたり。彼れは、富みたれども吝かならず、賢明にして旅行を好みき。彼れは實に指導者として哲學者として又朋友として比類なき人物なり。彼れが理想に向かひて進むや、細心なれども臆するとなく、又、惡人を除くの外、凡べての者に向かひて、其の寛容主義を實行せり。彼れが養女レッハ（レッシングの繼女マルヘン、ケーニヒによりて描けりと稱せらるる）を養育するや、質朴、誠實なれと教へ、熟練なる薰陶法によりて、其の天性の純粹無邪氣なる有様を保たんとせり。かくして、レッハは、子供らしく素直に生ひ立ち成人に至りても戀愛に就きて毫も知る處なく、戀人の切なる訴も更に其心に通せざりき。而して誠實敬虔なる彼の女の愛情は、悉く、ナタンの一身に集注し、而して、彼れを生みの父なりと信じたり。曾て、ナタンが他に在りし時、恰も危険なる事の彼の女の身にふりかゝりしことありしが、ゆくりなくもテンプラルに救はれ、而して、ナタンが歸りて彼女の迷夢を覺ますまでは、救助者を天人と思ふほどに恍惚たりき。テンプラルは公明正義の武士にして、唯だ猶太人ナタンに對してのみ倨傲なる振舞をなしたりしも、ナタンの爲人を知るに及びて直ちに之を改めき。蓋し、彼れは、若氣の情熱に驅

られて無分別なる所爲に出で、ナタンを危うして、自ら悔恨の情に苦しむに至れるなり。サラデンは軍人若しくは事業等の中に少なからぬ熱情的且つ神経質なる人物なり。彼れは容易に激すれども、又容易に忘れ去るを常とす。彼れは其の兄及び妹を敬すること甚だ厚く、彼れの熟知せざる實際向きの事業に就いては、事毎に謹慎惻愴なる妹の指導に従ひたり、恐らくレッシングが其の妻の指導に従ひしが如く。されど、彼の女の彼れに及ぼせる影響は必しも善良ならず、而して彼の女が彼をしてナタンに對して取らしめたる行爲は彼の女及びサラデンの不信用を買ふ基となりき。ナタンの友デルフ、シは質樸、善良にして氣高き人物なり。彼れは乞丐と迄なりたれども、ナタンは之れを呼びて眞正の王と稱せり。彼れは一時土耳其王の出納役となりしが、遂に逃れ出で、此のいまはしき職を去りき。レッシングが此の滑稽的人物(デルフ、シ)を描くや、メンデルズゾーンと相知れる猶太人の數學家によれるが如し。ナタンに養女を配せし執事又デルフ、シと同むくいまはしき職にありしが、後には基督教會の牧師に事へて信心深き生活を送れり、彼れ亦ナタンの親友となり、彼を尊敬して、神かけて、足下は基督教徒なり、而して世

には未だ曾て足下よりも善き基督教徒あらざりきと稱揚したりき。

『ナタン、デル、ゾイゼ』に於ける是等の人物は、凡べて、多少意識的にナタンと同一の意見を有せり。但だ、ナタンは彼等の中にて最も賢明に且つ最も其意見を言ひ表はすに適にせる者なりき。レッシングの示す所によれば、是等の意見は彼れ自ら初年よりの意見、詳しく云へば、彼れが初めに伯林に寓居せる時以來の意見なり。曲中の主要なる人物は凡べて特殊の一宗教に執着することに反對し、又、信仰及び國民性の異違を通ほして、人性に普通なる基礎を求め、而して、善良なる行爲を以て人生の最大目的と考へたる點に於いて、凡べて相一致せり。されど、彼等は、又、凡べて有神論を確持し、神の世界を支配することを信ぜり。此の信仰は實に彼等を導ける主義なりき。以上の人々と對照する人物としては、エルサレム教會長及びレハの乳母ダーヤあり。二人は共に神に至るべき唯一の道を知れりと自稱し、而して教會長(レ、シ)が神學論を闘はしたるメルホオル、ゲーツを滑稽的に描けるものと見るべきは、徹頭徹尾其の意見に基きて立てたる教會に全世界を驅り入れんとすの準備を爲せり。

「ナタン、デル、グイゼ」に於いて、異なる國民性及び宗派は人生に遍通せる根本的性情によりて結び付けられたり。かくの如きものは、是れ、人類救済の方法として、レスシンクが夢想せる所のものにして、而して此平和的精神は、作の全体に行き亘りて甚深の趣味を添えたり。さて又樂しき人物、事件と、真面目なる及び感動を惹くべき人物、事件とは、此の曲に於いて相亦錯し、而して、かく、人世に於ける光明暗黒兩方面の相參差せしことは、此の曲をして唯だ、氣高き感情、寛大なる行爲等の純理想界にのみ局せしめずして、人生の實際を穿ち、一般世間に讀まるべき曲たらしめたり。レスシンクが戯曲の主要なるは上に述べ終へぬ。此の他彼れの著作として記憶すべきものは、政論的著作には「エルンスト、ウンド、フアルク、ゲスブレーヘ、ヒュール、フライマツレル」(“Ernst und Falk, Gespräche für Freimaurer” 一千七百七十八年出版あり、神學論には「アンテメーツ」(Anti-Goetze)あり。哲學的論文には「人類教育論」(“Erziehung des Menschengeschlechts” 一千七百八十年出版あり。又歴史哲學に關する彼れの述作の如きは、重大の價值あるものなれども、是等は、此の小文學史の中に詳論すべき限りにあらず。要するに、レスシンクは文學評論家、劇詩家、又哲學者として、共に、一方に卓

絶し、其の人物性行又頗る高尚なるものありき。感情若しくは知識的理解を第二として、行爲を人間真正の目的なりと見、有徳の行爲を以て真正の宗教的生命に觸るべき唯一の道となし、報酬名譽等に關せずして義務を行ふことを道徳上の理想となるが如きは、彼れが主張の主要なるものなりき。

クロプストックは詩人なり。されど、彼れは、詩歌術の規則に就きて知ると甚だ少なかりき。レスシンクは、高義に謂はゆる詩人にあらず。されど、彼れは、真正の又偉大なる批評家なり。若し、クロプストックの詩才にして、常に、レスシンクの批評に導かれ、たらむには「メシアス」よりも大なる作は、彼れが手より出でて、獨逸の文壇を飾りしならむ。クロプストックとレスシンクとは、要するに改革者なり。「メシアス」の作家は、獨逸近世の文壇に於て高上なる熱情を詠する第一歩を爲し、「ラオコオン」の著者は、深大なる思想を技術の美と結び付くる第一歩を爲せり。二者は、實に國文學に與ふるに、熱と光と、言ひ換ふれば、生命と秩序とを以てせしもの也。前者は、文士の價值ある高上なりといふ意味にて、題目に力を用ふべきを教へ、後者は、如何に其を寫し出だすべきかを示せり。前者の詩人的天才と後者の批評的能力とは、其れ

自身已に獨逸文學を飾りながら、之れと共に繼ぎ起こる者をして、更によく同じ文壇を飾らしむるの手引きをなせるものと云ふべし。

### 井ーランド

の思想は、全く、クロプストック。レッシング等のと異なりき。彼れの考ふる所によれば、詩人の天職は主として讀者を娯ましむるに在り。而して、此の要求を充たさんが爲めには第一に調和的ならざるべからず、委しく云へば、其の主題と文體とを其の時世の好尚と調和せしめざるべからずと考へたり。蓋し、井ーランドが始めて小説を作りし當時に於て、上流社會多數の好尚は猶ほ佛蘭西風なりき。數十年このかた、獨逸の文學は著く發達し其の体裁亦見るべき進歩を爲したれども、其は皆當時の貴族社會に適する者ならず、而して、朝廷及び上流社會に愛讀せられんが爲めに最も重要なるは、第一に其の主題を變更することなりき。井ーランドは此の點に着目して、主題變更の必要を認めたり。而して、彼れは、優雅に又活き／＼と散文及び律語詩を作りつゝ、其の識見を廣め、又、其の描くべき題目の範圍を擴張せり。彼れは古代中世の文學及び近世歐洲の小説より夥多の材料を借り來たりて、之れ

を上流社會の好尚に適する様に寫し出だせり。クロプストックの熱誠及び基督教的情操は彼等上流社會に取りては、くどきに過ぎたりき。彼等がクロプストックの誇張的なる、而して、時としては紛亂せる書き振りを嫌ひたること亦故なきにあらず。レッシングが描寫の体裁に就ては特に非難の加へらるべきものあらず。されど、レッシングは其の本領とする所の緻密なる思索にありしより、讀者をして、娯らしむるよりは寧ろ思考せしめんと望めり。是れ、已に、通常の讀者、殊に、當時の上流の讀者に取りて堪へらるべきことにあらず。加之、彼れは貴族社會の喜び迎ふるが如き題目を取ること拒みたり。情熱を尊び商尙なる題目を擇ぶクロプストック一流の作、時尙に逆らひ、國民の固有性に合はしめんとして、理窟に流るゝ傾ありしレッシング等の著、是等は、共に、當時の上流社會に於ける多數の讀者の注意を惹くべきものにあらず。井ーランドは、是等の偏見を看破して、彼等上流社會の嗜好に適する作を作らんとせり。彼れは、初めヒエテ、イスト風の教育を授けられしかども、其の作するに當たりてや、是等の羈絆を脱し、また、題目の選擇及び描寫に於いて、些も其の束縛を受くることなかりき。かくて、彼れが作の文體意匠及び描寫に於

ける新特色は、直ちに當代文士をして一驚を喫せしめたり。嚴酷なる批評家すら、猶ほ其の異才を稱へたりき。

クリストフ・マルティン・ヰーランド(Christoph Martin Wieland)はルーツェル派の教會に屬せる牧師の子にして、一千七百三十三年、ヰーペラ、ハ市に近き一小村に生まれき。彼れがマクアブルクの近傍なる學校及び、トリーヒンゲン大學に學ぶや、廣く英佛二國の書籍に涉獵し、又希臘羅馬の古文をも讀みて、傍ら、律語詩をものしき。彼れは、夙くより詩歌に熱心なりしが、ヰーリヒのポードメルと相知るを得て、其の家に止まること二年、其の間ちほむね高尙眞面目なる題目に就きて律語詩を作することに従事せり。彼れは、手初として『サイラス』(Cyrus)と題する敘事詩を作り、次いで『アラハムの吟味』と題する敘事詩を成したり。此の時に當たり、彼れは表面上敬虔主義を奉じ、『基督教徒の情感』と題する書を著して純文學に對し嚴酷なる評論を爲し、其のヰーリヒを去るに及んでは、全くポードメル及び他の先輩等の教示を忘れたるが如くなりき。其の後彼れがヰーペラ、ハに居を定むるや、上流社會の紳士等と交りを結ぶことを得、而して、該の社會の好尙の事毎に、敬虔主義

及びポードメル等の唱ふる所に反するを見たり。それより、彼れは、専ら、心を佛蘭西の小説に傾け、又、英吉利の文學をも研究して、流暢なる筆もてシニクスピアの戯曲數種を譯し、又、獨逸の文壇には極めて新奇なる昧もて小説を作れり。かくて、一千七百六十四年に至り、彼れは、『ドン・シルフィオ、フォン、ロザルフ』(Don Sylvio von Rosalva)を作り、中に於いて、敬虔主義を主張する學者を嘲弄し、此の主義を呼ぶに狂言の名を以てしき。蓋し、彼れは、當時猶ほ詩歌を教訓に資するの主義を持したれども、之れを持すること、初めの如く眞面目ならざりき。蓋し、當時、彼れは、極端に流れざる範圍に於いて、ヰピクロス派の快樂主義を喜びたればなり。かくして、彼れは、敬虔主義をはじめ、當時に行はれたる諸々の獨斷說を冷笑的に攻撃し、其の著『アスバリア』(Aspasia)に於いては、棄世禁欲の敬虔主義の終に、感覺主義に陥るべきことを暗示せり。是等の意見は、ヰーランドの詩神は、其の尼寺風の服を抛げ棄て、流行婦人の如く裝へり。と評せられたるほど、斬新に且つ活き／＼と寫し出だされたり。レッシングは、滑稽的に之れを評して、ヰーランドの詩神は、天を見すてたり。と云ひき。

一千七百七十二年非ーランドは、ヴィマルに行き、某公爵夫人の子の師傳となる。彼れは、其處にて、「トイッテメルクル」(“Teutsche merkur”)といふ定期刊行の文學雜誌を創刊せしが、其の雜誌は、直ちに、獨逸文壇の木鐸と認められ、爾來、永く其の勢力を持続しき。彼れの晩年に至りては、其の名聲昔日の如くには、あらざりしも、猶ほ精勵して文筆に従事し、而して其の『ムザリオン』(“Muserion”)及び『デル、ノイエ、アマデイス』(“Der neue Amadis”)一七七一出版に現されたる傾向は、引きつゞきて、ヴィマル及び同じ市の邊りに永住せる間にも、のせる散文小説に現れたり。非ーランドは、ヴィマルにて、數多の詞友と交遊し、豊かなる生計を營みつゝ、高齡に至るまで著作に力を注ぎたりしが、一千八百十三年終に八十歳の高齡を以て歿しぬ。ゲーテ、其の葬に臨み、非ーランドの性行に就きて頌辭を述べたり。非ーランドのゲーテと交るや、其の雅量才智に感じ、且つ意氣の投合せるより、厚く懇懇を通じたり。フリードリヒ、ヤコビは、其の關係を記し、當時の文士にしてゲーテの盛名を忌まざりしは、唯だ非ーランド一人ありしのみと云へり。深く鑿査する時は、此の評言全く中れりといふべからざれども、此の一特性は、僅かに、彼れが英徳の一たりしに相違なし。

非ーランドの著作に精勵なることは、實に驚くべきものありき。其の初年の作を措きて、一千七百七十二年以來、彼れの作りしもの『オベロン』(“Oberon”)、*“Stories and Fairy Tales”*、*“Wintermarchen and Sommer marchens.”*あり、其の他、彼れの散文小説『アガト』(“Agathon”)一七六六—六七、『ディー、アプデリテン』(“Die Abderiten”)一七七四、『アリス、テッポス』(“Arissippus”)及び七十歳の後にものせる二篇の外、幾多の流麗なる律語の作あり。而して、是等は何れも、彼れが文牒の好標本たるべきものなり。一千七百九十三年及び其の以後に於いて、彼れは、其の全集四十三卷を纂めて之れを公にせり。彼れは、又、多くの創作の外、ホレーヌの書翰及び諷刺文、ルツィアンの全著作、シセロの書翰、アリストフ、テヌスの喜劇數種及びシェイクスピアの戯曲幾篇を翻譯せり。

吾人の思想には、深きが如くにして、實は深からず、廣きが如くにして、實は廣からざるものあり。非ーランドは、深奥ならんと企てしこと、稀なるが故に、比較的、第一の缺點に陥ることなかりき。彼れは、寧ろ、展、冗長の弊に流れんとせり。彼れの描寫する事は、旨意明瞭にして、理解し易く、其の少しく密ならんとして、之れを繰り回す

や、やがて、くどしと感ぜしむるほどなりき。彼れの主張は嚴酷ならざりしも、其の寫す所多くは教訓的にして、往々彼れ自身物語の半ばに出で、讀者の興を破るこゝとあり。彼れは上にも云へる如く、讀者を娛ましむるを目的としたるが故に、さほどに事物に熱衷することなく、若し、其の熱心なることありとせば、敬虔主義より起る忌むべき傾向を讀者に告ぐる時にありき。彼れは初め、此の主義の學校にて嚴格なる教育を受けしかども、其の作するや、さきに彼れを教へし教師をも見逃さずして、假藉なく之を攻撃し、又、其の學校の過ちを暴露せり。即ち其の詩篇『ムザリオン』、『デーグラッティーン』(Die Grazien,)及び『Lamented Loxe』の如きは、彼れが、其の中に於いて、練り返し、禁欲厭世の風を非難せるものにして、最後の詩篇に於いては、戀神カユレトと美貌とが天國より追放せられて共々に下界に來たりしが、天國も此の二人なくて寂しく物憂く感ぜられたるが爲めに、彼等は直ちに喚び返されきと記せり。『ムザリオン』は、非ラランドが初年の作に比して、贅長ならず、ゲーテが時に愛讀せりといふものなり。而して、中に寫す所は、幼時嚴酷なる教訓を受けたる青年ありて、一旦社會に背きて、隱遁したるも、直ちに其の性質の、隱者たるに適せざるを悟

りぬといふに在り。律語を用ゐたる他の作『アルノイエアマデス』に於いては、知識と美貌とを一身に兼備せる者の容易に見るべからざることとを遊戯的に寫し、而して篇中の主人公はかゝる完全なる者を、幾歳カカか空に求めたる後終に平凡にして小賢しき妻と婚しぬといふことを描きたり、此の篇の結末に冗長の嫌ひあれど、物語中の目貫と稱せらるゝ所なり。

『アガトン』は論争的又教訓的なる散文小説にして、其の意匠の發展と行文とは往々冗長にして讀者を倦ましむ。非ラランドは之に於いて幼時の記憶に浸み込みたる嚴酷なる主義を排斥し、嚴酷てふことに對して、嚴しき攻撃を爲せり。而して是等の思想は事を古哲學の教授に託して寫し出だされたり。其の筋は希臘の少年アガトンといへる者アルファイにて哲學を學び、後にデオニシオスの朝廷に仕へ、其處にて曾て教師に授けられたる道徳理論の全く實行すべからざるものなることを悟りぬといふにあり。此の物語の興ふべき教訓は往々にして直接に作者自身の日より興へられ、小説としての妙味を殺ぐこと少なからず。吾等は此の作に於いて前には道徳を害ふとて嚴に情愛的文學を排斥して後に自らエピクリオス風の

快樂主義を取り、前にはポロメルの教を奉じて後にアルテール等の所爲を襲ひ敬虔主義に熱衷して後に娛樂的文學に身を委ねしポロランドが心機の一轉してより、彼れが後者の立脚地に立ちて如何に前者を嫌惡攻撃せるかを見るべし。ポロランドが著作の中無上の傑作にして巧妙を極めたりと稱せらるゝは『オペロン』なり。彼れが此の結構大に趣味豊かに變化多き作を成すや、先づ夥多の書籍に涉獵し、其の取るべき文牀韻律の如何に就きても、亦精細に研究せり。其の材料は彼れが佛蘭西の小説圖書館、シェイクスピア、及びテロソーに於いて見出だせるものの結合より成り、其の意匠趣構は複雑なるにも拘らず、頗る明瞭に寫し出だされたり。此の作の優れたる所多きか中にも、目のあたり見るが如き活々たるなり、起り來たる事柄の花々しきこと、人物性格のおのづからなる發展等は『オペロン』をして歐洲近世の文學に於ける有數の傑作たらしむる所以のものにして之れを讀む者は一部々々の面白き節にのみ留意せずして、我れ知らず回より回に進み行くを常とす。此の作は其の調子より云へば、徹頭徹尾、眞正の叙事詩にして、これに於いて彼れ自身の性質は其の壯時の作に於けるが如くあからさまに現れ出づる

ことなく、其の諷刺も著るく適切となり、其の人情を叙述し解剖するあたり、特に甚だ穩當細密なるに至れり。『オペロン』はかくして世間歡呼の裡に迎へられき。レッシングは讚美の辭を以て之れを迎へ、ゲーテの如きは、黄金が黄金にてある間、又水晶が水晶にてある間、『オペロン』は長へに讚美せらるべし。とまで稱揚せり。されど、一方にはかくも讚稱の聲の盛なりしと共に一方には之を貶せし苛酷なる批評家なかりしにはあらず。而して、著者の主意は、此の作を以て、唯だ唯だ奇怪にして確乎たる旨意なき者とし、作者は唯中古の奇異なる物語及び神仙術を、諷刺的に寫し出だし、輕快なる書き振りによりて喝采を博せしに過ぎずといふにありき。『オペロン』の公にせられたるは一千七百八十年に在りき。ポロランドはこれより先一千七百七十四年に、『アッデル人』(Die Abderiten)と題せる諷刺的時代小説を公にせり。此の作も、亦彼れが傑作の一に數へらるゝものにして、善く彼れが特長ともいふべき輕快洒脫なる文牀に相應せる題目を選べるものなり。『アッデル人』は獨逸に於ける當時の状態と彼れ自己の上に起これる出來事とを織りませ、希臘の假面を被らせて當時の社會(殊に其の生地ヒッペラッハの事を敘せらるし)を現實



し、諷刺し嗤笑せるものなり。此の作に於て、アファル人は、冷笑的に賢明者として描き出だされたり。彼等は高額を擲ちて立派なる潜水器を造り、莊麗なる彫刻を以て之れを飾り、人身ほどなるキナスの位像を高さ八十尺の臺上に安置せり。アファルに遊べる旅行者に讚稱せられむとてなり。されど、潜水器の邊には些の水だにあらざりき。彼等が背理の所作はこれに止らず、篇中の最も秀逸なる部分の一をアファル人が演劇に對する好尚を叙せる節なりとす。篇中に「イーリヒデスの『アンプロメグ』が樂劇として演せらるゝ所あり。優人の場に臨むや、文句を忘れ、或は、樂曲記號を忘るゝ者あり、而して勇者を演ずるものは、節を誤り、臺詞を誤り、若しくは他の戯曲の文句挿みても、大聲に勇ましく、だに言ひ放てば、必ず、喝采を得、美人を演ずる者は、笑ふ時にも泣く時にも、怒る時にも、悲しむ時にも、勇む時にも、恐るゝ時にも、同様に鶯の如き細き聲して、だに歌へば同一の文句を兩三度繰り返しても必ず、も一度く」といふ、歡呼の起こるを常とす云々。されど、篇中にて最も面白き部分はアファルに於ける大訴訟事件を長々と記せる節にして、こは、非・ラン・Pが他の作に於ける佳所と相比せらるべきものなり。叙して曰はく、アファルに

唯だ一人の齒科醫ありき。いたく世間に持て囃されて、其の術を乞ふもの遠近に多かりしが、彼れは、常に粗服を纏ひて、此所より彼所に旅行しき。或る折のことなりき。彼れは、病家に行かんとて、廣漠たる野原を横ぎれる時、驢馬と其れに乗れる持主とを雇ひて、其の携へたる小さき荷物を運ばしめたり。時恰も盛夏にして、炎熱の堪へ難きに、見渡す限り茫々として、日光を避くべき木立蔭蔭だにあらざりき、かくてこの齒科醫は、疲れたる餘り、しばし、驢馬の影に憩はんとしぬ。驢馬の主人は之れを見て、齒科醫が驢馬の陰影を占有するとを咎め、驢馬をして荷物を運ばしむることをこそ約したれ、其の影を用るしむることを約せずと言ひ張れり。かゝれば、齒科醫は直に驢馬の影さす所を離るゝか、若しくは、影を用るが爲めに約束外の賃錢を拂はざるべからず。されど、齒科醫はしかすることを拒みたるがゆゑに、端なくも、茲に裁判沙汰となりぬ。アファルなる知名の法律家等は、凡べて、双方の辯護に雇はれ、原告と被告とは各數多の知人の後援を得て、烈しく法廷に争ひ、而してアファル全市の人民は二派に分かれて、驢馬黨及び影黨の下に相闘げり。兩派の相争ふことの激烈なりしや、異黨の者卓を同じうして語らざる程なりき云々。

井ーランドが此の訴訟の顛末を描くや、其の叙述は實に全篇の半ばを占めたり、されど此の長々しき叙述も、此處には特に許されざるべからず、何となれば此の篇の好笑味のほほかたは、其の冗長なる所に存し、諷刺の真意、亦訴訟進行の遅々たるを寫す所に在ればなり。

社會及び政治に對する井ーランドの意見は、最もよく、其の作『黄金の鏡』(Der Gold-  
en Spiegel) 一千七百七十二年出版に現はれたり。彼れの政治論は、其の思想をル  
ンー及びブルテールより借り來たれるものなりき。されど佛蘭西革命を見てよ  
り、彼れは、輕々しく消極的基礎の上にユートピアを畫くことを止めたり。彼れ曰  
はく、社會に於ける悪しきとは、凡べて壓制及び迷信より起ると。されど其等の  
根本的惡事の淵源につきて、彼れは少しも語ることなかりき。彼れは又『ペレク  
リス、プロトリス』(Peregrinus Proteus)に於いて、狂熱者を嘲笑せり。而して、其の記事  
は彼れと時を同じうせる熱心なる愛國者ラフテール(Lavater)と特に關係あるも  
のゝ如し。されど、ラフテールの異常なる性質に就きては細かに記す所あらざり  
き。物語はペレクリリス及びルツィアンがハーデスと云ふ所に出て遇ひてなせる

對話の跡に述べられたり。而して、狂熱者ペレクリリスが得意氣に其の生涯の冒  
険談を爲せば、之れを聞き居るルツィアンは、輕蔑的調子を以て面白さうに之れを聞  
き、又時々翻弄諷刺するが如き註釋を附け加ふといふが、其の趣構なり。『アリステ  
ーボス』は、彼が書翰の跡にも、のせる小説にして、ライスといふ者は、其の主なる人物  
の一人たり。井ーランドは、此の小説に於いて、彼れの説き古したる例の樂世術を  
用ゐるにふるしたる調子にて描かんと企てたり。中に於いて、實用あると否とは眞  
理非眞理を分かつ尺度にして、快樂は德行の目的なりといふ趣意を描き出だせり。  
道德の事に關しては、彼れは、常に嚴酷でふことに反對し、又特に、獨斷主義を排斥し  
き。其の言に曰はく、人假令、齡を重ねることオストルの如くなるを得、七聖人より  
も七倍賢明なることを得とも、其の意見を吐露するに當たりては、宜しく懷疑主義  
に近しと非難せらるゝほど慎重なる調子を以てすべし。

井ーランドの作は、おほむね、彼れの流暢平易なる文體を喜べる批評家に稱揚せら  
れたり。されど、之と共に、彼れと、道德上及び文學上の意見を異にする作家批評家  
等によりて、嚴しく難せられき。當時の文士等の中には、『ムザリオン』及び『アナト

ン」等の如き作を貶して、陳腐野卑なりと罵れるも少なからざりしかど、是等の作が當時流行せる好尚を生きくと傳へたる點のみに於いても、猶ほ捨て難き歴史的の趣味あるは明かなり。ポークランドの作に於いて、最も正當に難ぜらるべき辯ともいふべきは、次ぎに掲ぐる一批評家の説なり。而して、此の意見を抱持する者、決して僅少ならざるべし。ドクトル、フィルマル曰はく、「ポークランドは、彼れの時代の人なり、當時盛に行はれし佛蘭西文學の機巧甘美なる茶毒に感染せる讀者、特に思索を迂濶なるものとし、熱情を笑ふべきものと思惟せる上流社會の爲めの作家なり。形式上佛蘭西人に屬せしかゝる人民に對して、ポークランドは、彼等の好尚に適應する様に獨逸の文學を導けり。而して、クロッパストックの辛うじて得、而してレッシングの終に得ること能はざりし稱讃を彼れが早く、其の生時に於いて得たるもの、一に、彼等貴族が、其の作中の材料を好みたりしがゆゑに外ならずと。是れ、此の批評家がポークランドが作に現れたる道德的傾向に對してなせる穩かなる非難の一なり。マクス、ミューレル氏の如きは、殆ど苛酷ともいふべき非難を下して、獨逸の批評家等がポークランドの文學を見よ」に對してなせる嚴しき批判は、彼等が今猶

はポークランドの作に與ふる賞讃と融和すること難しと云へり。

されど氏はポークランドが何れの作に此の批評の當てらるべきかを明示せざりき。ポークランドが諸批評家に難ぜられたる是等の傾向は、彼れの作に倣へるシテ、ホル及びハインゼ等の放逸淫靡なる作に於いて愈、明かに表されたり。ポークランドは、彼等に其の弟子たりと公言せられて迷惑を受けたること少なからざりき。ポークランドが獨逸文學の開發に効し、主要なる功は、長へに忘らるべからず。ゲテすらも、彼れの小説に導かれたると少なからざりき。彼れが思索、情熱若しくは其の他の健全なる好尚に對する抵抗は、當時の文壇に於いて遊戯的、娛樂的といふ分子を、文學特に小説の本領より排斥する傾向の盛なるを見たるに起因せりともいふべく、此の事は彼れが娛樂的方面にのみ流れたることの辨解ともなるべし。彼れは、當時に流行せる情熱的及び思索的傾向を帯びたる作に加ふるに、輕快なる作を以てして、國文學を多方面ならしめたるのみならず、獨逸文學の行はるゝ範圍を南方の諸邦に廣め、又、多くの讀者の爲めに其の想像の範圍を擴げたり。彼れの小説を作るや、材を多くの淵源に求めたれども、彼れは奴隸的に古代の又は外國の

文學に摸倣することなかりき。彼れが其の歴史小説に於いて古代の——特に希臘の——有様を其の儘に叙すること能はざりきといふ非難も正當ならじ。何となれば、彼れは古物學的精密を以て時代小説を作らむと公言せず、又期せざりければなり。彼れが古代の場所若しくは人名を用ゐたるは、仙郷の古代物語を用ゐたるが如く、其の想像を自由に活動せしめ、其の輕快なる諷刺を擅にして當世に描かんが爲めなりき。

井ーランドが滑稽的、娛樂的の作をもつせしより、謂はゆる「激動突進時代」(Sturm und Drang)の詩歌の盛行するに至るまでの間の罅隙を聯絡したるは、井ーランドが盛名漸く衰へて後尙ほ從事したる翻譯事業なり。高齢に達せる他の作家等の如く井ーランドも亦同情を有せざる數多の青年子弟に圍繞せられて、其の晩年に至りき。當時謂はゆる「ハイナンプ」の詩人等(次章に説く所を見よ)は愛國的ならんことを欲して、半ばクロッパストックに従ひ、謂はゆる「創作的天才の人々」は井ーランドの作を貶して平凡なる摸倣的なる又陳腐なるものとなし、が井ーランドが彼等と侮蔑攻撃を交へたる有様は次ぎに述べべし。

## 第七期 (自一千七百七十年至一千八百三十年)

### 四章

グーテの青年時代 宗教政治及び文學 「ストゥルム、ウ  
ンド、ドラング」 ハイマン ヤコビ ヘルデル

六十年の長き歲月を含める獨逸文學の第七期は、其の初めより終りに至るまで、殆どグーテが文學的活動の時代にして趣味豊富に、且つ主要なる出來事に充てるが故に、章を追ひて其の狀勢を叙述し行かざるべからず。余は、此の章及び次ぎなる章に於いて、グーテが其の青年期を過ごしたる時代の主要なる有様、及び出來事を述べべし。思ふに是等の叙述は、グーテの想像的著作に於ける最も著き風格を説明すること鮮少にあらじ。何となれば、彼れの想像的著作は多少皆自叙傳的ならざるはなく、而して、其の當時の時勢に關すること、また甚だ密接なればなり。

グーテ

ヨハン、ヴォルフガング、グーテ(Johann Wolfgang Goethe)は一千七百四十九年八月廿四日  
クライム、クロッパストック、レッシング等が已に著作を始めたる時に於いて、フランクフルトに生まれき。彼れが父方の祖先にて明かに溯り得るは、トリンゲンなるアル